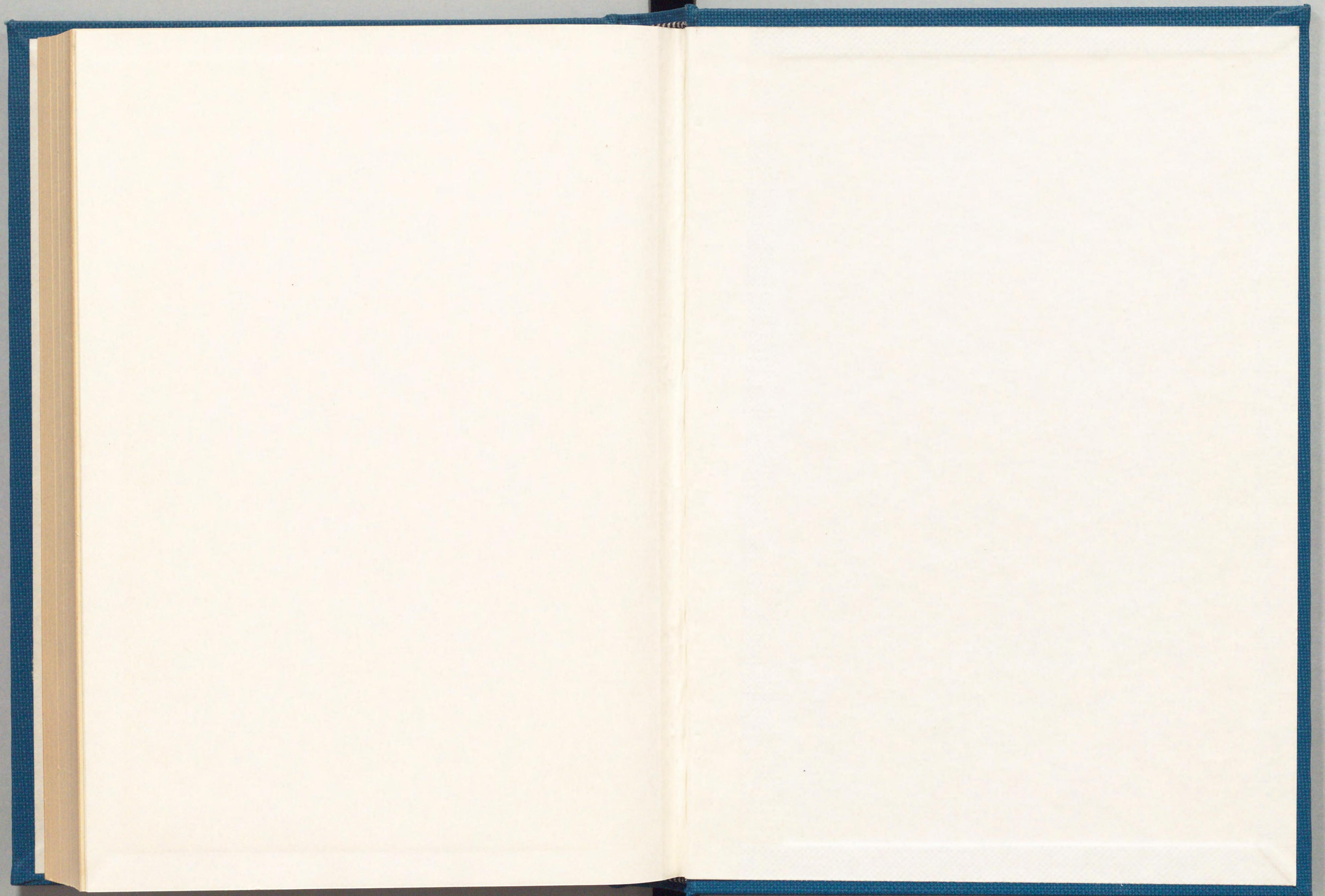
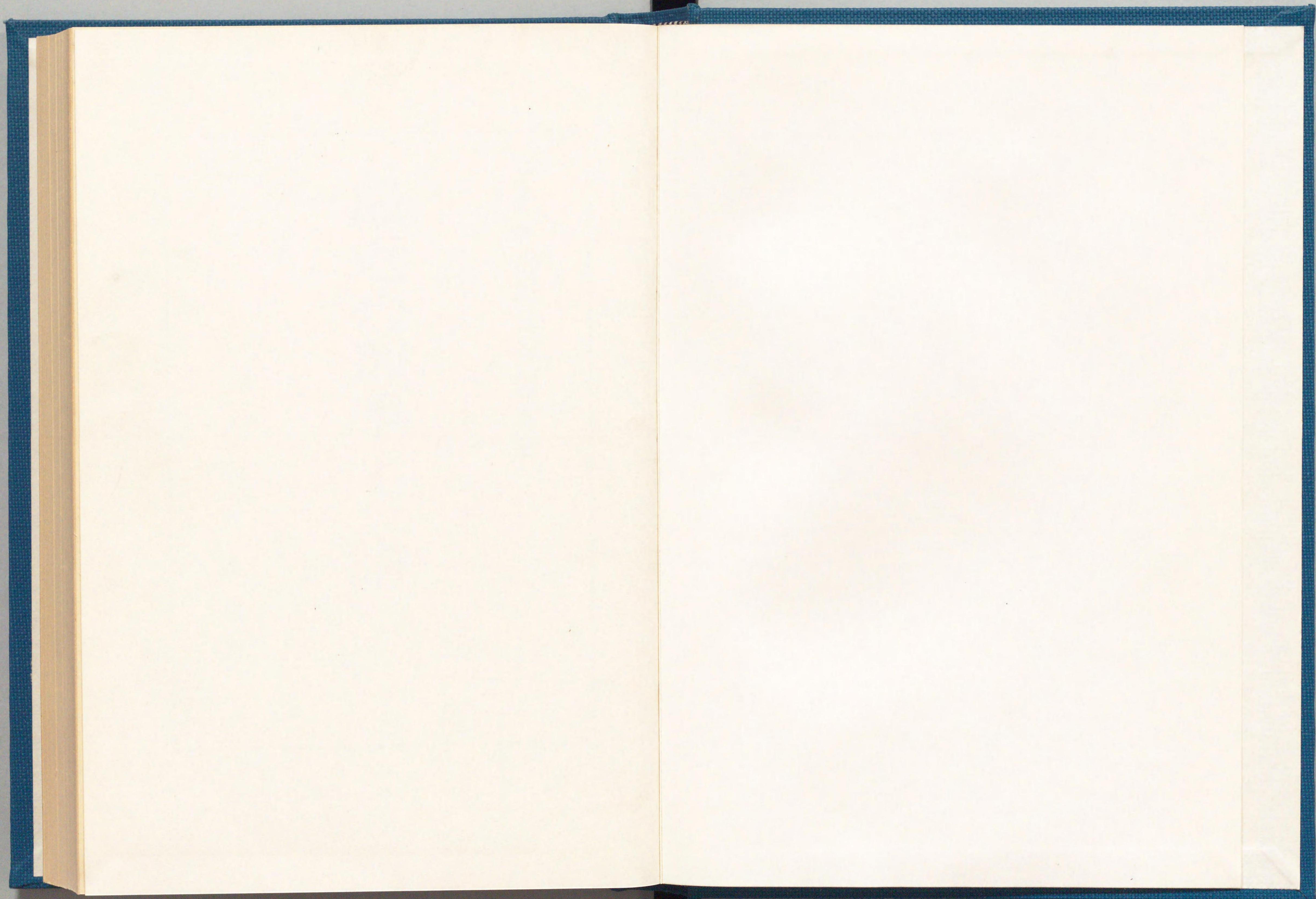




140.17
0756s







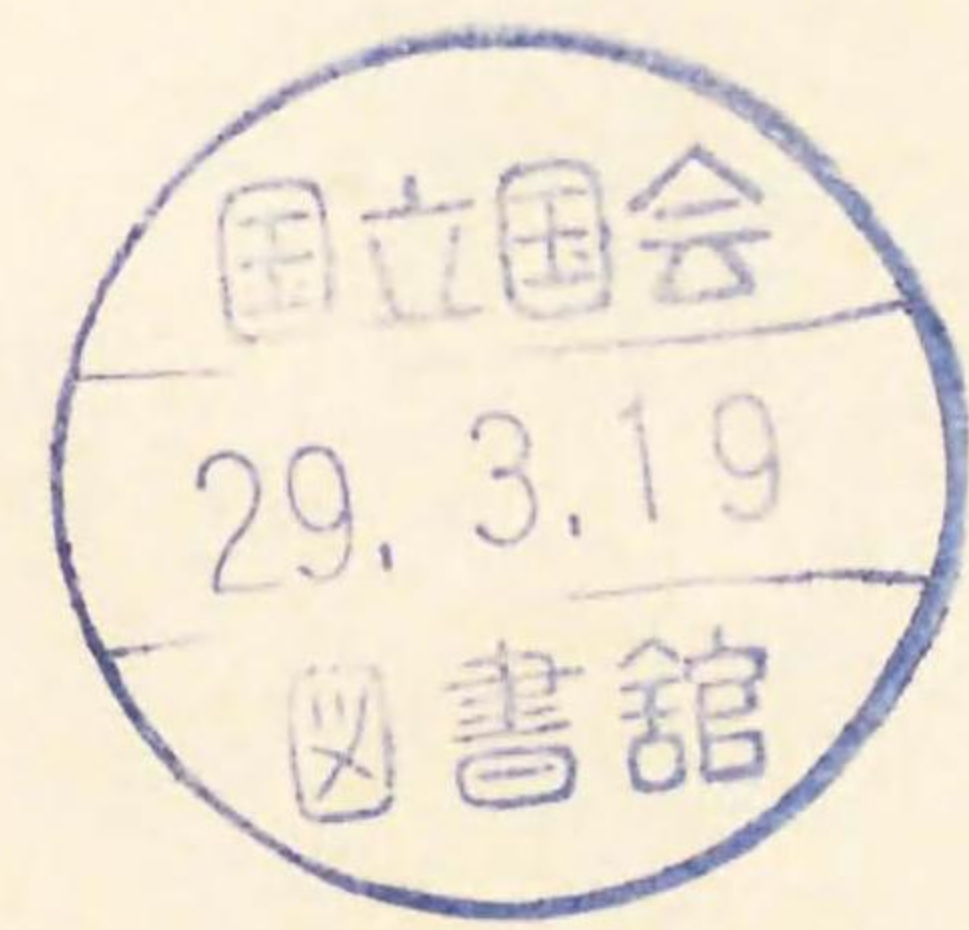
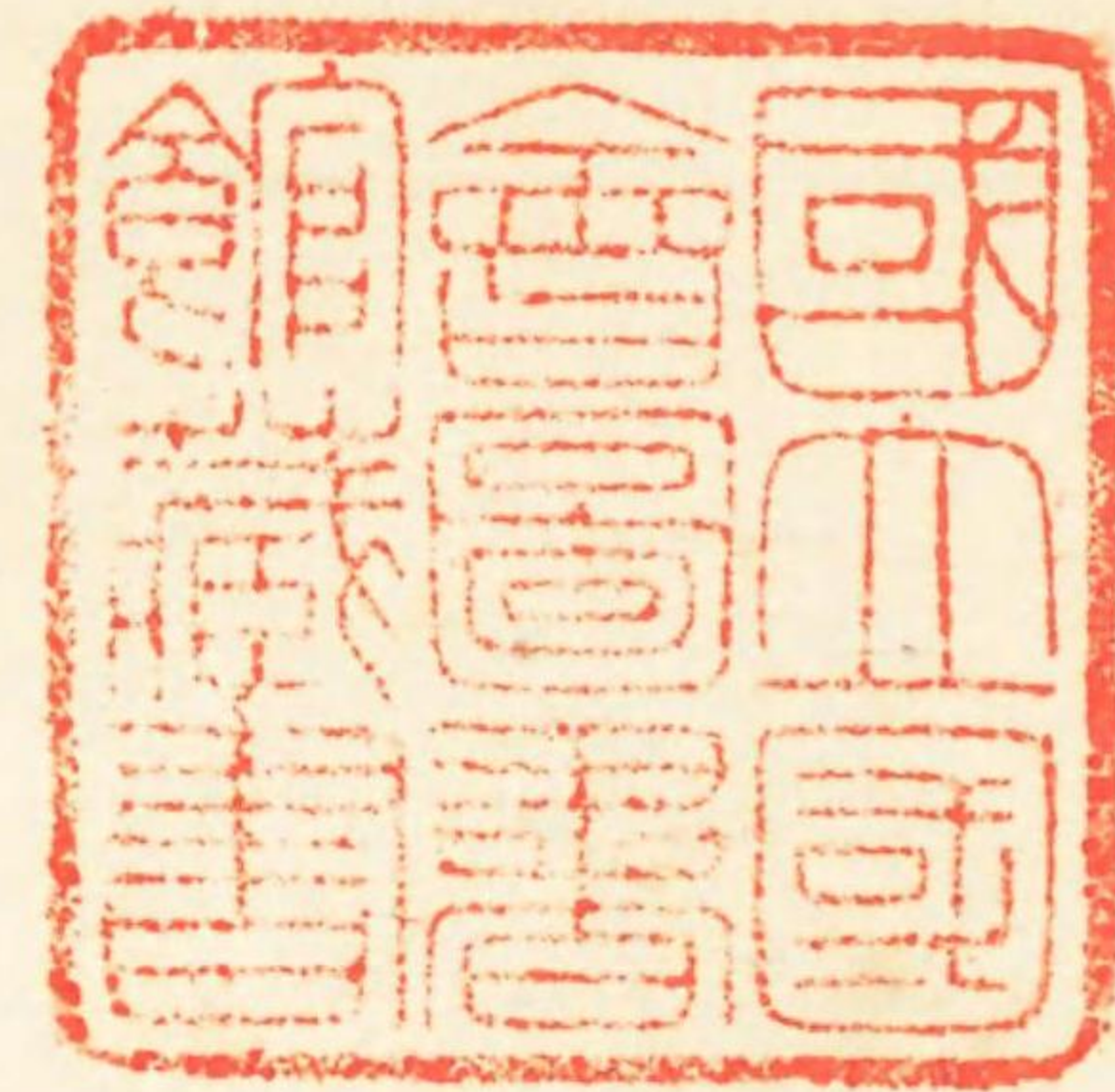
斗 4 B 36

文學博士 小野島右左雄著

最近心理學十二講

東京培風館發行

140.1707560



323398

序

最近心理學は一つの革命期に直面してゐる。これを若し物質科學の場合に比較すると、天動説に對する地動説、出現當時にも當り、若しくはハイベ
 ーによつて爲された血液循環の新發見の前後の時期にも比べられるであ
 らう、故に、現代心理學界は、正に新舊思想の論戰を以つて始まり、遂に徐々と
 向ふ所の道が示され、この新展望の下に特殊研究が續出せる有様であるが、
 これが充分なる組織には達し得ざるの憾を残す時期である。

斯様な時期に當り、これが叙述を企てることは、一面から見ると、至難の事
 業であると共に、他面から見ると、こゝに一步、一步、踏石を投げ、將來のよりよ
 き完成への礎を作ることが、急務の一つであらう、もとより斯様な大事業は
 私の企て及ぶ所ではない。

只、こゝに叙述しようとしたものは、私の眼を通して見たところの最近心

序

理學の諸問題とその批判とであつて、私の能ふ限り、これを一般的に示さうとした試みである、とりわけ、こゝに取扱はれた問題は、主として形態心理學的問題の發生的考察として、形態心理學の一部分として企圖されたものであるが、中途から形態心理學をこれから分離し、歴史的叙述の部分だけをもつて本書を成すに至つたものである。

本書出現の動機は過ぎにし日、さるところで試みた講義の約束であつたが、時間の都合上、こゝに叙述せられた内容には觸れる機會を失し、二、三の篤學者の希望によつて、教育心理研究誌上に、その一部を公にしたのである。

今にして、これを見ると、もとより意に満たぬ部分が山ほどあるが、これを補ひ改めることは他日に譲り、次に公にすべき筈の著書への序論として外部からの希望のまゝ、書肆に委ねる次第である。

若し幸にも、本書が人間の具體的精神生活の如實相に興味を持たれる教育家、實際家、學生、その他の讀書家で、殊に最近における心理學の動めきの如何なるものであるかを知らうとせられる方々にとつて、多少の参考ともなる

るとすると、私の甚だ喜ばしく思ふ所である。

尙ほ、本書は、昨年九月末日脱稿したものであるが、この内容を通じて、私のとつたところの批評的立場の一部の生ひ立ち、は、近刊すべき筈の『最近心理學の基本的諸問題』の中に示さうと思ふ。

終りに、平素、私の研究の生ひ立ちを靜かに眺められ、且つ御指導を辱うする恩師文學博士、松本亦太郎先生、並びに、この書の生れるに至つたところの直接の動機を與へられ、直接、間接、御援助を賜つた文學博士、田中寛一教授に感謝の微意を表す。

昭和五年六月

著 者

最近心理學十二講 目次

序 論	最近心理學の一般的特性	一
第一講	一般的視點	一一
第二講	マツハ及びアベナリウスとその問題	一六
第三講	形態質に就て	二六
第四講	グラーツ學派と形態心理學派との對立	三三
第五講	ヴェルツブルグ學派とその問題	五〇
第六講	ゲ・エ・ミュラーの複合説とその門下の貢獻とに就て	七三
第七講	複合質とライプチヒ學派の諸問題	一〇三
第八講	所謂精神科學派の心理學に就て	一二九
第九講	精神分析諸學派の問題とその貢獻	一三三

第十講 シュテルンの所謂人格的心理學の諸問題とその貢獻とに就て……………一五六

第十一講 伯林派前期思想としてのシュトゥンプの機能心理學とその問題……………一七六

第十二講 形態心理學の發生期の研究とその方向……………二〇三

結論……………二二六

索引……………一

最近心理學十二講 目次 終

最近心理學十二講

序論 最近心理學の一般的特性

私共は近頃、「心理學が危機に立つ」とか若くは「革命期に在る」とかの呼聲をともすると聞くことがある。成程、最近に擡頭した心理學上の諸問題は、斯學の研究に従事する私共にとつては、一つの大きな驚異であり、未だ嘗て考へられ試みられなかつた新視點を教へたことは、見逃すことは出來ないであらう。もつとこれを露骨にいへば、從來の諸學說を、その根柢から轉覆して、こゝに、再び新に建設しようとする積極的精神が、正に現代の心理學の指導的地歩を占めつゝあるといふこと

である。斯様にいつても、これは、架空的の思索から導き出され、若くは哲學的思惟の直接的の産物としての潮流ではない。却つて素朴なる精神生活に對する具體的の洞察に立つて行はれた觀察と實驗とを、唯一の手掛りとして、そこから出發するものに外ならないものである。若し心理學を、その本來の理念に依つて、科學として考へるならば、如上の基礎の下に展開した考想は、如何に根強く、而も、價値多きものと考へられるであらう。

さて、斯く眞正の意味の科學的精神を指導的概念としての新心理學の潮流は、やつと、歐洲大戰を中心として獨逸に芽生へ、この革命的事業を導き、且つ、これを成就するに最も貢獻しつゝあるものは、即ち、伯林大學を中心とする形態心理學であつて、こゝから醗酵された數多き思想は、再び、四方に、放散することによつて、これに類似若くは對立する思想の流を培ひ、相争ひつゝも、而も尙ほ、一脈の新しい氣運を助成しようとしてゐるのである。如何にかゝる思想が現はるゝことの遅かつたことであらうか？ 私共の具體的精神生活を、その最も純眞なる立場から取扱つて行くべき筈の心理學の領域に於て、この嘆きは殊に強く感ぜられるのである。つ

まり、捉はれた世界の中を逍遙し、この中に永遠に留まらうとした人間の敗ず嫌ひ、若しくは習慣性が、神秘への憧憬と混淆して、かゝる結果を導いたものに過ぎまい。然し、これは、絶えず心理學にとつては一つの大きな惱みの種だつたのである。そして各時代の心理學は、一つの考想の範圍から、新しい考想の範圍へと、もがいてゐることが、時折、目立つてゐるではあるまいか。

ざつと考へると、從來、心理學は三期の著しい展開の時期を示したのである。第一は、所謂、魂の形而上的心理學から離脱して、自然科學的概念を直接に心理學の領域に導入して、こゝに聯合心理學、能力心理學、表象力學說、等の發達した時期であつて、經驗心理學前期の思想を代表するものである。然し、この時代の心理學は未だ考へられた机上の心理學の臭味を、表面に體現したものにすぎないのである。第二は、ウェーベル (E. H. Weber) フェヒネル (G. T. Fechner) ムント (W. Wundt) 等に依つて、代表せられる精神物理學の精神が、指導的位置を保ちつゝあつた時期であつて、この時期にあつては、こゝに述べるまでもなく、量的測定の問題が視點の中心に置かれ、かくして後年に至つては、圖形と曲線、數字と統計との心理學的處置が科

學的精神の衣を着て、正確性をそのモットーとして驚異に價する發展の端を開いたのである。勿論、これらの潮流に對しては、何時も相反する各種の思想傾向が存在してゐたのであつた。或は、それが潑刺たる精神生活の把握への要求から根ざし、或は、それが心理學的問題の哲學的若くは論理學的轉向無視から根ざし、更に又、これが生物學的神秘的要求と結合し、かうして心理學の所謂、混亂が根ざす様になつたのであらう。

成程、フランツ・ブレンタノ (Franz Brentano 1838—1917) の心理的分析の中に根ざす志向的對象の考想の中には、或は、こゝに、機能、内容、對象の分析への道を開き、所謂内容を包括する機能を目標として、心理學的領域が示され、そして又、彼れが亞氏への憧憬から、彼れの流れに、一脈の清新の氣分を培ふ糧を與へ、良き師として永く學界を支配して、或は、一方には、フツセル (E. Husserl) とスツンプ (Carl Stumpf) 他面には、マイノング (A. v. Meinong) と、ヴィタセク (S. Witasek) 等の學者への道を開き、その影響する所は大であつたであらう、然し又、それだけ混亂を惹起すことも、又、大であつたとも見られるのである。

人間の眞實相に深き洞察を持ち、獨自の新天地を開拓しようとした所謂ゼームス (W. James) 乃至はエンゼル (J. R. Angell) 等に因由する機能主義の心理學も、いはば一時の煙火ともいはれよう、殊にエンゼルの機能主義が、分析精神を忘却して、その當然の經路として、遂に行動主義に轉化し、果ては、ワトソン (J. B. Watson) に至ると、その最も極端なる形を示し、こゝにも亦、心理學の混亂する種が播かれたとも考へられるであらう。

かうして、最後に第三革命が歐洲大戰を中心としてなされなければならぬ破目に立ち至つたのである。考へ方に依つては、今述べた第一、第二は、その時期の上からすると、これを二つに分つことは必要がないかもしれない。さうすると、従來二つの革命があつて、その一つが最近代に行はれようとしてゐると、いふことにならう、が併し、私は、その精神から見て、これを三つに分つて考へたものにすぎない、これから、私は、特に、最近心理學の諸問題を徐々に述べようとするのであるが、最近といつても、漠然としてゐて、その限定が勿論、先決問題であると思はれる。私が見る所によれば、かの歐洲大戰が一つの時期を形作り、その前後に於て、その考へ

方、その方法が一變して來ようとしてゐるので、ざつと千九百十三年前後を一つの回轉期と見てそれが如何にして誘導せられたか、そして、又これに對立する諸思想が如何に、示唆に富んでゐるか、などを吟味しながら、考想を進めて行かうと思ふ。誰でも知つてゐるやうに、戦争が人心に變化を與へることは、想像以上であつて、殊に、かの大戦は、著しい變化を及ぼし、藝術に、政治に、科學に、宗教に、その與へた影響は枚擧に違がないであらう。これを極端にいふと、從來の物の考へ方に、著しい疑問を持つ様になり、この疑問が、考へ方を新にする氣運を作つたとも、思はれるのである。それで、この時期を中心として、凡そ、最近代の心理學の一般的特性ともいふべき點を、先づ抜き出して置くこととしよう。

第一、歐洲大戦前に、徐々に醗酵した心理學上の疑問が、大戦亂を中心として、これを打開しようとする運動となり、大戦前の心理學と、その後の心理學とはその根本から、新に成らうとしてゐることである。何時の革命時代にも見られるやうに、こゝにも又、新舊思想の衝突が見られる。

第二、舊心理學に爆彈を投じた人々は、着々と自己の建設に努め、既に、その幾分を完成しようとし、舊心理學の破片を拾ひ集めて、傳統に生きようとする人々は、不安に襲はれて、遂には拆衷主義に墮するの運命を辿りつゝあることが著しい、何れにしても、學界に起つた波紋は大きい。

第三、機械觀から離脱して、動的見方が擡頭したことも又、注目に價する點である、この自然の勢として、精神生活を要素の集合として見ようとする、所謂、原子觀、分子觀、寄木細工主義が徐々に廢れて、全體觀、組織觀、構造觀が見られる。

第四、最近代心理學のモットーは『生活に近づく』といふことである。即ち『單に机上の空論に終らない様』といふ點に着眼しようとすることである。

第五、次に、私共の精神生活を、共通の基礎原理から、明かにしようとする傾向が著しい。例へば、從來、感覺、知覺に行はれる原理は、感情情緒の様な方面の原理と没交渉に考へられ、殊に、普通人に行はれる法則が、變態者には適用出来ないといふ様に、取扱はれ勝であつたが、これに對して疑問が向けられるに至つたのである。

第六、新展望が、やつと、開かれようとしたから、新研究が續々と現はれ、心理學の

研究に従事する人々にとつては、又とない興味が残る時期であるといふことである。

第七、新展望の上に、建設されようとする心理學は、新に心理學を學ぼうとする人々には、却つて入り易いが、若し、舊心理學に深く入つてゐれば、理解し難い性質があるのである。といふのは、立場が逆であるから、一度、舊心理學を離脱しないと、これを理解することが、困難と思へるからである。

第八、先にも述べたやうに、近代心理學の指導的位置をとらうとする心理學の潮流は、主として實驗的研究と觀察とに根ざして出發し、單なる思辨の結果、發生したものでなくて、眞の科學的精神を發揮する所に、その重要な使命と意義とを持つてゐるといふことである。

第九、だから、近代心理學の立場の變更を、哲學的問題に關聯するだらうと、想像することは、至當でない、勿論、最近心理學の先頭に立つ心理學者の中には、その哲學的思索に於て、所謂、職業哲學者の人後に落ちない學者も少くないのであるが、併し、最近心理學に於ける主要なる成果は、これから生れたとい

ふことは出來難い。それで、心理學の精神を充分理解し得ない學者の中に、ともすると見られるのであるが、最近心理學を考へると、これと同じ様なものが古代にもある、だから、古代、例へば、ギリシヤ時代を學べ、或はプラトニーやアリストテレスを讀め、若くは中世を探れ、といふ様なことを耳にすることがあるが、これは思想としての心理學、即ち私に言はすると心理哲學であつて、決して、科學としての心理學を指さないものである。科學としての心理學は、如何に博學の哲學者であつても、哲學史の中に探せるものではない。科學としての心理學、其自身からいふと、却つて論理學や認識論の爲めに、如何にその發達が煩はされたことであらう。かういつても、さういふ私自らも、論理學の諸問題や認識論の考へ方に、興味をもち、これを無視するどころではない、蓋し、哲學上や論理學上の問題を考へる場合と、心理學の問題を考へる場合とを、明確に區別して、考案を進めないと、立場の混同が生ずるからである。或は哲學を中心として思索される人々にとつては、それは問題にならぬのかもしれないが、科學としての心理學を考へる場合、こゝに兩者の立

場を峻別して置くことが、最も必要な點である。

以上、大體見た通り、最近の心理學は誠に多事であるが、私は特に獨逸を中心として千九百十二年以來活動を持續し、四面戰亂の中にあつて、而も、近隣凡て論敵を控へて研究に没頭し、今や、その根本的の問題に於て、その學に忠實である限り、直接間接、影響せられないものがないといふ有様を導いた形態心理學、若くは、伯林派心理學を中心として、この立場から眺められた最近心理學、殊に、それが如何にして誘導せられるに至つたかに就て、その大要を述べようとするのであるが、勿論心理學を心理學として眺め、論理的、哲學的問題は、これを區別して取扱はうと思ふ。が併し、それを述べるには當然、その先驅的思想を辿つて置くことが必要であらう。勿論、先驅的思想は所謂、思想の混亂があり混同があるので、それに關する部分には必要なる限り、哲學的の考へ方を述べることを余儀なくされるであらう、しかし何れにせよ、主要問題は科學としての心理學に置いて、哲學的考へ方は、副部分として考へて戴きたいと思ふ。或は、他日、別個の立場からこれを論ずる機會があらば、その折に残された問題は委ねることとしようと思ふ。

第一講 一般的視點

最近心理學を見ると、一にも形態、二にも形態と、恰も形態といふ概念が魔法的色彩を持つてゐるかの様に、猫も杓子も、この言葉を用ひてゐることが、著しく眼立つて來てゐる。果してこれが、かくも萬能の意味を持つものであらうか、若し、さうであるとする、それは、どういふ意味に於てであらうか、若しこれが許されないものを持つてゐるとすると、それは、どういふ點に就てであらうか、こゝには勿論、甚しい概念の混淆も見られる様である。これを出来る限り、明かにしようといふことが本書の持つ念願の一つであるが、それを果すが爲めには、豫め、廣く、この種の問題が、何處から起つて、奈邊へ向はうとしてゐるかを確めて置くことが、大切の事の一つであらう。改めて言ふまでもないことと思はれるのであるが、その最初には哲學的問題との混同若しくは混同への方向を持ち、徐々に育まれ、遂には、こゝに立

場を轉向するといふ様な道程を辿つて來てゐるのである。

それで、私は、形態的問題を中心として、ざつと、その發生を考へて見ようとするのであるが、こゝに、この問題を考へるに當り、特に注意して置き度いと思ふのは、眞正の意味の形態心理學的問題は、やつと、千九百十二年、マックス・ウエルトハイマー (Max Wertheimer) といふ天才的心理學者が運動視現象に就て研究し、その成果としての學説を發表したことに始まるといふ點である。この研究が、如何なる性質と意味とを持つてゐるかに就ては、後に、その大要を述べようと思ふが、兎も角、この研究が少くとも、一つの回轉期を形作る著しい動因となつてゐるといふことは忘れられない點であらう。

然し、その先驅になる考へ方、若しくはその潮流は、それ以前に、徐々に、擡頭しつゝ、あつたもので、今こゝでは、その先驅になると思はれる形態的問題一般を考へたいと思ふが、勿論これから述べる色々の考へ方は、一面には、舊心理學の考へ方が残り、他面には、新興の問題を眺め、こゝに、その當然の飯決として、今から之を見ると、不徹底の考へ方が加工的に働いてゐるのであるから、これを辿つて行くと、當時、如何に、諸學者が二つの潮流を調和するかに、苦心したかといふ痕跡が著しく目立つてくるのである。

この意味からいへば、先きに回轉期の動因となつたと考へた、かのウエルトハイマーのその研究の中にさへ、やゝともすると、誤解を生む部分が少しもないとはいへないと思ふのである。こゝで私は時代といふことを強く考へたいと思ふ者であつて、今から見ると、色々の缺點のある學者でも、これを、その當時の背景から見ると、仲々、立派な學者も多いであらう。

若し、これを眞の歴史的事實として解釋する場合には、必ず、その時代に、これをおいて見ないと、立場の混同が、こゝにも起り勝ちであると思ふのである、とはいへ私に、今、志さうとする問題は、最近に立つて、その過去を探るといふことを、主眼とするので、或は、時に過去の學者を酷評する場合があるかもしれないが、然し、これを、その時代を背景として見ると、又、別種の意義を認め得る場合があるといふことを、豫め斷つて置きたいと思ふ。

げに、如何に偉大な學者であつても、それが一箇の科學者である限り、時代と争ふ

ことは出来ぬものであらう。これは屢々、又哲學者や、その他の人々にも適用される場合があるかもしれない。

却説、先に述べた様に、眞の意味の形態心理學的問題はマックス・ウェルトハイマー (Max Werthimer) 教授にあるといつたが、それ以前の先驅的思想はどういふ方面に表現されたであらうか。

こゝに各派の學者が形態的問題を論ずる場合、屢々引用する學者がある。それはブライグ大學教授のフォン・クリスチアン・エーレンフェルス (Von Christian Ehrenfels 1850——) といふ學者に外ならない。このクリスチアン・エーレンフェルスといふ人は、現今、對象論 (Die Gegenstandstheorie) といはれる哲學の一派の驍將と見られてゐるアレキシス・フォン・マイニング (Alexis von Meinong 1853——1921) に主として師事し、一面、多少、フランツ・布伦タノ (Franz Brentano 1838——1617) に影響せられたのである。元來、マイニングも布伦タノに負ふところ多い學者であるから、結局、布伦タノの影響の多かつた學者とも見られよう。このクリスチアン・エーレンフェルスが千八百九拾年、始めて『形態質に就て』(Über Gestaltqualitäten) と

いふ論文を發表したのである。

この人の形態質といふ考へ方は、從來、屢々哲學上の問題として論ぜられてゐたものに、心理學的の衣を着せて表現しようとした努力の、成果に外ならないものである。然らば、それは如何なる問題であらうか？ それを説明するが爲めには、こゝに講を改めて二人の哲學者を引合に出して考へて行かうと思ふ。

参考書目

- (1) Christian Ehrenfels: Über Gestaltqualitäten, Vierteljahrsschrift f. Wissenschaftliche Philosophie XIV. 3. 1890 (Das Primalgesetz 1922)

第一講 マツハ及びアベナリウスとその問題

こゝに私が意味するその一人は、實に、エルンスト・マツハ (Ernst Mach 1833—1916) その人である。マツハは物理學者であり、同時に、論理學者であり、心理學者であつた人であつて、一般に實證主義、經驗主義の色彩が濃い學者として、カント哲學への盲目的信仰が強かつた時代には、深く一般から顧られようとしなかつた學者の一人であらう。それほど彼の立場は當時一般から異つてゐた。例へば、カント哲學の問題の一つの焦點である所謂物其自體 (Ding an sich) といふ様な考へ方を、全然否定して、現象世界に就て、私共の知ることが出来る知識は、凡て感覺に依つて與へられると認め、結局現象世界は感覺の原因と考へることが出来ないといふ主張した人である。マツハは、千八百八十六年、感覺の分析 (Analyse der Empfindungen) といふ著書の中で『自我が一次的のものではなくて要素即ち感覺が一次的である。この要素

が自我を構成する』と述べてゐるのである。かういふ様な理由で、マツハに依ると、物理學も心理學も、何れも感覺を出發點として研究することになるのである。従つて、この點で、物理學上、屢々、問題となる實體概念 (Substanzbegriff) といふものが放棄されたのであつた。然らば物理學と心理學との分れ目を、何處に求めるかといふと、この點に就てのマツハの考へ方は不徹底であつて、物理學は人間有機體と關係しないで、外界を表してゐる感覺の關係を取扱ふ學であり、心理學は人間有機體との關係で感覺の表す關係を取扱ふ學であると見たやうである。

マツハに言はすると『物體が感覺を生ずるのではなくて要素複合(感覺複合)が物體を構成する』のである。

かうして、外界世界は、感覺に依つて與へられるのであるから、所與 (Das Gegebene, the Given) は感覺といふことになるが、これはマツハだけに限らず、素朴なる立場の一つとして是認せらるゝであらう。こゝに、マツハの感覺といふものが如何なるものが考へられてゐたかが問題となるのであるが、これは便宜上、後に考へて見ることとして残し、他の一人の偉大なる學者のことを先づ考へて置かうと思ふ。即

ち私は忘れられた一人の哲人として、リチャルド・アベナリウス (Richard Avenarius 1843—1896) に興味をもつて對したいと思ふものである。この學者は必ずしもマツハと全然同一であるとはいへないが、大體からいふと、同じやうに經驗批判主義 (Empirikritizismus) に立つてゐたのであつて、著書も可なりあるが中でも代表的の著述は例へば『純粹經驗批判』(Kritik der reinen Erfahrung 2Bde 1888—90)を主著として、この外にも『最小力量原理に適合する世界の思惟としての哲學』(Philosophie als Denken der Welt gemäß dem Prinzip d. kleinsten Kraftmaßes 1876—1903)若しくは『人間的世界概念』(Der menschliche Weltbegriff 1891)であらう。

然し、この學者の考へ方が、餘りに突飛であつて、且つ、その書き振が難澁であつたが爲めに、當時、世間から餘り顧みられなかつたのであるが、この人の立場は、傳統的の意味では、單にこれを、勿論、物質主義といふことも出來ず、理想主義では勿論なく、一元論二元論と直ちに論斷し難いと思はれるが、その精神からいふと、何れかといへば、一元論に近い方の學者ともいふことが出來よう。

彼は、具體界を考へるに當つて、これを、凡ての對立以前にあると考へた。換言す

るとこの對立、かの對立以前にしか、具體界は見られぬといふのである。そして、自分の哲學は自然的の世界概念に復返するところにあるといふ考へを持つてゐる様である。彼は、先きにも見た様に、素朴なる經驗には對立はないのであるが、然し、こゝに、個體と環境とがあり、この兩者の間には所與の性質としての區別はなく、私は環境を私と同じく知覺すると考へたのである。即ち、この兩者の何れへといふ意味は素朴經驗にはない筈である。

彼の思想の中には、『私』に與へられた經驗が私と環境との間に緊張する一種の有機的構造であるといふ様に明瞭な形として表現されてはゐなかつたとしても、それにも程近い素朴經驗の見方が存在してゐたといつても過言ではなからうと思ふ。

兎も角、かかる個體と環境との密接不離の關係に於て、一面に於ては、環境變化を考へ、他面には、個體それ自身の變化を認め、以て、如何に吾人の經驗内容が變化に依存するものであるかを理論的に確めようとしたのである。殊に、彼アベナリウスは、個體變化を神経中樞組織の變化の外に、これと密接に結合する例へば供述の變

化、動作の變化といふ様な部分を考へ、かうして刻々に變化する経験を、その思想の出発點として採るに至つたが、而も、何處までも、遂に素朴の域を脱し得ない憾を残すに至つたのである。

以上の兩思想家マツハとアベナリウスとの考へ方は、とりわけ新しく見える部分は少い様であるが、次に出づる諸問題を吟味するが爲めには、こゝに、その二、三の要點を考へて置く必要があると思ふ。

第一、アベナリウス及びマツハに於ては、それ自身考へられるもの、例へば物其自體の様に現象の奥に豫定せられるものが、問題とならない點は著しく目立つのである。若し、物其自體といふ様な物を豫定すると、それが例へば感覺の原因といふ様に考へられ勝であるが、これが彼等に於ては不用の概念であるに外ならない。従來、ともすると、心理學上、物といふ概念と、經驗せられる物とを、混同した場合は少くないが、若し、これを混同すると、私共の經驗の成立を考へる場合には、必然的に次の四個の點が要求せられるに相違なからう。即ち、第一には、原因としての物其自體であり、第二には、刺戟受容を取扱ふ刺戟機制

であつて、第三は、即ち知覺又は、感覺内容であり、第四は神經中樞の機能組織であらう。ところが、若し、物其自體と、經驗せられる物とを、明確に區別して、物其自體を私共から考へられた物、即ち、推理せられた物と、見做すと、それを、どうして私共の感覺の原因と考へる必要があらうか、實にマツハ及びアベナリウスの立場は、それであつた。

今、彼等の立場に立つと、外界環境の物體は、即ち、私共の意識内容であつて、これを物と考へるのは、一つの錯覺であり、若しくは推理であるから、若し感覺乃至知覺の原因を求める態度を假にとつて見ると、外見上腦の刺戟された状態にあるが如く考へられ、これは更に、末梢器官の刺戟状態に關係するが如く見え、更に外界に存在するものから、それを原因として起るかの様に見えるが、然し、これは意識内容に過ぎないものであるから、結局外界物體に條件づけられるか否かは、假定的問題であつて、永恆に證明せられることはない。従つて、こゝに問題として採られるものが、即ち意識内容間の關係だけといふことになるのである。

だから、マツハやアベナリウスの素朴の立場では、物の實在が感覺の實在に變化するか否かといふことには、全く没交渉に、經驗せられた物、即ち、意識内容の關係を取扱はうとしたものといへよう。

この第一の點は、問題としては簡單であるが、事實としては永く混同的に取扱はれ、心理學的考へ方の發展の上には妨害となつた場合が少くないので、私は後に再びこれを論ずる機會に譲りたいと思ふ。

第二、マツハ及びアベナリウス、殊にマツハに就て、次に述べて置きたいと思ふのは、この思想家が使用してゐる感覺概念が二重の意味を持つてゐるといふ點である。マツハは、その著『感覺の分析』に於て空間形態例へば、三角形又は四角形の如きものから、音形態例へば、旋律の如きものさへ、直接に感覺し得るものであるといふ意味の記述をしたのであるが、斯様の感覺概念は、これを、若し傳統的感覺概念即ち純粹要素としての意味に解釋すると、全く不可解の謎を含むものであつて、若し立場を變へて、かれの感覺概念の中には獨特の意味を持つものとする、これを發生的の方面から見ても、敘述的の方面から見ても、

重大なる問題を含むものと見ることが出来る。換言すれば、例へば、旋律の如きものが、それを構成する要素の結合總和であるか、但しは又、要素以上として、それと區別せられる或新しきものを持つか、といふ新問題が、これに觸れ、こゝを出發點として、考想の新回轉をも志すことが、可能となるかもしれない。然し、マツハはやはり、その時代の産んだ子として留つたにすぎない。即ち彼は、一面に於ては、比較的簡單なるものを要素としての感覺と見、他面に、旋律の様な音形態、三角形又は四角形の様な空間形態を考へた場合には、これを要素の結合總和だけと見ないで、或新性質を持つ比較的獨立なるものと見做すに至つた。

この二人の思想家に依つて提出せられた新問題は、恐らく千八百八十九年頃、これと獨立に、アレキシス・フォン・マイノング (Alexis von Meinong, 1853—1921) によつて取扱はれようとしたが、この時期に於ては、彼には明瞭なる心理學的問題として表現してゐたとはいへないだらう。

斯く考察してみると、こゝに、私はウイルヘルム・ヴント (W. Wundt, 1832—1920) を

想起せざるを得ない。既に古く、彼は創造的綜合 (Die Schöpferische Synthese, Creative Synthesis) といふ原理を考案せざるを得ない立場に立つた。

私は今、再び、ヴェント心理學を、こゝに反覆、詳述する必要を認めないが、これを簡單にいふと、彼は一方には、純粹感覺と稱するものと、單純感情といふものを、要素的精神構成要素として、これが結合せられる所に、それらの複合として、表象とか複合感情とかの上位の心的複合體を考へ、他面に統覺、意志等の働きの方面を認め、この兩方面の概念に、傳統的聯合律の概念を結合さして、精神生活を考へようと志したものであつて、外見、當時の自然科学の精神に適ひ、堅固不拔の城廓の様に見えたが、結局、彼は一貫した原理をもつて説くを得ないで、遂に、こゝに窮し、要素が結合せられると要素の總和以上の物が發生するといふ立場に立たざるを得なかつたのである。これが即ち創造的綜合の原理としての彼の避難場所となつたことは、餘りにも名高い事實であらう。即ち彼も亦、その時代の子に過ぎないのであつて、最初の出發點を要素として固定的のものとして考へたから、それが結合されると考へ勝ちであつて、こゝに、その結合に特殊の働きと仕方とを認めるか、若くは、それらの

結果が直接に新性質を持つものと考へなければならなくなるだらう。兎も角、ヴェントに於ては、創造的綜合は結局、消極的概念として見る事が出来る様である。

引用書目

- (一) Ernst Mach. Analyse der Empfindungen 1886; S. 11. 1922 (S. 19)
 (二) 同上 1886; S. 20. 1911 (S. 31) 1922 (S. 23)
 (三) A. v. Meinong: Phantasievorstellung und Phantasie, Zeitschrift. f. Phil. u. Philos. Kritik, 95. 1889.

第三講 形態質に就て

先にも述べた様に、從來、漠然とした形をとつて所々に散在して居つた哲學的思想に、特定の衣を着せて心理學的表現を與へたものが、クリスチャン・エーレンフェルス (Christian Ehrenfels) であるが、彼は、この形態質的問題の先驅者としてマツハを仰ぎ、而もマツハより一步前へ進み出ようとした、すでにマツハにあつては形態は音形態、空間形態に就て考へられ、感覺概念は曖昧であつたが、エーレンフェルスは、これを形態質の問題として擴張しようと努めたのである。

エーレンフェルスは、例へば、旋律には、確かに、これを形作つてゐる要素以上の性質が存在し、空間的の形には、その局部的限定性以上の性質があるとして、こゝに形態質 (Die Gestaltqualitäten, The Gestalt-qualities) といふ新概念を提出したのであるが、形態質とは、それ自身相互に分離することが出来る (即ち相互に分離して表象するこ

とが出来、る) 要素から成るところの表象の複合が存在するとふことに、結びついてゐる積極的表象内容をいふのであつて、形態質が存在することに必然的である表象複合を形態質の基礎と名づけたのである。⁽¹⁾ この點で、彼は、既にマツハにあつた形態概念を明かに限定するに至つたのであるが、すでに、これを積極的表象内容と見るところに概念の擴張が潜んでゐよう。即ちエーレンフェルスに於ては、形態質は非時間的形態質 (Die unzeitliche Gestaltqualitäten) としての空間的形態、時間的形態質 (Die zeitliche Gestaltqualitäten) としての旋律のみに限られてゐない、例へば赤味を帯びる、青ざめる、かがやいてくる、ごろ／＼鳴る、さら／＼する、といふ様な方面にも、これを認め、更に、尙、一步を進めて抽象過程にも、これを求め、例へば矛盾とか類似性にも、これを認めたのである。

抽象過程が形態質に加はり、こゝに形態質の次元を考へるといふとは、彼が、その師マイノングの方向から持つてゐた思想背景の然らしむる點であつて、彼は、例へば數表象を考へるに當つて、これを、すでに次元を高くして考へ、第二位形態質の着想をもつてし、數圖形の如きものは更に次元を高くする形態質として考へた様で⁽²⁾

ある。

かくて、如上の形態質の特性として、第一、要素の總和以上の性質を持つてゐること、と第二、變調することが出来ること又は被轉置性 (Transponierbarkeit) との兩性質を以てした。

エーレンフェルスの考想は、千八百九十年に出たものであつて、この論文中には異種的性質の考へ方が未熟のまゝ表現せられてゐるが、これも時代上やむを得なかつたものであらう。殊に、彼は一面、マツハの考想を展開せしめようとし、他面には、これと相容れぬ思想傾向を多分に持つマイノンダの影響を持つてゐたのであるから、従つて、當時、これを明瞭な形として表現することが、如何に困難であつたかが推定せられるのである、これを想うて彼の勞作に對すると、當時、既に如上の點まで開拓し得たことは敬服の至りに堪へぬ次第である。

然し、若し、これを今から考へて見ると

第一、エーレンフェルスが形態質と考へたものは、要素的考へ方を除外して考へようとしながら、結局、それから抜け出ることを得ないで、それが思想背

景に潜在し、その爲めに、形態質をもつて、表象複合に結合する第三新性質と考へざるを得なかつたものである、こゝに私が特に第三と名づくる所以は、暗黙の間に感覺、表象、新性質が考へられてゐると見るからである、故に或は、内容的考へ方が特に目立つてゐるともいへるであらう。

第二 エーレンフェルスは、マツハの傾向を辿りながら、形態質は何等、私共の働きの加工なしに直接に與へられると考へ、若しくは、さう主張しようとしてゐるのであるが、何時も、その思想の背景には、マイノンダ一派から受けた感化が潜在してゐて、この點に時折、明瞭を缺くと見られる節が散在してゐる、かく不満足の點は見られるが、次の二點に於ては彼の功績は又、忘れられないものがある。

第三 形態概念を限定しその特性を洞察したこと。

第四 形態質概念を、單に空間的形態、音形態だけに限らず、その他のもの例へば「ざら／＼する」「さら／＼する」「青ざめる」等の方面まで擴張したことである。かかる形態質論が出た翌年即ち千八百九十一年フツセル (Edmund

Husserl)はその著算術哲學(Die Philosophie der Arithmetik S. 227ff. 1891)の中に於て所謂統一要因(Einheitsmoment)の問題を考へ、これに程近き考想を示したが、こゝにいふまでもなく、彼に於ては理論的、抽象的の考想が、主なる場面を形作つてゐたといはれるだらう。

参考書目

- (1) Christian Ehrenfels: Über gestaltqualitäten, Vierteljahrsschrift. f. wissenschaftliche Philosophie XIV, 3. 1890. (Das Primalgesetz 1922. S. 19)
- (11) 同上 Das Primalgesetz, Zahlen und Zahlenfiguren 1922

第四講 グラーツ學派と形態心理學 派との對立

一度、エーレンフェルスに依つて、形態質が問題とされるや、これは一面には、哲學上の問題と混淆せられて論争の種となり、他面には、心理學上の新問題として、これと傳統的思想とを、如何に調和せしむるかが問題となり、或は、更に、これを傳統の殻を捨てて育まんとして努力するの流を因由し、こゝに新しい出發點を求められるの氣運を導いたのである。

今、その代表的流れとして、グラーツ學派(Die Grazschule, The Graz-school)と稱せられる所謂マイノングを頭目とする一派と伯林派との對立を考へたいのであるが、勿論、こゝではグラーツ學派を中心として、それに關する限りに於て伯林派を述べ、若し、後に機會あらば、再び伯林派を中心として考へるであらう。

さて、私は先づ、思想發展の歴史的順序に關係なく考へて見て、こゝにエーレンフェルスとマイノングとの兩學者から著しい影響を受け、獨自の世界に進まうとした思想家、殊に形態質の考想を擴張し、これに哲學的の變形を與へた學者、ジョセフ・クレメンスキライビヒ (Joseph Klemenens Kreibitz 1863-Wien) を考へて置かう。クライビヒはエーレンフェルス及びマイノング等の考想を採り來つて、その著智的機能論に於て、一定の關係に基いて直觀的成分の總和に生ずる全體性の新徵表を形態形態徵表、形態質又は基底上内容 (fundierter Inhalt) と名づけ、而して、斯かる形態質を次の様に三種に區別した。

- (一) 一次的形態質 (Die Primären Gestaltqualitäten) 又は第一位の形態質 (Gestaltqualitäten erster Ordnung) 例へば、簡單なる幾何學的圖形、割合、相稱の如きものは、これに屬するものであるが、彼は同時的なるものとして、右の外に和弦を考へ、繼時的なるものとして、旋律を、運動的なるものとして、律動を、考へてゐたやうである。
- (二) 二次的形態質 (Die sekundären Gestaltqualitäten) 又は第二位の形態質 (Gestaltqualitäten zweiter Ordnung) 例へば、文字の記號、裝飾、音樂及び詩のモチーフ等。

- (三) 高次的形態質 (Die höheren Gestaltqualitäten) 又は第三位の形態質 (die Gestaltqualitäten dritter Ordnung) 例へば、藝術の諸形式として表現せられる様な形態質であつて、シンフォニー、オペラ等の形態質はこれである。

しかも彼は、これらの形態質を關係によつて創造せられると考へ、形態質の特性として、第一、同一モダリテートの範圍内に於ける要素を交換し得る性質 (Die Vertauschbarkeit der Elemente) とし、ふ名稱の下に、所謂、變調性を考へ、第二の特性として、微少關係變化の場合に於ける維持の能 (Fähigkeit der Erhaltung bei minimalen Relationsänderung) あることを以てした、例へば、六角形は、その二邊が正確に一所に集つてゐなかつたり、若しくは少し曲つてゐても尚ほ、直觀的に六角形として認められるといふ様な場合は、これである、この二點はエーレンフェルスに於ける變調性の概念を分析的に見たものともいへようが、彼にとつては、右に述べた様な直觀的複合の問題からむしろ進んで、抽象的形態質を問題とすることが、より興味があつた様である。

彼によれば、具體的世界は四個の現象的に異つてゐる群、即ち、外界は、物と過程と

に、内界は状態と流とに分れ、これら各に就て形態質を考へたのである。

斯くクライビヒの考へ方に於ては、形態質は極めて包括的概念であつて、彼は或は、これとアリストテレスの形式との類似を求め、更に進んでは、プラトニーの理念 (Idee) の考へ方と同様性あることを考へ、殊に、この思想をもつて、形態質の形而上的轉向を志さうとした、即ち、プラトニーの理念は個物の原型として、理念の世界に存在するものであるが、例へば個々の犬が、類としての犬となるには、個々の外見的偶然性に依つて、しか、なるのではなくて、凡ての犬に反覆出現する一般的形式的性質に因由するのであらう、クライビヒに於ては、斯かる理念が表現したものが即ち形態質である。

こゝに、彼がマツハ及びエーレンフェルスと全く異つて、形態質の認識を、結合的思考、即ち、彼の言ふ智的機能 (Intellektuelle Funktionen) に依るとした思想の根基が存在するともいはれようと思ふ。

智的機能に依つて形態質を生産するといふ考へ方は、心理學的に見れば、一個の飛躍であつて、結局、プラトニーの理念に同様性を求むるに至ることも、當然の畝決で

あらう、即ちクライビヒは、私共の判断の中に於て、個々の概念が統一せられるのは、私共の思考の綜合の結果であるといふ傳統的立場にあつたのである、かく私共の思考を、形式と内容とに分つて考へる考へ方は、いふまでもなく、スコラ時代の遺物であつて、すでに經驗的哲學者で、且つ聯合心理學の先驅者ジョン・ロック (John Locke 1632-1704) は單純觀念から複合觀念の作られるは、智的綜合作用によると考へ、これを精神的に複雑なる作用とし、ライブニッツ (G. W. Leibnitz 1646-1716) Nonbeau (Essais II) も亦、綜合作用を認め、更にカント哲學に至つて、その組織の一つの主要點として、感覺の與へる印象が、綜合に依つて統一せらるるとの考想として、永く支配するに至り、近世心理學者の中でも、例へば、ヴェント乃至リップス (Th. Lipps 1851-1915) に於ける思想は、この方面の代表的なるものであつて、殊に、リップス⁽¹¹⁾に於ては、統覺の體驗は自我の體驗として考へられ、凡ての關係を、これによつて生産されたものとして見ることは見のがすことは出来まい。

翻つて見ると、如上の思想潮流のみが、唯一のこゝに考へられる道ではないであらう、實に、これに全く相反する考想は、これと對立して存在してゐたものであつて、

例へばマツハ、及びエーレンフェルスの考へ方の中には、その抱芽が認められ、古く、これを辿るならばヘルバルト(Herbart (1776—1841))の考想を想はざるを得まい、こゝに指摘するまでもなくヘルバルトの表象力學說の考へ方の長短は、我學界に於て、すでに陳腐めいたるものであらうが、彼の一つの特長は、自然科学の力學の概念を心理學に直接に導入し、表象相互の性質上の差異から、相争ひ、かくて各に力が表現し、力を得る表象は促進せられ、力を失ふものは禁止せられて、識闕下に沈降すると考へた點であつて、その考想組織に人工的取扱ひが多分であつて、餘りに機械的取扱ひに墮したのであるが、而も彼が無意識、又は副意識の概念に、その組織中に於て重要な位置を與へてゐたことは現代から見れば興味ある點たるを失はない。

當面の問題に就てのヘルバルトの考へは、明瞭とはいへないが、而もカント等の考へ方とは反對であつたといへよう、即ちヘルバルトは、多様性の結合を、綜合の結果とは考へないで、心の直接の結果、換言すれば所與として考へようとした様である。ところが、ヘルバルトは、或物に、凡ての性質の總和と、その形式とを區別し、この形式は直接知覺し難いが、その材料の方面は、すでに群を成すと考へ、この點に就

て徹底してゐたとは、直ちに、論斷出來難いものが、潜んでゐる様である。

(註) 『ヘルバルト派の學者を辿つて見ると(例へばワイツ(Wetzel))の様に)個々の感覺は、群及び系列を作り、而も、高次元の系列を作つてゐるが、凡ての知覺内容は個々の感覺内容から成る複合である、といふ考へを持つ學者もあるやうである。近世心理學で重きをなす獨逸心理學の大家エビングハウス(Ebbinghaus, H. (1850—1908))は、私共が赤や緑が異つてゐることを直接に知覺するのみでなく、赤や緑が示すものを同一の感官をもつて知覺するといふ考想を持ち、従つて、こゝに、特殊の高等精神活動の存在することを必要としない所以を考へてゐる。即ち彼は『色や音を私に與へる其の同じ眼や耳が又私に、それらの間に存在する同一、不同一の關係を知らしてくれ、私は甲者を乙者と全く同じ方法で、同じ様に感覺的に、生々と、そして又、同じ様に何等反省しないで、體驗する』と述べ、或は又『若し私共が物と性質との間の關係から物と名づけられ、性質と名づけられるあらゆる可能なる部分内容の同様、類似、差異、同一の凡ての關係を取り去つてしまふと最早何物も残らないこととなる』と論じてゐるのである。

機能心理學一派の驍將カール・シュトゥンプ(Carl Stumpf (1848—))の考へ方も又之と程遠くあるまい、彼にとつては全體を構成する部分現象は絶対内容と其の間の關係であるがこの何れも部分たるの性質に於て差異はないからである、^(五)即ち何れも彼の所謂現象間の一部類としての資格を持ち、従つて所謂心的機能とは無關係に獨立變化をなすものに外ならないのである、かういふ性質を持つものにして特殊の高等精神活動の加工が必要な筈があらうか。彼は明かに『關係は各二個の現象の間に又現象と共に與へられ、私共から入れ加へられたものではなくて、その中に、或は其れに於て、知覺

せられるものである、關係は知的機能の資料であつて、それ自身、機能ではなく、又機能に依つて生産せられたものでない』と論じてゐる。

アウグスト、メツサー (August Messer) が空間的、時間的性質、關係、類似、同一、差異、統一、多様が感覺と共に直接に與へられると説く考案も又、この點に於ける同様な思想の表現とも考へられるであらう。』

今、私がこゝに指摘するまでもなく、これらの潮流の中には二個の對立した問題が潜んでゐるといへよう。

第一、形態とそれに存する關係とが同じか同じでないか

第二、形態は直接所與か、若くは、特殊の高等精神作用を必要とするか、否か

この兩個の問題は、一個の問題の各反面を示すものであつて、結局第二の問題が第一の問題を包含するものとも見ることが出來よう、即ち關係を含めて形態を直接所與と見るか否かが、こゝに於ける中樞的問題である、勿論、思想發展の各段階に於て、それぞれ、相違は見られるとしても、マツハ、エーレンフェルスから流れ出た方向とエビングハウス、シュトゥンプを経て發展した方向とは、一脈の相通する傾向が存在し、伯林派形態論に至つて、その最も洗練された形としての思想となつた形態直接所與論は、形態と關係とを判然と分離して、こゝに特殊精神活動を豫想しようとする所謂グラーツ學派の思想と正面衝突を起すべき運命を持つものである。

グラーツ學派 (Die Grazschule, The Graz-school) は、先にも見たやうにアレキシス・フオン・マイノング (Alexis von Meinong) を頭目として、シュテファン・ヴィタセク (Stephan Witasek (1870-1915) ヴイトリオ・ベヌッシ (Vittorio Benussi 一昨年死去) アロイス・ヘフラー (Alois Höfler) 等の論客を含み、これら相互の學者の心理學的問題の取扱方は全然同一とはいへないが、その根本的立場に於て一脈の相通する物が存在するのである。

これら兩派の特筆さるべき論戰は、アロイス・ヘフラーと伯林派ゲルブ (A. Gelb) に依つて先づ始まり、ベヌッシとコフカ (Kurt Koffka) との對立に依つて、著しく目立つに至つたのである。

ゲルブの形態直接所與論に對するヘフラーのモットーは「形態は關係に非ず」と

いふ點であるが、その所論には少くとも論理學的問題と心理學的問題との混淆が根ざし、遂に果しなき影を追ふ様である。

ベヌシが内省觀察に依つて形態を現前するものと、差異性を現前するものを心的事變の同一類に屬するものと見ることが出来ない、考へたのも、恐らく、これに程遠くない考へ方であらう。

さて、私は、心理學界、稀に見る興味あるこの對立をもつと明瞭にするが爲めに、こゝにグラーツ學派所説の概要を記す必要に臨んだのである。

然し、それを果すが爲めには、先づ私共は、フランツ・ブレンタノの考想を辿らなくてはならぬ、ブレンタノの心理學的問題の展開は別個の立場から吟味さるべきものであるが、彼は當時の考へ方として、自然科学を物質の學とし、心理學を精神の學とする見方を捨て、現象世界から出發しようとし、而も、彼に於ては、現象が體驗即ち機能としての意味を持ち、従つて、見る、聞く、感ずる、泣くといふ様な機能、作用の聯關を體驗とし、これらの機能、作用は見られるもの、感ぜられるもの等の内容を包括するものとして考へられたのである。

だから、こゝには、ブレンタノの著しい特色とも見られる亞氏及び中世的考へ方の復活が、目立つのである、これ、いふまでもなく、精神現象の特色としての志向的體驗 (Intentionale Erlebnisse) である、即ち心の作用が、何かに向つてゐる事を意味するものであつて、或は對象の志向的又は精神的内在 (Die intentionale, mentale Inexistenz des Gegenstandes) を意味し、或は自己の中に何物かを客體として持つ (Etwas als Objekt in sich) ことに外ならない、表象には何か表象され、怒には何か怒られ、愛には何か愛されるといふ様に、ブレンタノの心的現象には、その特性として表象を基礎とし、各作用は、それ自身が同時に客體を持つのである。

かうして表象を基礎として、判斷、愛憎が立てられるに至つてゐるが、ブレンタノの心理學に於ては、心的主觀の精神性が、經驗的に證明せられないものとして、こゝに古へからの傳統が暗黙の中に残り、いはば一種の智能としての能力概念が見られる危険があらう、若し智的能力を假定して論じようとすると、機械の外に神を假定するの困難を思はざるを得ない、例へばカール・スピアーマンの如きはブレンタノに於て不明瞭なる能力概念の遺物を指摘しようとするやうである。

果して、然るか否かは、尙詮議せらるべき問題を残してはゐるとしても、或内容に對する志向的關係、乃至は或内容の志向的内在の語を特に選んで客體の語を避けようとする用意は、さすが彼の周到なる思索の然らしむる所であつて、心的活動若くは具體的心的状態を指示する心理學的事實としては、否定することは出來ない。然し、私共のブレンタノーに於て、特に注意しなければならぬのは、表象を基礎として持つ、といふことは、直ちに、表象から誘導せられるといふ様に、解釋してはならぬことである。彼にとつては、表象と、その他の意識表現の方法とは、全然異つてゐて、彼が、その範を求めた所謂ヘルバルトの心理學とは、その行き方が異つてゐるといはねばならぬ。故に、ブレンタノーにあつては、表象が心的現象の基礎をなしてゐるといふことを基礎づけることが、一つの大きな仕事であつたのである。この意味に於て、例へば、感情にも表象作用が、その根柢となつて横はつてゐると考へる、痛感情乃至痛感覺には、兎も角、そこに何等かの痛が表象として働いてゐると見ようとするのである。

かうして、ブレンタノーのつた問題は、心理學的事實を、明かに、論理學的に轉向

さしたのである。何故かといふと、こゝに、ブレンタノーが採つた問題提出の態度が、論理的可能性に關するものであつて、心理學的事實としては消極的の意義しか持ち得ないからである。斯ういふと、或は論者は問ふかもしれぬ「或表象と或感情との結合が如何なる條件の下に、如何に個人的多様性をもつて出現するかを研究することが心理學的に重要な問題ではないか」と或はさうかもしれない。然し若し、こゝに無意識界の假定の可能性を考へてくると疑惑はつきやうとしなないであらう。實に、ブレンタノーの心理學は心理學の論理的基礎づけを考へた典型的のものであつて、その中に見るべき部分が多分に包藏せられて居りながら、一步、歩を轉ずると、論理の世界に逍遙するの危険を併せ持つといへよう。ブレンタノーが何等の無意識的精神活動をも認めようとしなかつたのも、又、これに聯關する意味を與へて考へて見ることも出來ようと思ふ。蓋し、彼に於ては、心的現象は或客體に就ての意識であり、或内容に對する志向關係であるから、これを能動的に見ると、或内容に就ての意識であり、受動的に見ると、意識の内容が考へられ、而も、心的作用と、それに伴ふ表象とが、獨得に内部的結合を保ち、従つて心的生活を最も直接的自

明性をもつて内部的に把握出来るものと考へ、所謂内的意識の問題を高唱したのであるが、若し論理的に視點を置くと、無意識的活動は、只有用でないのみでない、却つて妨害となるものに外ならない。といふのは彼は心的生活を一つの焦點の中に入れて見ようとし、これを論理的に基礎づけようとしたからである。

私は、今、こゝに論じようとする問題の性質上、ブレンタノの心理的問題を詳しく吟味するの餘裕はない。只、彼が心理學的基礎づけを企てようとしたといふことを記憶に留めて置かう。げに、アントン・マルタイ（Anton Marty 1847—1914）カシミル・トワルドウスキイ（Kasimir Twardowski）エドムンド・フツセル（Edmund Husserl 1859—）等の門下は、主として、それぞれ、如上の方向に向つて新しい開拓をしたとも見られ、フランツ・ヒレブランド（Franz Hillebrand 1863—）や、カール・シュトゥンプ（Carl Stumpf）等の門下は、それらの外に、心理學的問題の心理學的取扱をも志したともいはれるであらう。

グラーツ學派と唱へられる流れも、又、ブレンタノに影響せられることが少ないのであつて、この派の驍將マイノングは、所謂、ブレンタノの志向的體驗に於

ける内在的對象の方向に、一步を進めて對象論（Die Gegenstandstheorie）を確立したのであるが、彼はこの考へ方を進むるに當つて、内容から關係を分離して、これを理想的のものとして解釋し、この理想的關係が抽象的内容と結合して、こゝに抽象的形態が作られると考へ、而も、これが所謂、表象産出（Vorstellungsproduktion）といふ特殊高等智的作用に依つて生産せられると見做したのである。

然らば、例へば、旋律の様な音形態、圖形の様な空間形態が、どうして生産せられるであらうか。

これを考ふるに當つて、グイタセクは表象産出を大凡次の三種に分つた。^(一)

第一、形態表象（例へば旋律、空間形態）

第二、比較表象（關係表象）

第三、結合表象（生産せられる表象の對象の結合）

即ち、かく徐々に高次元の形態複合が生産せられるのであるが、而も、これらの三種の場合を通じて、大體同様な特殊高等智的作用が働くものに外ならない。

この點はグラーツ學派の著しい特色であつて、例へば、音形態として、の旋律でも圖

形の様な空間形態でも、その基礎として與へられるものは、要素的感覚事實であつて之が特定の形態として把握されるには、それに相應した高等心的作用があつて、これを形態化する必要があると考へるのである。それであるから、この派の思想は明かに二元論であるといはれる。即ち、第一は、感覚であつて、これを要素的、恒常的に解釋し、これを基底と考へ若くは劣位表象 (Inferiora Vorstellung) とも考へる。

第二は、感覺の上に働く作用であつて、この作用の結果、二次的に形態が発生する。即ち感覺が本源的であつて形態は二次的である。而も感覺に對して形態は優位表象 (Superiora Vorstellung) といふことも出来る。

これらの點は、マイノングからベヌシに至るまでグラーツ學派の特色であつて、ベヌシの思想はマイノングに抱芽した問題を、一面には、實驗的に吟味しつゝ、開展せしめたものにすぎない。だからベヌシに於ても、實在性がない對象が考へられ、これを理想的對象として、私共の感覺は、これに作用し得ないが、それに就ての表象を持つことが出来る。これは即ち優位表象 (Superiora Vorstellung) であつて、感覺としての劣位表象が結合したものでない。それよりも、もつと高等精神作用に結合

せられるのである。こゝにベヌシが説く形態多義性が著しく見られる。

さて、理想的對象に就て、ベヌシの論ずる様に形態多義性が出現するのは劣位表象としての感覺を恒常と考へ、それに對する生産表象が變化交替すると見るからである。

若し、私共が立場を變へて、感覺それ自身すでに要素的なものでなく、恒常的なものでないとする、と、形態發生に尙ほ更に特殊高等心的作用が必要であらうか。然し、少くとも、グラーツ派に於ては、さういふ立場は豫想されてゐない。而も、こゝに假定せらるゝ機能、作用は、やゝもすると、能力心理學的臭味に墮するの危険を含むであらう。斯様にグラーツ學派が要素感覺を土臺として、その上に複合又は形態を築き上げる遣口は、傳統的聯合心理學のそれに類似するが、これと異つてゐる著しい點は、グラーツ派に於ては、こゝに働く作用を機械的のものと思はないで、創造的作用と見ようとするものであつて、心的生活の興味ある一面を見てゐるものといはねばならぬ。然し、この派は具體的事實から出發して、これを忠實に描寫するといふよりも、寧ろ哲學的の潮流に立つて、一面、傳統を生かし、他面、新思想を攝取

しようとした代表的學派であつて、形態を一次的とし部分を二次的として見ようとする形態心理學とは、本來相容れぬ思想であるともいへよう。詳しい點に就ては伯林派を論ずる場合に譲ることとしようと思ふ。

参考書目

- 1) J. K. Kreibitz; Die intellektuellen Funktionen 1903. S. 111ff.
- 2) Th. Lapps. Einheiten und Relationen 1902.
- 3) Ebbinghaus. Grundzüge der Psychologie, 2 aufl. 1905 S. 498.
- 4) " " 3 aufl. 2. Bd. S. 279.
- 5) Carl Stumpf; Tonpsychologie Bd. I. S. 96. Bd. 2. S. 279.
- 6) Carl Stumpf; Erscheinungen und Funktionen 1907. S. 4.
- 7) A. Messer; Empfinden und Denken. S. 69.
- 8) Alois Höfler; Zeitschrift f. Psychol. 60. S. 161—218
- 9) A. Gelb, Theoretisches über Gestaltqualitäten (Zeitschrift f. Psychol.. 58 1911.
- 10) Carl Spearman, The new Psychology of Shape (British Journal of Psychol. XV Jan. 1925. Part 3 P. 211—225
- 11) S. Witasek, Grundlinien der Psychologie S. 233 1907.

これ等の外、Franz Brentano, Psychologie vom empirischen Standpunkt I, 2, Kasimir Twardowski: Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen その他マイニングの諸著、等に直接間接負ふ所大である。

第五講 ヴェルツブルグ學派とその問題

ウエーベル、フエヒネル等の諸學者に依つて、精神物理學的問題が、量的測定の方
向に於て新天地を見出してから、心理學上の問題提出は、やゝ、その形式を變換しよ
うとする氣運を示したのであるが、併し、當時、その研究は比較的簡單なる心的作用
の方面に限られて、意志乃至思考等の所謂複雑高等なる心的作用の方面の實驗的
研究は閉却せられねばならぬ立場にあつたのである。

ところが、斯様に等閑に付せられてゐた問題を探つて、これが實驗的研究を志し、
主として内省的研究方法を用ゐて、思考、意志の諸過程の要素を分析しようとした
ものは、オストワルド・キユルペ (Ostwald Külpe 1862-1915) を中心として閑寂の小都市
ヴェルツブルグに徐々に芽生へ、ヴェルツブルグ大學の名に依つてヴェルツブル
グ學派 (Die Würzburger Schule, The Würzburg school) と唱へられる一派である。この

派の頭目キユルペは、千八百八拾七年から同九拾四年までライプチヒ (Leipzig) にあ
つてザントの助手として研究し、かくてヴェルツブルグに招かれて千九百〇九年
ボン大學に轉ずるに至るまでの約十五箇年を、最も著しい活動時期として、最後
にミュンヘン大學に移つて終つたのであるが、當然の經路として、最初の出發點は
ザントの感化、影響にあつて、一步、一步之から遠ざからうとし、遂に、その門下に依つ
て新しい領域を求めようとするに至つたのである。蓋し、英國聯合學派の興へ
た傳統は、先にも論じた様に、永く學界を支配したものであるが、ザント心理學に於
けるこの思想の浸潤は著しいものであつて、例へば、彼が一方に於て意識内容を感じ
覺と感情とに還元しようとし、他方に於て統覺概念を立てて、此の中にいはば、聯合
的表象過程を支配する要因を見ようとしながら、遂に不徹底に終らざるを得ない
破目に陥るに至つたのであるが、その思想の裏には感覺的聯合派の臭味を失ふこ
とが出来なかつたのである。心的生活への洞察に於て近代心理學者中稀に見る
偉才エビングハウスでさへ、その獨創的記憶研究に於て結局聯合說の立場以上に
立つことが不可能であつたのである。これと同じことがゲッチンゲン (Göttingen)

のゲオルグ・エリクス・ミュラー (Georg Elias Müller) に就てもいはれよう。斯くて、キユルペの率うる一派は、一面ヴントその他に存在した様な要素心理學の臭味を残しながら、この立場から内省的研究法を最も信頼するに足る方法として、簡單なる思考過程を内省研究し、その結果、内省にあつては、從來聯合心理學に於て假定せられる様な要素としての心像は、絶對的に重要な役を演ずるものでなくて、却つて之と全く性質の異つてゐる無心像ではあるが有意味であるものが、思考過程の核心を形作るものであることを發見し、この學派が最初計畫した内省に依る要素分析の目的を果さないで、遂に要素心理學の立場だけから見ると不可解である如上の新成分を發見するに至つて、再びこの新視點から、感覺的聯合派を攝取し、若しくはそれに依つたものとしてのヴント乃至はゲオルク・エリクス・ミュラー等を批判するやうになつて來たのである。このヴェルツブルグ派の考想はキユルペの周圍に群れ集つた諸學者、例へば、マルベ (K. Marbe) ヲット (H. J. Watt) アツハ (N. Ach) ヲハラ (K. Bühler) メッサ (A. Messer) ティライ (C. O. Taylor) シュルチエ (F. E. O. Schultze) ゼルツ (O. Selz) コフカ (K. Koffka) 等の各種の實驗的研究に根ざし、こゝに心理學上の

の新方面を示す幾多の事實が、指摘せらるゝに至つたのである。

今、私は、これらの諸學者の一つ一つの研究を辿つて、細かに、これを吟味する餘裕はないので、その中、特に代表的と思はれる二、三の研究の要點を採つて、考を進めて見ようと思ふ。先づマルベ (K. Marbe) は、判断の實驗的研究を志し、その結果、こゝに意識態(意識層) (Bewußtseinslage, Mental attitude) とも名づけることが出来る特殊の心的形式が存在することを指摘するに至つた。

元來、マルベは、判断をもつて、賓辭の正否の供述と考へてゐるのであるが、この判断の了解といふことは、一種の慣れ、又は知 (Wissen) に基いて起るものであつて、これを意識上の語としては、明瞭に示すことが出来難い、刺戟が現れ、判断が起つて來るその中間段階に表現する意識上の語として示し難いこの特殊の状態を、名づけて意識態としたのであるが、併し彼は果して意識態と呼ばれるものが何であるかに就ては觸れることが出来ないで終つたのである。

ワット (H. J. Watt) は被驗者に課題 (Aufgabe, Task, Problem) を與へ、それに依つて聯想を起さしめ、例へば上位から下位へ、全體から部分へといふ様に、刺戟を與へる

ときの準備段階を研究し、課題又は問題のあることが判断の特色であると考へたのである。反之してアツハ (N. Ach) は、反應法を使つて思考乃至意志の研究に着手し、徐々に新天地を開拓するに至つたのであるが、殊に、思考實驗を三期に分ち、前期はワットの所謂問題の時期であり、主期はマルベの所謂意識態の時期であり、後期をもつてその過程の終つた後の時期として考へ、主期に於ては勿論前期に於ても、期待内容が與へられ、後期にも非直觀的、無心像的要素が與へられるとし、之を知 (Wissen, Knowledge) とし、斯かる知のあることを意識することを意識性 (Bewußtheit, Awareness) と名づけたのである。而も意識性に二つの種類がある、第一は意味の意識性 (Bedeutungsbewußtheit, Awareness of meaning) であつて、例へば、花といふ語、伯林といふ語などの意味を考へるときに、花の表象、伯林の表象を起す必要は必ずしもない、只それを起す傾向があれば足りるのである。この傾向は即ち意味の意識性を示すものであつて、私共の具體的日常經驗を反省すると、これに相應する事態は少くない、この傾向に就ての意識、即ち意味の意識性は、徐々と、それ以前に設定せられた決定若くは限定に與つてゐるか否かといふ様な傾向に、推移する傾が、時折見ら

れる。これが即ちアツハの所謂決定又は限定の意識性 (Bewußtheit der Determinierung, Awareness of determining) である。第二は、關係の意識性 (Beziehungsbewußtheit, Awareness of Relation) であつて、二つの意識内容の關係に就て、驚き、混亂、疑ひ等の形をとつて現はれるものであるが、これは徐々に、何か壓迫を受けてゐる状態、何か缺けてゐる状態、何か探し求めてゐる状態に移行する傾がある、これ、アツハの所謂傾向の意識性 (Bewußtheit der Tendenz, Awareness of Tendency) である。

アツハに發した所謂限定に就ての考想を理解するがためには、彼の用ゐた研究法的一端を念頭に置いて、考へを進める必要がある。勿論、當面の問題としては、枝葉に陥る恐れがあるので、こゝに、私はその輪廓だけを辿つて置かうと思ふ。

さて、アツハは千九百〇五年の意志と思考との研究に於ては、極く簡単な反應法を、彼の所謂組織的内省を加味して用ゐたものである。その遺口は、例へばカード露出器に露出せられた刺戟に對して、この露出せられた刺戟が彼の所謂關係表象 (Bezugsvorstellung) になるのである、被験者は右の人指で電鍵を押す様に教示を與へられるのである、電鍵を押すことが彼の所謂目的表象 (Zielvorstellung) に當るのであ

る。だから被験者が、かういふ課題を與へられて、カードが出ると電鍵を押さうとすると、こゝに一種の決心又は企圖の様な意志行爲、若しくは一種の限定が現はれて、これが影響を残して表象過程やそれに相應する外部意志動作としての運動を最初企圖した意味に於て、支配すると考へたのである。

ところが、この研究法が基礎となつて徐々に進轉し、千九百十年頃になると、例へば意志行爲と氣質とに就ての研究、所謂結合法を考案するに至つた。これ、即ち彼が、その研究を量的にも質的にも規定して見ようとする念願を、具體的に表現しようとしたものにすぎない。

彼は無意味綴の系列を反覆的に露出して、この系列間の個々の員肢の間の繼起的聯合を固定せしめようとしたのである。それで、この聯合が強固であればあるほど、若し、一系列中の例へば最初の三個の綴が露出された場合、第四のものを名づけることが迅速に且つ正確に行はれるやうになると考へ、かくて人工的に反覆によつて聯合固定を得ようとした。

人工的聯合固定は即ち一種の習慣構成であるが、これに對して意志を反對に働

かしむる様に工夫するといふことがアツハの採つた研究法の骨子である。例へば彼は綴の位置を置換へさす様に、教示を與へたり、若しくは綴に韻をつけさす様に命令したりして、この目的を達しようとしたのである。勿論これと比較考究するために、かゝる教示を與へないで、只意識中に再生せられる綴をいはしめて、その結果をも參酌したのである。

斯様にして、若し、被験者が最初と最後との綴を置換へよといふ命令を受けた場合、企圖が強くと起ると、その効果に依つて關係表象たる綴が出現すると、單なる習慣に依る再生的効果に打勝つて目的表象の意味の綴の置換が行はれる。即ちこの場合、企圖の中で立てられた目的表象から發する一種の決定的傾向ともいふべきものが、再生的聯合的過程を支配したのである。アツハの考想を辿つてくると、聯合が強ければ強いほど意志行爲も又強く表現しないと、これに打勝つことが出来なくなるのであるから、結局、聯合固定の際の反覆度數をもつて、當該聯合強度の尺度として、これを基礎として意志行爲の限定の強度を測定し得るといふことにならう。即ちアツハは限定(決定)の聯合的等價 (Das assoziative Äquivalent der

Determination)といふ考想を誘導するに至つたのである。限定(決定)の聯合的等價とは、固定された聯合が、その際の心的過程を支配し、意志的限定に正に打勝たうとするその境界の強度を起すだけの反覆度数である、もつと具體的にいふと、意志限定と固定的聯合とが殆んど等價になつてゐて、固定的聯合の反覆度数がもつと増された場合、固定的聯合だけが支配し、その反覆度数がもつと減ぜられた場合は意志的限定が支配するといふ様になつてゐるから、その中間にこの兩者が殆んど等價の場合が與へられるのである。だから等價から以下の反覆度数になると意志限定の支配が強まり、聯合から來る抵抗に打勝つてしまふのであつて、さうなると聯合によつて起る反應時間が延長せらるゝに至るのである。

かくて、アツハは如上の研究法の基礎の上に色々の方法を加工して研究したのであるが、その研究の要點は限定についての意識であつて、限定は目的表象から發して而も、これを實現しようとするのである、實にアツハが主張する決定的傾向(Die determinierende Tendenz, The determining Tendency)は目的表象の意味に於て實現を起すといふことが著しい特色である。即ちこの概念は、目的表象の意味と意

義とに相應して事變を支配するといふことを本質とするものである。だから目的表象から發し、目的表象の意味に於て、事變の過程を規定するところの關係表象に向けられた獨特の効果を目的表象から起る決定的傾向と呼ばれるのである。

然しこの決定的傾向は、その本質上、例へば、ゲ・エ・ミューラーの所謂固執傾向(Die Perseverationstendenzen)と混同してはいけない、固執的傾向は、表象が一度意識に出現すると自由に意識に残存、出現しようとする傾向を持つてゐることを名づけるものであるが、アツハは正に之に對立するものとしての決定的傾向を指摘しようとしたものと見るべきであらう。

かう論じてくると、アツハは、私共の心的生活の最も興味ある一面に突入しようとし、所謂意志要素の指摘につとめ、ヴェルツブルグ學派の名星ともいふべき方面を多分に持つてゐるものではあるが、既に、その研究法の各處に到底保持し難い困難を多分に持つものである。彼の着眼した研究點は最も興味ある方面であつて、而も最も豊富なる成果を擧げ得たのではあるが、今から、これを見ると篩にかけられねばならぬ部分を多分に包含するやうである。如何なる點に於て、その著し

い困難を見るか、如何なる方面に於て面白い部分があるか、既に學界に於て論議されたこと屢々であるが、私は便宜上こゝに、これを省き機を見て、再び論じようと思ふ。

この外、メッサー (A. Messer) も思考の實驗的研究をなして、非直觀的内容の指摘に つとめ、カール・ビュラー (Karl Bühler) は、思考の各方面の組織的研究を行ひ、思考に於て、各種の表象、快不快の感情その他はあるけれども本質的成分でなく、本質的成分は彼の所謂考想 (Gedanke) であるとして被験者は之を意識性、知若しくは、何々といふ意識等の語で呼ぶとし、これに三個の型式があると考へた。

第一、規則の意識 (Regelbewußtsein, Consciousness of Rule) これは問題解決の方法に就ての意識である。

第二、關係の意識 (Beziehungsbewußtsein, Consciousness of Relation) 即ち意識内容の關係に就て何等かの意識あらはれ、これが思考の中心になる。

第三、志向 (意向 Intention) これ考へるときの心の状態が、説 (Meinung) に向けられ、これが主となつて、自分が考へることが重きをなさない場合である。

かく、ビュラーは思考の分析研究をなしたのであるが、以上の諸研究に見られる様な意識態、意識性、若しくは考想等に依つて示された諸傾向は、當時ヴェルツブルグ學派の人々が思考過程を分析研究しようとする態度から、そこに新に発見した諸現象であつて、問題が與へられると、この問題が目的表象となつて、それに導かれ聯合的再生的表象が現はれる、その場合、その目的を設定する心の態度が思考の決定的傾向 (Die determinierende Tendenz, The determining Tendency) として表現せられ (N. Ach.)、その問題の意味の理解に依つて、それに應ずる意識内容が求められ、これと同時に意識内容の關係が把握されるのである。

斯様にして、ヴェルツブルグ學派は、最初、思考の分析的研究を爲さうとして、遂に無心像思考 (Imageless thought) の問題に逢着し、従來行はれた様に、思考を表象の機械的結合では説き得ない結果となつた。この消極的結果は同時に多大の積極的の意味をもち、暫くの間、心理學上の研究に影響することが少くなかつたのである。かくて、ヴェルツブルグ學派の人々はその多くが出發點として要素的内容的心理學の立場に立ち、この立場から分析研究した結果、その立場だけからは説明するこ

とが出来ぬXが存在することを告白したものと見ることが出来るのであるが併し、これらの學者は何處までも自己の立場のみから新現象を眺めようとしたのであつて、彼等も又時代には争へないものとして留まつたのである。

當時の學界から見ると、ヴェルツブルグ學派は必ずしも容れられたものではなかつた。即ち屢々、これに對する反對の叫びが聞かれ、或はこれら學徒の用ゐた被験者が、やゝもすると實際の經驗を誤解し、その爲めに無心像的現象を叙述したといはれ、或は叙述するといふよりも自己の立場から解釋したものであると難ぜられ、若しくは、これら學徒が無心像的經驗、意識態、意識性と呼ぶものは、事實上、心像に過ぎないものであつて、只、未發達のものであるとして考へられ、結局、心像間の傳統的法則が合理的であつて、ヴェルツブルグ學派の成果は只單に思辨の産物として批判せらるゝ運命に立つてゐたのである。斯くの如き冷酷無理解なる批評は、勿論當時の一般の傳統的要素心理學の立場から所謂、不合理を許さずとの精神から爲されたものであつて、時代への反逆の徒に對する處置としては、當然であるが、これを靜かに探つて見ると、そこに乘ぜられる要因も亦少くないであらう、就中これら

學徒が心理學的方法として餘りに内省法のみを信頼し、これを萬能的方法であるかの様に取り扱つたことは、その最も大きな要因の一つであるやうである。即ちヴェルツブルグ學派の成果は、如何に内省が誤信せられ易きか、若しくは正しからざるかといふことを最も明瞭に指示するものであつて、若し私共が内省的研究法だけの道を辿つて研究するならば、如何に研究の歩みを深く進めても、或は傾向とか、或は意識性とか等々の物が永遠に、それ以上解明出来ぬXとして残るに相違ないのである。

ヴェルツブルグ學派の問題は勿論直接形態心理學的問題と關係してはゐないが、如何に要素心理學の立場が不徹底であるかを示し、殊に、要素心理學の立場に立つて内省的方法を唯一の道とした場合の最後の結論を下したものと見て、見ることが出来、事實的に心理學を轉向せしむべき橋梁を形作つてゐるものといふことが出来ようと思ふ。

この學派に屬してゐた學者は、尙ほ多く心理學界の重鎮として活動してゐるが、マルツ(K. Marbe)はヴェルツブルグ大學教授であつて、彼はその學的傾向からいへ

ば二重の興味に依つて動かされてゐる様である、一はヴェルツブルグ學派當時の理論的考想であつて千八百九拾三年に視覺の學說 (Lehre von den Gesichtsempfindungen) 千九百〇一年に先きの判斷の研究 (Exp. Psychol. Untersuchungen über das Urteil) をなしたのはこの方面を代表するものであるが、他面に、彼は應用的方面の開拓者の一人として統計的研究にも寄與する所が少くない、例へば、その著『世界に於ける齊一性』 (Gleichförmigkeit in der Welt 1915) に於て、若しくは『心理學の進歩とその應用』 (Fortschritte der Psychologie und ihrer Anwendungen) 誌上に於て、その色彩を示してゐるのである。

メッサー (A. Messer) は現今、ギーセン (Gießen) 大學の哲學を擔當し、その主なる興味は心理學を離れようとしてゐるやうであるが、アッハ (N. Ach) は、先年ゲツチンゲン (Göttingen) 大學に轉じて、ゲ・エ・ミュラー (Georg Elias Müller) の跡を繼ぎ、主として意志方面の研究に従ひ反應研究を土臺として彼の所謂決定的傾向を固執してゐるが、彼の諸勞作を通じて興味ある方面に志しながら、傳統的臭味、殊に聯合說の余臭が残り、その學說上不徹底の箇所が少くない、

カール・ビュラー (K. Bühler) は目下ウィーン (Wien) 大學教授であつて、ヴェルツ

ブルグ學派の人々が多くさうである様に、彼も亦新舊兩方面の思想に相當の理解を持つてはゐるが、未だその學說の所々に抜け切れない點が少くない、勿論この學者の勞作は、例へばエビングハウスの心理學の改版の仕事といひ、形態知覺 (Die Gestaltwahrnehmung 1913) としひ、若しくは兒童の精神發達 (Die Geistige Entwicklung des Kindes, 2. Aufl. 1921) としひ、その他の諸論文も相當價值あるものであるが、殊にこの學者に於て、所謂折衷主義の色彩が著しく目立つのである、例へば、彼が如何にも巧に精神構造に就て本能・衝動・智能の三段階説を立ててはゐるが、これが正に彼の折衷主義の典型的表現とも見られる部分を含むのである。

その折衷主義の最も著しく具體的の形で表現されてゐるものは、以上の諸著の外、一、二年前出版された心理學の危機 (Krise der Psychologie 1927) に於て見られる。即ちビュラーは聯合心理學と構造心理學との相容れざる性質を持つものを包容して體驗、行動、精神の三者を包括する心理學的立場を求めて、自己の心理學的立場とし、こゝに意識心理學の立場、行動心理學の立場、精神科學派の立場の三個の立場を統一しようとした。即ちこの三方面は心理學に於て必要缺くべから

ざるものとして、これを言語の場合に例をとつて考へ、言語の心理學的研究には必ず、これら三つの立場に相應する方面の必要であることを唱へたのである。例へば言語は、一面には、意識を表現し従つて意識心理學の問題を持ち、會圖又は表出運動として之を外面的に研究することが必要であり。これ即ち音聲學の方面として行動的研究を必要とし、最後に言語の表現又は叙述は、對象又は事件を示すものであつて、この點に精神科學的立場が要求せられると考へ、斯様にこの三つの立場を含む總括的立場は目的觀を意味し、全體觀を意味し、かくて、彼は構造、意義、目的等を心理學の根本的概念と考へてゐるのである。この思想は外見之に接すると、その取扱方が巧みであつて、素人はやゝもすると幻惑され易いが、然し、その思想の根柢には折衷主義へのものが見え、私はビュラーを以つて折衷主義の典型と見るのである。然しさういつても、この思想の中に心理學的に最も興味ある問題がないといふのではない。否、私はビュラーを彼の若かりし時代へ置いて尊敬したいと考へるものであつて、こゝにも又、時代を背景にして見たいと思ふ。ビュラーは斯く折衷的であればこそ、一面、古い傳統に生きる心理學者から相當に認められ、他

面、新思潮とも巧に連絡し過渡時代に生き延びた學者の一人ともいへよう。

註、序に記したいと思ふのはビュラー夫人(Charlotte Bühler)は現今、歐洲婦人心理學者中の名星であつて、兒童乃至青年研究に於ては男子心理學者と並んで一流心理學者として恥しくないことである。カッツ夫人、シテルン夫人アルゲランデル女史等挙げれば婦人心理學者も少くないのでつて各、その特色はあるが中でもシャロットビュラー(Charlotte Bühler)とアルゲランデル(A. Argelander)女史とは將來がある様と思ふ。

ゼルツ(O. Sits)は、その出發點としての聯合説から遂に座標配列説(Konstellations-theorie)を採り入れ、これを更に複合説(Komplexionsheorie)に依つて補つて新天地を開かうとするものであるが、その所説は近來、形態派的考想に近づかうとして、結局、抜け切れないXを残すものである、といふのは座標配列説も聯合の強度だけからは見ないとしても、意識内容配列の關係を見ようとするものであつて、結局内容若くは要素心理學の臭味を持ち、この上に要素以上の全體性を強調するとしても、要するに折衷に墮する契機を持つこととならう、表面から見るとゼルツも精神生活の有機性を説き、凡て全體性に坐するものといつてはゐるが、私をしていはし

めると内容心理學として若し心理學を展開せしむることが心理學の任務であるとするならば、ゼルツの心理學はその頂上に位するものであらうと思ふ、若しこれが精神生活の理解に問題であるとする、彼も亦折衷主義者として過渡期の人々の中に入れらるべき學者である。

最後に、クルト、コフカ (Kurt Koffka) であるが、彼は一面、ウエルトハイマー、ケエーラー等と共に形態心理學者の一人として活動しつゝある學者である。只、形態心理學者としてのコフカに時折、不徹底や脱線が見られやうとするのは、彼が一面、ヴェルツブルグ派に育てられ、これから受けた因襲が禍するものといはざるを得まい、然し全體から見ると優れた學者の一人であることを失はない。

以上、曲折しなから述べた様にヴェルツブルグ學派はキユルペがボン大學に轉ずるに至つた頃から徐々に解體する運命を辿りつゝあつたものである、時折ヴェルツブルグ學派のことをキユルペ學派 (Die Külpe Schule) ともいはれることが少くないが、私はキユルペ派といふ場合は少しく廣義にとつてキユルペ門下といふ意味に用ゐてはどうかとも思ふが、概念上の取扱はさほど重要な問題でもある

まい、これは何れにしても心理學の發達の上には特筆せらるべき有力なる學派であることに問題はない。實に最近心理學の進路は更にヴェルツブルグ學派の問題を止揚して、こゝに、これ等學徒の困難を眺め、彼等の努力の跡をとむらひ、もつて追憶の種とするの域にまで及んでゐるからである。

參考書目

- (一) K. Marbe: Experimentell-Psychol. Untersuchungen über das Urteil 1901.
- (二) H. J. Watt: Experimentelle Beiträge zu der Theorie des Denkens. A. f. d. g. Psychol. IV. (1905 289ff.)
- (三) N. Ach: Über Willensnütigkeit und das Denken. (1905, 1910)
- (四) „ : Über Willensakt und das Temperament. (1911, 1920.)
- (五) „ : Über die Begriffsbildung, 1921.
- (六) A. Messer: Experimentell-Psychol. Untersuchungen über das Denken, A. f. d. g. Psychol. 8 (1906 1ff.)
- (七) „ : Psychologie 3 aufl. 1928
- (八) „ : Empfinden und Denken 1924.
- (九) K. Bühler: Tatsachen und Probleme zu einer Psychologie der Denkvorgänge Archiv f. d. g.

Psychol. 9. 1907. 297 ff. 12. 1908

- (10) „ : Über das Sprachverständnis, Bericht über den 3. Kong. f. exp. Psychol. 1909. S. 94-130
- (11) „ : Die Gestaltwahrnehmungen I, 1913
- „ : Die „Neue Psychologie“ Koffkas, Zeitschr. f. Psychol. 99, 1926 S. 145-159.
- (111) “ : Die geistige Entwicklung des Kindes, 2 aufl. 1921
- (1111) “ : Krise der Psychologie 1927.
- (11111) O. Selz: Über die Gesetze des geordneten Denkverlaufes, 1913.
- (111111) “ : Gesetze der produktiven und reproduktiven Geistestätigkeit 1924.
- (1111111) “ : Komplex- und Konstellationstheorie, Zeitschr. f. Psych. 83, 1920 S. 221ff
- (11111111) “ : Zur Psychologie der Gegenwart (über das Verhältnis der Würzburger Schule zur Gestaltpsychologie Koffkas u. a) Zeitschr. f. Psychol. 99. 1926 S. 160-196.
- (111111111) K. Koffka: Zur Analyse der Vorstellungen und ihrer Gesetze 1912.
- (1111111111) F. E. O. Schultze: Einige Hauptgesichtspunkte der Beschreibung in der Elementarpsychologie. I. Erscheinungen und Gedanken A. f. d. g. Psychol. 8, 1906, 241ff. II. Über Wirkungsakzente, Ebenda, 339ff. III. Über Organempfindungen H. 11 1908 147 ff.
- (11111111111) O. Külpe: Vorlesungen über Psychologie 2. 1922.
- (111111111111) “ : Über die methoden der Psychologischen Forschung, Internat. monatschrift f.

Wissenschaft VIII 1914, 1053ff, 1219ff.

- (111111) “ : Über die moderne Psychologie des Denkens, Ebenda. VI 1912 1069 ff.
- (1111111) C. O. Taylor: Über das Verstehen von Worten und Sätzen, Zeitschr. f. Psychol. 40. 1906, 225 ff.
- (11111111) W. Wundt: Über Ausfrageexperimente und über die Methoden zur Psychologie des Denkens, Psychol. Studien III, Heft 4 1907.

第六講

ゲ・エ・ミュラーの複合説と、

その門下の貢獻とに就て

私は、ヴェルツブルク學派は大凡、舊心理學の立場を出發點として新興の問題を暗示したものであつて、この派の人々の中には興味ある方面を開拓しようとする學者のあることを指摘したのであるが、こゝに別箇の潮流から舊心理學の立場に立つて、新心理學の問題を取扱はうとして苦心してゐる二、三の流れを辿つて見よう。先づ、この點で眼立つのは、獨逸心理學界の老大家ゲオルグ・エリアス・ミュラー (Georg Elias Müller (1850—)) を挙げねばなるまゝ。

彼は、その業績一般から見ても忘れられ難い學者であつて、一面には、それ自身の研究に依つて學界に絶えず問題を提供し、自らの立場を踏まうとした學者であるが、他面には、その門下から幾多の俊秀を輩出せしめ、これに依つて學界に貢獻した

ことも少くない。

その主なる業績としては、先づ精神物理學の方法論上、幾多の新機軸を出し、これを組織するに與つて力があつた學者の一人であつて、これを或は『精神物理學の基礎』(Grundlegung der Psychophysik 1878)の中に若くは『精神物理的方法論の視點と事實』(Gesichtspunkte und Tatsachen der Psychophysischen Methodik 1904)の中に示し、既に、古くから感覺的注意の問題を探り、記憶研究に志し、表象過程の再生的傾向を問題とし、遂に表象の固執傾向 (Die Perseverationstendenzen) の存在することに着眼し、これを實驗的に論證し、これに依つて得た理論的考察を進めて『記憶活動と表象過程』^(三)に於て、その學説を組織大成し、こゝにエーレンフェルス以來の形態學乃至、形態の問題が徐々に擡頭すると、これを自家の中に攝取して所謂複合説 (Die Komplextheorie) を提唱して形態心理學に對抗しようとし、千九百二十三年、『複合説と形態説』^(三)を出し、これに次で、その翌年、心理學綱要^(四)を著し、これが即ち形態心理學との論戰の種となつて、ウオルフガング・ケーラー (Wolfgang Köhler) は同名の論文、即ち『複合説と形態説』^(五)をもつて之が排撃を試み、かくて學界に一つの波紋を投じたのであるが、ゲ・エ・

ミュラーの學說の頂點は、その複合説に至つて完成したものと見ることが出来る。然らば、彼の複合説とは果して如何なるものであらうか。

彼は、從來、徐々に擡頭した形態形態質等の概念に代ふるに、複合 (Komplex) なる概念をもつてしたのである。而も、この複合は、その成素 (員肢) に特定の作用が働きかけることが必要であつて、こゝに複合としての統一を生ずると考へたのである。詳しくいふと、彼は、こゝに集合的把握 (了得) (Kollektiveauffassung) があるとし、これを分つて二つとし、一は、集合的同時把握であつて、二を集合的繼時把握であるとした。

前者は、同時的に成素が與へられる場合であり、後者は繼時的に成素が與へられる場合であるが、その何れの場合に於ても、同時的、若しくは繼時的注意が有力なる作用として働きかけるのである。ところが、彼ミュラーは、更に、集合的把握を容易ならしめ、且つ、これを誘起するものとして、凝集要因 (粘着要因 Die Kohärenzfaktoren) といふものを假定したのである。

この凝集要因が分れて二つとなる。一は、第一次的凝集要因であつて、空間的接近 (Die räumliche Nachbarschaft) 要素の同様性 (Die Gleichheit der Elemente) 色彩又は形の

類似 (Die Ähnlichkeit der Farbe od der Form) 印象的 (Impressive, Eindringlich) 相稱的過程 (Symmetrische Verlauf) 輪廓の影響 (Der Einfluß der Kontour) 等はこれである。即ち、これ等の要因が経験なき幼児の集合把握を助けるのである。更に、二には、第二次的凝集要因即ち經驗的因が働いて成人の集合把握を容易ならしむるものである。然るに經驗的に一定の印象を再三反覆して集合的に把握することの殘存効果が、遂に集合素質 (Kollektivdisposition) を發生するに至るのである。

然らば、斯かる集合素質は如何なる經過をとつて發生するものであらうか。今、これを簡單に見て置かう。

第一、例へば視野の一部分に注意を向けると、この視野の部分に當る視扇形の興奮性が著しく上騰するのである。ゲ・エ・ミュラーは、この範圍を名づけて形成範圍 (Die formative Zone) と呼ぶのである。

第二、興奮の一定の結合が、再三、特定の方法で集合的に把握せられた感覺を生ずると、同様な興奮結合が再び現はれると同様な集合把握をする傾向が出来る。これ即ち集合素質の發生を示すものであつて、集合素質に基いて再現す

る場合は、非常に早く現はれる様になるのである。

第三、一度集合素質が出来る、今度は、その一部分が興奮せられても全部の集合把握をなさしめる様になるのである。

第四、然し不充分的興奮の場合、全體を喚起するには種々なる條件が満されなければならぬ。例へば集合素質が強く且つ容易に喚起せられ得るものであること、従來の經驗に依つて興奮性を起す素質が一義的に決定せられること、注意が感ぜられる視野に向けられてゐること等が満足される必要がある。

かくて、こゝに假定せられた集合素質は、所謂一定の内容に對する素質といふ考へ方であるが、これが喚起せられる容易さは、第一には、原本の集合把握が容易に喚起されたものである場合、第二に、集合把握の練習性であつて、練習された場合に於て起り得るものと考へた様である。

そして彼は與へられた印象の傳はる徑路を三段的に考へ末梢作用、注意作用、素質効果を認め、こゝに複合知覺の成立を考へ、かくて發生した複合は現象的にも機能的にも統一をなすものとして、複合の統一性を高唱した。複合の統一性 (Einheit-

lichkeit) はいふまでもなく、次の二方面に、その根源を持つのである。即ち、一には、一つの複合の成素が相互に堅く聯合せられ、複合が全體として再生的傾向を持ち、全體は部分以上の性質をもつことであり、二には、集合的注意の際に吾人の動作の特性が働くことである。この考へ方からゲ・エ・ミュラーは複合といふ概念を形態説の形態概念よりも包括的なものと考へ、『形態とは私の場合には、或複合の一つの性質である』(Die Gestalt ist bei mir eine Eigenschaft eines Komplexes) とする論法を用ゐてゐるのである。そして、この立場から各方面の學者が形態知覺の實驗的研究に依つて得た成果を凡て説明しようとして企てたのである。

さて、ゲ・エ・ミュラーの心理學的組織殊に複合説は新舊心理學の諸問題を折衷しようとして試みた典型的のものの一つであらう。既にウォルフガング・ケエーラーが、これを痛烈に批評した様に、ゲ・エ・ミュラーは一面に於て、固定的に感覺を考へ、即ち恒常感覺を、こゝに豫想し、従つて固定的に與へられるものを集合して複合を作る作用が要求せられるに至り、注意といふ傳統的な曖昧概念を用ゐ、更に、それに補助的に働くものとして凝集要因を假定し、若し、これを用ゐなければ複合の新性質が

説明出來難い運命に立ち至つてゐよう。加之、複合素質の假定が又、重要な役割を演じなければならぬ破目に陥つてゐるのである。

然るに他面では、視的所與の联接性 (Die Gegebenheit) があるとしてゐるが、すでに、これに联接性を認めながら、どうして、更に、これらを集合する特殊の作用を認めなければならぬのであらうか。

勿論、彼は、又重要且つ興味ある方面を多々暗示してはゐるが、要するに、彼も亦要素心理學の立場に於て新興心理學の諸問題を眺めねばならぬ運命にある學者であつて、二つの異質的なもの、接木から、その學說上矛盾ある諸點を残すに至つてゐるものではあるが、彼も亦時代の影響から脱することが出來ぬ例の一つに數へられるであらう。

ゲ・エ・ミュラー門下には逸足が少くない。就中、私はエー・エル・イエンシュ (E. R. Jaensch) デビッド・カッツ (David Katz) エー・ルビン (E. Rubin) の三者を擧げること躊躇しないであらう。これら、何れもその業績の質若くは量に於て決して見落すことが出來ない學者達であることは、何人も否定すまいと思はれるのであるが、就中、

マールブルグ (Marburg) 大學のエリヒ・イエンシュ (Erich, R. Jaensch) は、その見るからに精力横溢する體格と、独自の雄辯とをもつて學界に雄飛し、空間乃至音響知覺の方面に關する實驗的研究に根ざす知覺論と、而も又、その包括する範圍尙ほ極めて廣く、彼の研究の全範圍に横はると自ら稱する直觀像學說とに於て、独自の世界を開拓し、心理學界に波瀾を捲き起しつゝある者の一人であり、デビット・カッツは色彩知覺の研究を土臺として、そこから出發して獨得の新天地を開き、或は兒童研究に、更に、これに關聯して教育的問題へと手を延べ、今やローストック (Rostock) 大學に於て、その研究を進め、その夫人と共に、心理學界の一角に特有の地歩を占め、ルビンは又、その獨創的研究殊に、所謂、圖形と地面とに關する現象的實驗的研究に於て、新心理學に寄與する所少からざる學者といへよう。

かういつても、これら三者の研究の眼目を知るには、尙ほ註釋が加へられねばなるまい。當面の問題からいへば、幾分、脱線の氣味はあるが、私は敢へて先づエーリヒ・イエンシュから始めて、その研究の意義、殊に、その直觀像學說 (Die Lehre von den Anschauungsbildern) を中心として論じて置かうと思ふ。

さて、假りに何かの物體が嘗て自分の前にあつたと假定して見よう。今、この物體について私共は表象像を持つことが出来ることは、こゝに説明を要しないことであつて、物體を取り去つてから、暫く後になつても、それに就ての表象が經驗せられる。これと同じ様に物體を取り去ると、すぐ後には所謂殘像が經驗せられる。この兩者は何れも記憶像であるが、この兩者の中間段階に位する未分化的状態にある記憶像の一種が、所謂直觀像と名づけられるものである。

エーリヒ・イエンシュの直觀像學說と唱へられるものは、殘像と表象との中間段階に横はる未分化なる所謂直觀像の存在を基礎として、こゝから心理學的類型的の研究を行ひ、これを生理的研究に關聯せしめ、精神科學的性質を包含せしめようとする研究であり、更に之を知覺論一般に關係せしめ、發達の考察の歩を進めようとする試みであつて、所詮、教育的問題に關聯しようとする運命を持つものである。従つて、その研究は先づ直觀像の獨自の存在とその特質、分布状態の研究に始るのであるが、元來直觀像と唱へられるものはウィーン(Wien)の心理學者ウルバンツチュ(V. Urbantschitsch)が千九百七年始めて之に特殊の意義を與へ、主觀的視的直觀像として獨自の存在を指適したのであるが彼に於ては之を未だ知覺學說の根柢的のものとして見ようとする様な點は見えなかつたのである。ウルバンツチュが指摘するに至つたこの現象は古くは殘像の特殊なる一形式として見做され若くは時に主觀的性質を強調して表象像と考へられてゐたものであつて、例へばフェヒネル(G. T. Fechner)の所謂記憶殘像ヨハネス・ミュラー(Johannes Müller)の主觀的幻像ビネ

ー(A. Binet)の想像的知覺マルチン(I. J. Martin)の投射的記憶像若しくは一般心理學者が、時折、反覆感覺(Repeated sensation: Wiederholungsempfindung)と呼んだものに近い現象である。

然し、この直觀像は距離に依つて、投射像の大きさが異つて表現することを示してゐる所謂エンメルト法則(Das Emmertsche Gesetz)に、従はない點で、明かに一般の殘像と區別せられ、その發生上、記憶像として未分化状態に留つてゐる點に於て一般の表象像とも區別せられ、この中間に横はり、或は、時に、殘像の方向に移行し、或は、時に、表象像の方面に推移する状態が見られ、これが、何れに、近くかは、當該個體の人格の體質と、その直觀像を表現する場合の事情に依存するものである。

エーリヒ・イエンシュは如上の直觀像の眞意義を認め、知覺の未分化的統一の原本的要素を、これに求めて、これを兒童研究の領域に導き入れようとし、かゝる直觀像を生ずる素質を持つものを、アイデチケル(Eidetiker)と名づけ、その素質をアイデチツシエ アンラーゲ (Eidetische Anlage)と呼び、この研究をアイデチク(Die Eidetik)とした。アイデチクはいふまでもなく本質的型式學の一種ともいふべきものであるが、その包括する範圍は極めて廣汎である。さてイエンシュ及び門下の人々は直觀像を基本として、その研究を進めようとするものであるが、直觀像の特色は、既にウルバンツチュ以來、種々、數へ擧げられ、殊にイエンシュ門下のクロー(G. Kroll)は例へば幻覺的明瞭性を持つとか、豊富さ、持續性、強い緊張感覺があるとかの種々の特性を指摘し、かくて兒童乃至成人に於ける分布状態を調査研究してゐる。かゝる分布状態に就ての研究は直觀像學說の基礎として最も有力なる方面であつて、イエンシュ門下の好んで取扱ふところである。勿論、直觀像は單に視的だけに限られるものでなくて、例へば皮膚感覺、聽覺等にも見られるとするのである

が、これらは稀な現象であつて、彼等の從來主として取扱つたものは視的直観像である。視的直観像にあつては之を一般的に見ると、大體青少年に、その平均率が高く、マールブルグ市 (Marburg) で調査せられた割合は四十パーセント前後であつて勿論地理的區域の相違によつてこの割合は著しく高下するといふのである。これを調査する方法は比較的輪廓の明瞭な單色精密圖を用ふるが便宜であつて、例へば日常生活の或場面を描寫した單色繪を約十秒前後見せてからテスト的にこの繪圖の各部分に就て問題を作つて置いて、之に答へさせて、その結果を調査整理する方法に依るのが簡易であらう。條件を種々變化して調査するのは勿論である。そして、その調査の遺口も新しく考案することも出来よう。

かくてエリヒ・イエンシュは各種の研究成果から二個の直観像の型を發見し、一は殘像に近い直観像を持つ型であり、他は表象像に近い直観像を持つ型である。殘像に近い直観像を持つものは機械的の人に見られ、表象像に近い直観像をもつものは有機的の人の中に求められる。

ところで、如上の二個の型式は個人の體質と平行し、更に氣質、乃至は反應型と平行すると主張せらるゝものであるが、これらの考想、特に體質乃至反應型の研究に關してはイエンシュの兄弟であつて、醫學的研究家であるワルター・イエンシュ (Walter Jaensch) の研究⁽¹¹¹⁻¹¹⁴⁾に負ふ所、大なるものがある。この研究に根ざす直観像の兩型式を考察するには如上の三方面に就て先づ考へて置く要があらう。

第一、體 質 型

ワルター・イエンシュは、先づ直観像を持つ被験者の精神物理的體質研究を志し、即ち一面には當該人格の心的方面と物的方面とを顧慮して研究し、直観像を生じ易き能は特定の身體的特徴と密接に關係あることを

察し、殊に青少年に於て、直観像の型式と體質上の型式との一致あることを認め、直観像を持つ二個の型に應じて體質上の二個の型式を對應せしめたのである。この二個型式とは即ち所謂、B型(バセドウ型)とT型(強直型)とである。

B型はバセドウ病の縮圖を示すが如きものであつて、甲状腺の機能の過度昂進をもつて著しい特長とし、T型は所謂、潜在的強直病の縮圖であつて、例へば副甲状腺の機能障害に基くとされる。

直観像を有するものは大抵この兩型の何れかに屬するが、時折この兩型の結合としてB-T型が見られる。

第二、氣 質 型

以上の兩型の特質は、同時に外面的の特長に結合し、こゝに往々、著しい氣質的差異が考へられる。

先づ、B型に屬する者は有機的であつて、絶えず全精神生活に聯絡するものとしての働き、作用をなし眼は大きく輝き、生き／＼とした氣質であつて、常に心の動く所を表現し、従つて藝術家的の色彩が濃厚である。だから、純粹のB型の者の直観像は、當該人格に屬したものと表現せられる。反之して、T型に屬する者は眼が冷靜で、物を見るに情緒を伴ふことが少く、外界を凝視したまゝ動かない。従つて觀察家的色彩が濃厚である。だから純粹のT型に屬する者の直観像は、彼にとつて幾分、見慣れぬものとして、若しくは強要的のものとして表現され、時に極めて永く見られ、而も、これらの人々の特色として、時に周期的増進性の頭痛に悩まされ、夜泣き、夜驚、嚙語、夢中遊行、若くは暗黒に對する恐怖を伴ふことが多い。

第三、反 應 型

B及T兩型、共に、所謂、内分泌に關係するものと考へられるから、これら兩型は特定の薬に對して異つた

反應型を示さなければならぬ。即ち特定の薬を用ひて或程度まで統制することが出来ると考へられるであらう。兩型中、T型は、例へば、カルシウム、チレオイデン等の薬を與へると直觀像が弱められ、燐酸カルシウムを與へられると、強められるといはれるが、B型はこれらの薬劑に對して反應をあらはさないといはれてゐる。さて、右に述べた三つは直觀像の兩型の持つ三方面であるが、就中、T型式に屬するものは個體の發達の各段階を比較的固定的に支配しB型式のものも勿論、同様であるが、時に幾分、推移を示すことが推定せられる。これを一般的に見るとB型は甲狀腺の機能昂進であり、T型はこれが機能の減退であるから、イエンシユ及びその門下が考へる様に、若し直觀像と體質乃至反應型との如上の關係が許されるならば、精神物理的生活に於ける直觀像の意義は少くないだらう。

エーリヒ・イエンシユはかくて殘像と表象像との中間に横はる直觀像を以つて、知覺の本源的要素と考へ、この未分化的統一から知覺乃至再生像が發生するとし、而も同時に知覺の個體的發生の源泉をこゝに求め、これを初生兒の生活に就て豫想するのみならず、自然民族に於ける精神生活にも適用しようとするのであるが、殊に如上の未分化的統一から生起する發達過程に於て二個の典型的現象があるとして、これを表象界に於ける發達に例を求め、一般概念への道程を明かにしようとした。

エーリヒ・イエンシユ及びその門下が一般概念の發達に表現する綜合形式として指摘するものは、所謂流動現象 (Fluxionserscheinungen) と、合意味的組成 (Sinngebilde Komposition) とである。

流動現象と稱するものは、物を考へる場合に於て、著しく運動、若くは推移、流動が經驗せられる様なものであつて、これを具體的にいふと、例へば今、富士山の形を表象する場合、基本的構造は同じく富士山の形を示すが、時折幾つかの輪廓上の偏異をもつた表象像が表現し、甲から乙へ、乙から丙へと推移して、遂に最後に、特定の表象像が捉へらるる様な場合は少くない。しかも、これらの間には、絶えず變化や運動が經驗せられる。これが即ち流動現象である。同一植物の葉で、多少その輪廓上の偏異があるものを簡單から複雑へと列して眺めて見ると複雑な物に至ると著しく運動が感ぜられるが、流動現象はこの場合にも比較せらるゝ様に甲から乙へと著しく變化があらはれ、遂に最後に一定の形として固定するに至ることがある。繪圖を眺める様な場合に、その中に表現されてゐるものが單に併列せられたものとして感ぜられないで、それから續々と發展、變化してくる様に感ぜられ、それが變化、流轉しながら、自分に話しかけ、動作しかける様に感ぜられる場合にも、又、著しい流動現象が起るのである。この場合にも多少、偏異した幾つかの表象像が發展してくるとも見る事が出来るであらう。直觀像の型からいへばB型のも

のは、とりわけ如上の流動を経験する傾向が多いともいはれよう。

一般概念と稱せられるものの一つの構成経路は流動現象に依るものと考へられる。第二の総合的形式である合意味的組成(Der sinnemäßige Komposition)と稱せられるものは、有意義に従つて、その特質だけが撰擇せられ、特定の新構成を形作るに至ることを名づけるものである。即ち、時に、知覺像と直觀像とが融合して新しき複合體を作るに至るものであつて、しかも個々の特質が原型には存しない様な新しい創造を構成するに至るのである。だから、この點に於て價值的視點が強調せられるものであるが、エリヒ・イエンシユは、こゝに三段の撰擇を考へ、先づ最初は對象界が興味の中心を占め、やゝ後になると對象的興味が一定の理念に依つて誘發せられるやうになつて、特定の範圍だけに限られる様になり、遂には、美的なるもの、適意なるものだけが撰擇せられ、不適意なるものが、これに依つて改造せられるに至ると考へるやうである。

右に述べた所によつてもわかる様に、イエンシユ及びその門下に於ては、直觀像は知覺界の構造に就て、基礎的役割を演ずるものであつて、従つて彼等は、この視點

から、色彩の恒常、大さの恒常等に就ても、研究したのであるが、しかも直觀像を本源的と考へるから、結局、未分化的統一としての構造を本源的として、こゝから所謂構造的特性を問題として、志向的意味關係を精神生活の特性とし、精神的構造の層を問題とし、これを實驗心理學的に解明しようとするのであるが、併しエリヒ・イエンシユは只これだけでは満足しようとしなない、即ち彼は、これらの成果の上に一つの哲學的世界を建設しようとしてゐるのである。

却説、以上見たエリヒ・イエンシユの所謂直觀像學説は、その中に勿論、一面の見るべき點を含み、これを實驗的に解明することは興味少からざるものであることを暗示するものであるが、その學説中には確定された事實と、推定とが多分に混同せられ、未知數の領域としてこれを取扱はなくてはならぬ。何故さう論斷するか、簡単に、その理由を述べて置かう。

第一、直觀像と稱するものが、マイルブルグ派で考へられる様に、普遍的現象ではないといふ點である。若し私共が幾百人かの被験者に就て調査すると、その中の幾パーセントかが直觀的記憶を爲すに過ぎない。マイルブルグ學派の

人々が調査した所に依つても、稀に七十%の様な高率を示す場合がないことはないが、普通には四十五%から三十七%位を上下し、時折、九%若しくは、その前後の低率を示すことが少くない。しかも年齢に依つて著しく相違を示してゐる。

第二、直観像は先にも見た様に記憶像の一種であるが、若しこれを知覺の本源的形式と考へると本源的感覺や、殘像が、これから分化したこととならう。古い心理學にもすると考へられた様な意味の要素的恒常感覺なら抽象的二次的と考へて見ることも或は可能であらうが、吾人の組織的感覺を記憶像としての直観像から分化すると考へることは出来難い。後に至つて、イエンシユを批評する場合に述べようと思ふが、彼にはその思想の根柢に要素的恒常感覺の考想が無意識的に働いて居り、こゝでもその考へ方から、直観像の方を起源形式と見るに至つたとも考へることが出来よう。

第三、だから直観像を個體發生の本源形式と見ることは極めて大膽なる論法であつて、直ちに肯定することは出来ない。

第四、實驗上、殘像、直観像、表象像が分化しない場合が多數に見られ、所謂全體像として表現することがあるといふ理由から、直ちに直観像の未分化的統一を想像することは、一部分から全體を推定する誤りを犯すものである。

第五、B、T兩型を二個の極限的形式として之が特質を描寫することはよい。但し、これが體質型乃至は反應型との關係は、全く想定的事實を多分に含むものといふべきである。

第六、直観像の特質の研究は、從來屢々試みられてゐるが、これを殘像乃至、表象像と比較して考究すると不明瞭な部分が非常に多い。

第七、知覺發達の學說の根柢に於て、知覺像と直観像との融合を基礎として論じようとするものであるが、併し直観像の起り得ない場合は、これをどう取扱ふかが問題でなければならぬ。

第八、故に、精神構造の發達層を直ちに直観像發展の層として考察することは躊躇されなければならぬ。

第九、直観像學說その物が、既に如上の點を包含するものであるから、この上に

哲學的思索を勞し思辨の世界を築くことは、砂上の樓閣を建つるに等しからう。

かう論じてくると、直觀像學說の根柢は未知數的のものであるが、しかもその思想の中には、著しく最近代心理學の興味ある方面が反映し、若し、その不純成分を除き去つて、新に研究の歩を進めるならば、又見るべき方向が求められよう。故に、この潮流の中に、考へらるべきものがあるとするならば、即ち新なる視點から再び直觀像といはれる現象を實驗的に研究し、これと或は殘像と、若しくは表象像と比較考究する點であらうと思ふ。一度直觀像學說が提唱されると、學界は之に對して疑を投げ各種の批評が出現して來たが中でも、コフカ(Kurt Koffka)は詳細なる實驗的研究から之に對する排擊的の立場をとるに至つてゐる。

エーリヒ・イェンシュの知覺的研究を見ると、一面、要素的恒常感覺を否定しながら、暗々裡に、これを豫想し、他面、注意作用を強調することとなつてゐる。これ等の點は恩師ゲ・エ・ミュラーの傳統に負ふ所、大なる點であらうが、學說上の首尾一貫には却つて又、妨害となつてゐるともいへるであらう。然し、これらの點を除いて見

ると彼は絶えず新問題を提出し、學徒を統率する一方の驍將である。

以上述べた直觀像學說に表現されてゐる理論的考察は、彼れイェンシュの持つ心理學的體系乃至哲學的考察一般に表現されてゐるのであつて、これは別箇の問題として論ぜらるべき性質のものであらう。

只、ここに、とり分け私共の興味を喚起するものは、彼がその門下と共に最近、公にした音響知覺に關する實驗的研究の中に流るゝ理論的考察に外ならない。

従來、音響心理學的研究に於ける一つの問題は純音の母音性に關する點であるが、これが果して純音本來の性質であるか、若しくはこれに他の要素が混入するためであるか容易に決定し得ない謎が含まれてゐる、ヘルマン(Hermann)は母音を調音から區別すべきものであると考へてゐたのであるが、夙に、母音が噪音性を持つてゐると考へてゐたイェンシュは、その勞作(Untersuchungen über Grundfragen der Akustik und Tonpsychologie 1929)に於て、その思想を更に強調するに至つてゐる。即ち彼はケーニヒ乃至ケラーに因由する母音のオクターブ配列の法則は疑ふ余地がないとするも、しかも母音を持つて直ちに調音乃至純音の性質とすることに反對し、調音に於ても尙ほ母音が聽かれることのあるのは調音に對する興奮には同時に噪音的興奮が參加してゐるがためであると考へたのである。蓋し、彼は噪音感覺をもつて未分化的なるものとし、これは必ずしも振動數に對する感ではなく、却つて振動數の平均値に對する感じであるとし、この噪音感覺が発生上早いと假定した。そして恰もフランツ・ブレンタノ(Franz Brentano)が噪音を音響灰

色 (Tongran) と考へた様に、視覚と音覺との間に著しい類似のあることを豫想するに至つたのである。即ち、噪音は未分化なること恰も無色感覺にも當り、調音感覺が分化してゐること、恰も色彩感覺にも比敵さるべきものであるとするのである。この理論を基礎として見ると色彩に就て明度決定が出来る様に各調音に就て、その噪音度を決定することが可能になる筈である。

さて、色彩明度の決定は、白黒兩極端の中間に横はる無數の灰色列に添うて當該色彩を漸次、移行せしめ、かくて明度の同一點を求むる方法が採用せられ得るであらう (ヒレブランド (Hilchbrand) 明度決定法) 然るに音の場合に就て母音性として論ぜられ來つたものはイエンシュの立場に於ては實に純音乃至調音と共に興奮せられてゐる噪音度に外ならないのである。

色彩に於て色彩感覺と同時に無色感覺が興奮せらるゝことは夙に、ヘリング (Hering) が唱導したことであるが、これとの類似を音の場合に適用したのがイエンシュの學說の要點である。

イエンシュの理論からすればオクターブ配列の法則に於てロの方向、iの方向の兩方面に於て噪音性が著しく、而もこの兩母音間に各母音が一定の明度配列にも比せらるべき序列を持つのである。

この研究を局部的に吟味するがためには所詮實驗的取扱ひの問題に觸れねばなるまいが、然し、これは、私の當面の問題ではない。只、音響心理學の立場から一言し得る點は、調音と噪音とを一つの系統の中に考へようとする彼の立場には暗示に富む點が少くないことである。若し立場を變へてイエンシュの心理學的考一般から之を見ると、先きに直觀像學說に就て觸れた様に、未分化的なるものから分化的なるものへの思想が自ら現はれてゐることが著しいといへよう。

さて、エリヒ・イエンシュと立場を異にして、その研究の歩を繼續し、時折、興味ある研究を提出してゐるものはダビット・カッツ (David Katz) であらう。今、彼れの勞作の一つ一つに就て述べる餘裕はないが、特に後に考察する問題に直接、間接、關係すると思はれる所謂、色彩の表現形式に就ての問題を少しく考へて置かうと思ふ。凡そ色彩が如何なる方法、様式をとつて表現せられるものであるかは一つの興味ある問題であつて、古くから心理學上の一つの問題は色彩恒常性 (Die Farhenbeständigkeit od. Farbenkonstanz, Constancy of colour) であつて、この問題は、大さの恒常、形の恒常等の問題と共に、最近代心理學が興味をもつて開拓したものである。

今、これを具體的實例で示して見ると、書齋にあつて讀書してゐる場合晴天であつても曇天であつても、但し又、日中であつても、夕方であつても書物の文字は黒く、紙は白いことに變化はない。即ち外界の光線の如何に關せず、一定の範圍内では、或物體は永久に白く或物體は永久に黒く感ぜられる。この現象を始めて着眼したエワルド・ヘリング (E. Hering) は白紙と黒文字とを反射する場合の光線の強度關係を測定し、善良なる印刷の場合 $\frac{1}{2}$ 善、 $\frac{1}{2}$ 黒の割合であつて、白紙の方

が十倍以上も光を反射するといふ結果を得た。ところが他方に、朝の机の上の照光と日中のそれとを測定して見ると、 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{30}$ 、 $\frac{1}{40}$ といふ結果を得て、結局、日中の黒文字は朝の白文字よりも約三倍強だけ強く反射することを知つたのである。然しそれにもかゝらず、朝も日中も、白は白黒は黒として保存せられる。これは明かに私共の色の知覺が只、外部の物理的作用だけで決定され得ないといふことを教へるものであつて、若し、これが物理作用だけで決定されるとすれば、朝の黒文字が日中になると白の方向へと變化し、晴天の白墨が曇天には黒く見えなければならぬだらう。

色彩知覺に於て、その相對的恒常性といふことが極めて重要であるところの事實であつて、若し、之なくば吾人の生活上、困ることが少くないだらう。即ち外界の變化に應じ絶えず變化すると、先づ、これを記憶し、再認することが困難になるのみならず、自己を外界に定位することさへ、容易なことではあるまい。然るに一定の限界内に於て、例へば石炭には黒、白墨には白、等の一定の色彩が與へられ、こゝに環境世界の中に自己を定位して、各種の物體の再認が容易になるとも考へられよう。

即ちヘリングは、こゝに記憶色といふものが存在すると考へ、各種の物體の色が一定の限界内で照光を變化しても恒常性を保つものであつて、かゝる恒常性に基いて物體の色が記憶せられるとして、記憶色 (Gedächtnisfarben, Memory colour) といふ名稱を用ゐた。記憶色はいふまでもなく物體色である。ヘリングに依つて提唱せられた色彩研究を辿ると、色彩には、そこに何等かの表現の仕方があることが期待せられる。この點に着眼して、先づ、これが組織的研究を志したものはローストック (Rostock) 大學教授ダビット・カッツ (David Katz) に外ならない。彼は色彩表現の仕方^(三八)を列擧して大體八個としてゐるが、その中でも最初の三個を最も基本的のもの^(三九)と見ようとしてゐる。

- 一、表面色 (面色) Flächenfarben, Film Colour) 遊動的で事物に關係ない色である。
- 二、上表面色 (Oberflächenfarben, Surface colour) 物の色、色紙の色である、その性質は確實的であつてヘリングの所謂記憶色であり、時に對象色 (Gegenstandsfarben) ともいはれる。
- 三、容積色又は空間色 (Raum od. Raumhaftfarben; Space-colour) 空間的三延長を持つ色、空氣の色、霧の色、暗室の色。
- 四、透明色 (Durchsichtigfarben, Transparent colour) 色硝子を通して物體を見たときの色、ゼラチンを

通して物體を見たときの色、一般に透明面を透して見た色。

五、反射色 (Gespiegelte Farben, Reflected colour) 滑かな面に光線が来て反射するとき、反射像のあるときの色。

六、輝く色又は光輝 (Glänze) 反射像がなくて、その面の色彩が光度に於て上表面色に優つてゐるときの色。

七、明るい色 (Leuchten) 明るい物體の色。

八、灼熱色 (Glühen) 灼熱したときの色。

以上八個中、根本形式と考へられる表面色、上表面色、空間色に就て見るに、空間色は、その性質が比較的明瞭であるが表面色(面色)の性質は之を上表面色と比較して見ないと明かでない。

今、この兩者の主要なる特質を對立さして見ると次の圖の様にならう。(圖表参照)

上表面色は特定の方法に依つて、これを表面色(面色)に移行せしむることが出来る。これをなすには色々の方法が考案され得る可能性があるが、簡単に、これを行ふには、上表面色に、或は陰影を投ずるか、若しくは照明するかの方法に依つて爲されよう。若し完全なる表面色(面色)を求めようとするならば色紙を衝立中の小孔からのぞき、色紙と衝立との距離を適度に變化して、色紙のことを考へないで、いはば無念の狀で、これに對すると明瞭なる面色が經驗せられる。

註 『教授上の供覽にはこの最後の方法が最もよい。私は從來これを用ゐてゐる』

カツツの色彩表現の仕方の研究は色彩構造を研究する場合の大なる暗示となつた。但し、その根本形式を幾つとすべきかは、枝葉の問題ともいはれよう。故に、これを

八個とするか、三個とするか、但し又、上表面色を表面色に還元して、これを空間色との二個とすべきかは、今、直ちに論定出来る問題ではないが、兎も角、これが大なる暗示となつて、或はカール・ビュラー (Karl Bühler) の色彩構造の研究となり、或は又、これを新しき出發點として例へば、アレシユ (Allesch) の色彩の美的表現の仕方の新研究となり、色彩心理學に於ける新天地を開く動因となり、知覺論一般から論ぜらるべき部分を多分に包有するのである。

表面色ト上表面色トノ對立表

		I 表面色(面色)	II 上表面色
I	定位上	定位不確實	定位確實 色紙ノ色ノ如シ
II	組織上	游動的	固定的
III	場所上	前方=並行的位置 ヲトル	視線ノ如何ナル場 所ヘモ之ヲ置クコ トヲ得
IV	形狀	滑カナ面	滑、硬、又ハ曲
V	美的效果	デリケート、美的 好感	力強く、精力的

るが、本書の性質上、避けて、他日これを論ずるの機会に譲ることとしよう。

カッツと相並び、更に、その獨創的研究をなしたつゝある者は、コペンハーゲン (Kopenhagen) のエー・ルビン (E. Rubin) である。ルビンの最も著しき貢獻は所謂、圖形と地面 (Figur und Grund, Figure and Ground) との問題を、現象的に、實驗的に究め、これらの性質を指摘し、最近心理學の發達に寄與する所、多大である學者である。彼が、その研究成果としての所謂、視的に知覺せられた圖形 (Visuell wahrgenommene Figuren) に就ては、機を得て、再び形態心理學の問題に關係せしめて、論ずる筈であるから、こゝにこれが如何なる内容に關係するかは、省略するが、彼の所謂圖形の考想はカッツの上表面色、ヘリングの記憶色にも關係して考察せらるべき契機を持ち、形態心理學的問題に關係する所が少くない。

以上、私はゲ・エ・ミュラー及びその門下の主なる人々に就て考へて來たが、その門下は多くミュラーから離れつゝあるが、就中エリヒ・イエンシュに於て、ミュラーの片鱗、最も多く残り、一方には、要素的感覺が暗黙の中に豫想せられ、他方、注意作用の豫想が著しいが、カッツに於ては、その色彩著しく減退し、エドガー・ルビンに至ると

参考書目

- (一) G. E. Miller und A. Pilzecker: Experimentelle Beiträge zur Lehre vom Gedächtnis, Zeitschr. f. Psychol. Erg. I, 1900
- (二) G. E. Miller: Gedächtnistätigkeit und Vorstellungsvorlaut, Zeitschr. f. Psychol. Erg. Bd. 5 (1911) Bd. 8 (1913) Bd. 9 (1917)
- (三) G. E. Miller: Komplextheorie und Gestalttheorie 1923.
- (四) " : Abriß der Psychologie 1924
- (五) Wolfgang Köhler: Komplextheorie und Gestalttheorie, Psychol. Forsch. Bd. VI H. 3, 4 S. 358-416, 1925.
- (六) G. E. Miller, Komplextheorie und Gestalttheorie 1923. S. 2.
- (七) V. Urbantschitsch: Über subjektive Anschauungsbilder, wien 1907.
- (八) G. T. Fechner: Die Elemente der Psychophysik
- (九) J. Müller: Über die phantastischen Gesichtsercheinungen 1826.

- (110) A. Binet : Psychology of Reasoning 1899
- (111) L. T. Martin : Die Projektionsmethode und die Lokalisation visueller und anderer Vorstellungsbilder, Zeitschr. f. psychol. Bd. 61, 1912
- (1111) E. R. Jaensch : Über die subjektiven Anschauungsbilder, Bericht ü. d. 7. Kongress f. exp. Psychol. Jena, 1922.
- (1111) E. R. Jaensch und Mitarbeitern : Über der Aufbau der Wahrnehmungswelt und ihre Struktur im Jugendalter 1923.
- (1112) E. R. Jaensch ! Über die Vorstellungswelt der Jugendlichen und den Aufbau des intellektuellen Lebens, Zeitschr. f. Psychol. Bd. 98
- (1113) E. R. Jaensch : Vorfragen der Psychologie des Denkens, Bericht u. d. 9. Kongress f. exp. Psychol. Jena, 1926.
- (1114) " : Über das Verhältnis von Elementen und Inbegriffen in der seelischen Persönlichkeit, Bericht. ü. d. 9. Kongress f. exp. Psychol. Jena. 1926.
- (1114) E. R. Jaensch : Die Eidetik und die typologische Forschungsmethode in ihrer Bedeutung f. die Jugendpsychologie und Pädagogik, für die allgemeine Psychologie und die Psychophysiologie der menschlichen Persönlichkeit 1925.
- (1115) E. R. Jaensch : Über die Wahrnehmung des Raumes 1911.

323398

- (1116) E. R. Jaensch : Einige allgemeine Fragen der Psychologie und Biologie des Denkens, erläutert an der Lehre vom Vergleich, 1920.
- (1117) O. Kroh, : Subjektive Anschauungsbilder bei Jugendlichen 1924.
- (1111) " : Eidetiker unter deutschen Dichtern, Zeitschr. f. Psychol. Bd. 85, 1929
- (1111) " : Eidetische Veranlagung bei Jugendlichen, Zeitschr. f. Kinderforschung, Bd. 29, 1924.
- (11111) W. Jaensch : Über Psychophysische Konstitutionstypen, Münch, Med. Wochenschrift. 1921. Nr. 35.
- (11112) " : Zur Physiologie und Klinik der Psychophysischen Persönlichkeit 1925.
- (11113) " : Über die Verbreitung eidetischer Phänomene und ihnen zugrunde liegender Psychophysischer Konstitutionstypen (Reaktionstypen) Klinische Wochenschrift Bd.5 1926.
- (11114) Kurt, Koffka : Die Untersuchungen an den sogenannten optischen Anschauungsbildern, Psychol. Forsch. Bd. 3. S. 124, 167, 1823.
- (11115) E. Hering : Grundzüge der Lichtsinn, 1. Hef. S.14ff. 1905.
- (11116) D. Katz : Die Erscheinungsweisen der Farben, Zeitschr. f. Psychol. Erg. 7 1911.
- (11117) K. Bühler : Die Erscheinungsweisen der Farben, die Struktur der Wahrnehmungen Heft 1. Handbrieh der Psychologie I 1922;
- (11118) G. T. v. Allesch : Die aesthetische Erscheinungsweisen der Farben, Psychol, Forsch. Bd 6, 1-4 1924, 1925

- (iii) Edgar Rubin : Visuell wahrgenommene Figuren, 1915, 1921.
- (iiii) E. R. Jaensch : Über Grundfragen der Farbpsychologie 1925.
- (v) E. R. Jaensch und Mitarbeitern : Untersuchungen über Grundfragen der Akustik und Tonpsychologie, 1929.

第七講 複合質とライプチヒ學派の諸問題

既に、屢々、論述した様に、クリスチアン・エーレンフェルスによつて、形態質が提唱せられ、アレキシス・フオン・マイノングによつて、基底上内容の概念が考へられ、これに類する思想が、心理學的考想の中心點に置かれようとする時に際し、當時ミュンヘンにあつたハンス・コルネリウス (Hans Cornelius 1863——) は『その成分の關係によつて、條件づけられてゐるが如き複合のかゝる性質を、形態質又は基底上徴表 (fundierte Merkmale) と名づけ』以つて、一面には、形態相互間の區別を指示するものとして、他面には、部分内容の關係によつて條件づけられる性質、特性を暗示する概念として、用ゐようとした、即ち、彼は部分内容に販することが出来ない様な複合の新性質に、エーレンフェルスの用法に従つて、形態質の概念を適用したものであるが、而もかゝる形態質は不認知的部分内容から成る内容に於ても認められ、この不分析

的内容の形態質は分析によつて、著しく、その性質を變化し、認知内容間の關係として、又、それ自ら形態質として表現せられる所以を考察し、この場合にあつては、特に注意作用が協合する所以を考察した。¹⁰⁰ 彼の如上の考察の特長とする點は、即ち、又、以つて、彼の感情に關する視點に表現されてゐるのであつて、彼によれば感情は、意識内容として現前されるものであつて、感情差は即ち内容的區別にすぎないものであるが、而も一般的に、各種の成分内容に依つて協合的に作用せられ、この成分内容の變化に應じて、吾人の状態の感情的調子が異つて表現するから、或體驗の感情的調子は又、複合の形態質の中に包括せられ、而もこの場合、全體の意識内容の形態質として、この性質を持つと見做したのである。¹⁰¹

さて、キルヒホフ (Kirchhoff) から出發し、自然科學的研究に、その端を發し、マツハ (Mach) アベナリウス (Avenarius) に、影響せられたと認められるコルネリウスは、當然、凡ての概念を経験に飯し、凡ての認識を経験から出發するものとして、哲學的問題をも、心理學的問題の研究によつて基礎づけようとしたのであるが、その心理學的組織も又、意識内容をもつて、基本事實として考察し、この聯關的事實を中心に置い

て考へ、或は、繼起的、同時的内容を區分し、これ等の内容の記憶としての殘存効果を念頭におき、自我をも、直接、意識内容の記憶によつて條件づけられた聯關とし、かうして、所謂、内容心理學の色彩を多分に表現してゐるのである。が併し、その出發點は生活としての體驗の聯關、即ち、彼のいふ流れの波として表現されてゐるものであつて、いはば人格意識の統一が、直接的の事實として與へられ、これを條件的に分析研究することを、心理學的研究の任務として考察した様である。

この立場から、彼は、先驗的方法の出發點をも、吾人の經驗統一内に於ける吾人の認識の一般的限定の中に、求めようとし、純粹自然科學の綜合先天判斷の中に求めようとすることを拒否したのである。蓋し、彼によれば所與の聯關が先驗的方法の最後の假定であつたからである。

かゝる思想から、カント哲學に於ける物其自體 (Ding an sich) は拒否せられるのであるが、これ等の哲學的考察は別問題として見ると、彼に於ては、上述のマツハ、アベナリウスの思想系統、ウイリアム・ジェムス (William James) に發する意識過程の分析の考察、乃至は、ヒュームに因由する聯合律の考察等が、接木的に取扱はれた觀が

ある。が併し、その根本的考想到於て、當時既に、聯合心理學と、原子論的考想とが批判的に取扱はれ、複合の形態質を高唱し、殊に、これを感情に適用しようとしたことは特異なるものであると見なければならぬ。

彼は千九百十年フランクフルト、アム、マイン (Frankfurt am Main) 大學に轉じてから、主として哲學的問題に、その歩みを轉じ、その思想は時代と共に推移したと見るべきであるが、今、それを辿る餘裕はない、只、心理學的問題の取扱に關して、尙ほ附加して置きたいのは、早くから發達の問題を考慮してゐたことである、彼は發達過程にあらはれる心的生起の成分を指摘し、その發達の様式を示すことを、發生心理學の問題と考へてゐるのであるが、この場合にも體驗の聯關、心的生起、若くはその條件を考へながら、その考想の背景には主として内容的考へ方が中心となつてゐることは見落すことは出來ぬであらう。

かくて、コルネリウスに、その端を發する感情複合の形態質の考想をとつて、發達心理學 (Entwicklungspsychologie) の旗幟をたて、所謂複合質 (Die Komplexqualitäten) を唱導するものは、フェリックス・クリューゲル (Felix Krueger 1874) 教授を中心と

するライプチヒ (Leipzig) 大學の人々に外ならない。蓋し、千八百七十五年、ウィルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt) がライプチヒに始めて、實驗心理學研究場を設置してから、一時、實驗心理學的研究が擡頭し、その主なる勞作はヴントの主幹した哲學研究 (Philosophische Studien)、心理研究 (Psychologische Studien) 等に連載せられたのであるが、ヴント引退後、研究所は二分せられ、一は、精神物理的研究部 (Psychophysisches Seminar) として、ウィルヘルム・ギルト (Wilhelm Wirth 1876) これを統率し、他は、心理學研究室 (Psychologisches Institut) として、クリューゲルの指揮するところとなつたが、前者は主として、精密的測定を中心として、純學究的態度を以つて終始し、後者はヴントの民族心理學的問題から出發して、それを大成すべき任務を負ふたのである。クリューゲルはヴントの下にあつて助手、私講師等をなし、傍らコルネリウスに師事し、千九百六年から同九年の間、南米に心理學を講じ、千九百十年ハルレ (Halle) 大學教授となつたが、ヴントの引退に當り、彼の後繼者として、即ち、發達心理學を中心として、徐々に心理學的問題の解明に向ひつゝあるものである、故に私は、特にクリューゲル教授を中心とする一派をライプチヒ學派と名づけようと思ふ。

クリューゲルは、先にも指摘した様に、ヴェントの心理學の中でも、特に、民族心理的方向の理念に指導せられ、發達心理學を根城として、各現象を、その來歴から眺め、個體的發達の各段階に關係して考究すると共に、社會發生的に規定せられるものとして、研究する必要を痛感し、この立場からヴェントの心理學に於ける感覺概念の不徹底を洞察し、簡單要素的なる感覺の概念、若くは一定の物理的刺戟と生理的器官に依存したものと見做さるゝ所謂外界刺戟の心的相關者としての感覺概念等の曖昧なる所以を考へ、寧ろ、發生心理學的にこれを見ようとしたところのエビングハウス (Ebbinghaus) の考想^(四)に結合して、感覺をもつて、體驗者の本源的反應方法と見做さうとする傾向を示してゐる^(五)。蓋し、ヴェントの感覺概念の問題に對しては、これよりさき、諸學者の間に於ける問題となり、既に、千九百十二、三年頃、柏林心理學者が、痛烈に批判したのであるが、一方には、自己の研究の立場から、他方には、外部の批判から、到底、ヴェントの如上の思想は支持し得ざるものと考察し、これを改造する必要を告白したものと見る事が出来よう。

かくて、フェリツクス・クリューゲルは、形態質に代ふるに、複合質 (Die Komplex-

qualitäten)をもつて、新性質に名づけようとしたのである。何となれば、複合質なる概念をもつて、形態質よりも廣義に解釋したからである。彼の考へ方に依ると、勿論、形態現象は體驗せられた全體に坐すのであるが、體驗せられた全體が必ずしも形態現象であると言ひ得ないからである。彼は、形態質は、寧ろ、認識的方面に關係するものと認め、エーレンフェルスその他の形態質を論ずる人々が、多くは對象論的立場にあつたが爲に、偏頗なる思想が包藏せられてゐると考へ、形態現象は、その他の複合質と現象的に、異つてゐる色彩を示すのみならず、體驗全體と、その部分との交互關係殊に、その條件的聯關に於て相違があるとし、これ等の差異を起すの條件の一として、一方のものには感情的要素及び、その作用が存在するが、他方のものに於ては、これが認められてゐないと考へるやうである。即ちクリューゲルは一方に於ては、ハンス・コルネリウスに結合し、他方に於ては自己の實驗的研究と發達心理學的研究の成果に基づき、その思想を擴張して複合質學說 (Die Theorie der Komplex-qualitäten)を建て、體驗全體性 (Die Erlebnis-Ganzheit) の考想をもつて心的生起の構造的限定性を論ずるに至つたのである^(六)。

複合質は體驗全體性、殊に、感情的全體性を示す概念であつて、感情的心的生起の全體性が最も直接的、本源的に意識に表現する方法、様式として、その特殊の色合として示される所に存するものであつて、これを個々の要素に分割する所には、存しないのである、心的所與は心的全體即ち體驗せられる全體性であるから、この直接所與全體の示す性質が感情であるともいへるであらう。

然らば體驗全體とは如何なる徵表を示すであらうか、蓋し、第一には、相對的完結性(一體性 Die relative Geschlossenheit) 第二、複合性 (Die Komplexität) 第三、分節性 (Die Gliedertheit)を示すものである、こゝに注意しなければならぬのは、彼に於て、感情は必ずしも、意識の客觀的内容に對する主觀的内容だけを、意味しないのであつて却つて、全意識内容の性質であつて、感情といふものも亦、他の意識内容及びその性質によつて共に決定せられるものに外ならない、故に、見方によつては、感情なるものは複合質の限界の場合に立ち、特に、全意識の複合質として考へられる、只、この點に於て、その師コルネリウスから一步出でようと思へるのは、全體複合の内向化をも、見ようとする傾向が、その論點の中に窺知されることであらう。

かうして、體驗全體性は分節せられるから、分節肢は全體に對して特殊の位置を與へられ、こゝに所謂次元が認められる、蓋し、分節せられる部分複合、形態、關係性、分節肢、作動聯關は體驗全體の中に坐し、従つて感情的色彩は、これ等の體驗部分にも、放射せられ、こゝに分節せられたる素質的全體性としての連續的條件的聯關を成すものである、こゝに心的構造 (Die psychische Struktur) の考想が見られ、一方に於ては、内容の複合質といふ見方が、根柢にあると共に、更に、それよりも、より包括的概念として、構造が考へられてゐる。

構造とは、分節し、それ自身、完結してゐる素質的全體を示す概念であつて、心的構造は、規則的に吾人の體驗の各種の質の色合をもつて表現せられ、體驗の全體性が最も多様に見られる、これ即ち複合質の複合質としての性質を示すものであるが、併し分節した複合質は、その素質全體の中に坐するものであるから、一面には、複合質は構造の性質を示す概念であつて、重複するが、而も、こゝに如上の兩概念が存することをさまたげない、蓋し、彼が、この兩概念を用ふる所以は、複合質をもつて、寧ろ、内容的方

面の考想を示し、構造をもつて、それから脱しようとする考想を示してゐるとも見ることが出来よう、構造に就てクリューゲル一派が、とらうとする態度は、心理學的態度であつて、デイルタイの様な目的論的色彩の濃厚なものではない。而もデイルタイに於ては構造を考へるに當つてとつたところの體驗についての考想は、純粹に心理學的であつたとはいへない、假りにその認識論的意味を除いて考へて見ても、文化や人格の規範的理念や、時折は、浪漫的理念や、現實的理念が滲透してゐたからである。

さういつても、彼の志す、構造は、フツセルに結晶されてゐる様な、何等かの作用が、何等かの内容に、抽象的に關係せられるといふ、スコラ哲學の遺物を豫想するが如き、形式的概念ではない、そして又、單なる可能的性質としての素質や、分類的能力概念を豫想する構造でもなく、シュテルン、ドゥリーシュ等に於けるが如き抽象的目的觀念が結晶されたものでもない、却つて、彼が説かうとする構造は、具體的分節した素質的全體に外ならないといへるだらう。こゝから全體性が發達の最高原理と考へられることも亦、了解せられる。

この流れにあつて、複合質の考想に寄與する學者は少くない、例へばハンス・フォルケルト (Hans Volkelt) は動物の表象に就て研究して、既に早くから原始的意識に於て複合質が支配することを指摘し、次いで、初期兒童期に於ける研究につとめて、その考想を深め、フリードリヒ・ザンデル (Friedrich Sander) は律動的問題を中心として研究し、或は、視錯覺の問題を取扱ひ、グンテル・イプセン (Günther Ipsen) は、ザンデル氏錯覺を出發點として、形態把握の問題を究め、更に、無意味語の形態と、意味とに關する研究を爲して、認識の理論を解明しようとし、この外、殆んど同方向に立つて複合質の意義を明かにしようとする學者は少くない。

この派の思想は先きにも見た様に、必ずしも、一義的ではないが、一面には、内容の複合質といふ考へ方が土臺となつて居り、こゝに當然、把握傾向が重きをなすべき運命を持つものではあるが、然し、複合質の根本思想が感情に置かれ、こゝを出發點として機能的全體へも移り行かうとする傾向が見られる。

把握の傾向を最後のものとして見ようとする傾向は一面ゲ・エ・ミュラーの考想に近づき行くことを示すものであるが、この派に於ては、彼に見られた様な注意概

念は、只、敘述的概念として用ゐられることが主眼となつて、これを説明的概念として用ゐようとすることは避けられてゐる様である。

さて、ライプチヒ學派についてこれを吟味して見ると、

第一、この派は一面、ヴェント他面、コルネリウスから出發し、時勢に順應しつゝ、開展しようとするものであるが、その當然の經路として、内容心理學の臭味を多分に包藏し、構造機能を説きながらも、何時も、この方面からくる根本的思想に坐して考を進めようとする點が著しいことである。

第二、原始的所與としての感情的全體性の考は、よいとしても、こゝに於ても、内容的感情の全體性が考察せられてゐることである。

第三、感情的調子の濃厚なる全體性を複合質とし、これが比較的微少なる全體性を示すものとして形態質を考へるといふことは、形態的概念の發生的歴史からいへば成程とも思はれるが、これを深く省察すると、所謂、内容的に考察せらるゝから、かゝる考へ方が、生起するものである、時折、形態といふ語が示すものを空間形態、時間形態といふ様なものだけに限らうとする考へ方がやゝも

すると、内容心理學の傳統から提示せられようとするところがあるが、さうすると別に感情的色彩の濃厚な場合を示すに、例へば、複合質の様なものが必要となるであらう、機を得て、私が詳述しようとする伯林派形態心理學で論じようとする形態は、内容的立場から考へられたものではないのであつて、勿論、内容を無視することは出来ないが、これに、その出發點を置くことは問題でなければならぬ。

第四、そこで、この派に於ては、形態質、複合質、構造といふ、三個の概念が考へられる様になるのである、複合質は、その特殊の場合として形態質を含み、複合質は又、構造の特殊の場合として包含せらるゝに至るとも見ることが出来る、構造概念になると、只に、内容的成分のみならず、機能的聯關が重きをなすであらう。

第五、内容的考へ方が強ければ強いほど、その内容に對する把握傾向といふ點が重味を置いて取扱はれ勝ちであることも想像せられる、若し内容的考へかから一步離脱して、最初から機能的見方が主となつてゐたらどうであらうか、否、

もう一步を進めて、内容と機能との間の構造的機能的全體が考へられてゐると、どうであらうか、ライプチヒ派の考想が、年と共に内容的見方を離脱しようとする方向に向はうとしつゝあることも、著しく看取せられる、今では調整 (Einstellung) を考へても、單に表象だけの調整を考へてゐないからである。

第六、以上述べた様に、この派の考想からも、一步進んで内容的見方を一度離脱して、更に、これを眺める様になると構造といふ概念だけで充分になるであらう、さうなると、この構造が機能全體において重點を持つやうになる。

第七、この派の勞作の多くが、複合質の存在を指摘することにとめてゐて、勿論、その意味での貢献はあるが、原始的意識の感情的性質は、これが未分化の状態、不分裂なる状態である限り、當然の問題でなければならぬ。

かく論じて、然し、これで直ちにライプチヒ學派が、最近心理學に與へようとする貢献を否定するものでない、既に、屢々、この點に就ては暗示したのであるが、簡單に示すと次の點が、その主なる部分であらう。

第一、「構造」の意義を明かにする點に貢献したことである、即ち、目的論的意義に

墮せず、抽象的形式化に陥らず、生々とした、具體的の心的構造を強調することはこの派の一つの寄與でなければならぬ。

第二、具體的の實驗的研究の中には、注目すべき勞作が、少くないことである。

第三、發達の心理學の諸問題の發達に寄與したことである。

參考書目

- (一) Hans Cornelius, Psychologie als Erfahrungswissenschaft 1897. S. 70
- (二) " " " " S. 168
- (三) " " " " S. 74
- (四) Ebbinghaus, Grundzüge der Psychologie Bd I. 2 aufl. S. 441. 1905
- (五) Felix Krueger : Arbeiten zur Entwicklungspsychologie Bd I. Heft I. 1915
- (六) " : Das Bewußtsein der Konsonanz 1903. S. 33. S. 61.
- (七) " : Der Strukturbegriff in der Psychologie, Bericht. ü d. VIII. Kongress f. exp. Psychologie 1914. S. 31—56.
- (八) " : Zur Einführung: über Psychische Ganzheit, Komplexqualitäten, Gestalten und gefühle Neue Psychol. Stud. Bd I. S. 5—121, 1926.
- (九) H. Volkelt : Über die Vorstellungen der Tiere, Inaugural-Dissertation 1912, V. Abschnitt, Die

Vorherrschaft der Komplexqualität im Primitiven Bewußtsein, S. 79—126.

- (10) H. Volkelt; Primitive Komplexqualitäten in Kinderzeichnungen, Bericht. ii. d. VIII. Kongress f. exp. Psychol. 1924.
- (11) Hans Volkelt; Fortschritte der experimentellen Kinderpsychologie, Vortrag im 9. Kongress f. exp. Psychologie
- (111) F. Sander; Rhythmusartige Gruppenbildungen bei simultanen Gesichtseindrücken, Bericht. ii. d. VIII Kongress f. exp. Psychol. 1924. S. 193.
- (1111) F. Sander; Über räumliche Rhythmik, Komplexqualitäten, Gestalten und Gefühle, Neue Psychol. Stud. S. 125—158. 1926.
- (11111) F. Sander; Elementarästhetische Wirkungen zusammengesetzter geometrischer Figuren, Inaugural-Dissertation 1913.
- (111111) F. Sander; Opische Täuschungen und Psychologie, Neue Psychol. Stud. I. S. 159. 1926.
- (1111111) G. Ipsen; Über individuelle Unterschiede bei der Gestaltauffassung, B. ii. d. VIII. Kongress f. d. exp. Psychol. S. 180. 1924.
- (11111111) G. Ipsen; Über Gestaltauffassung, Neue Psychol. Stud. Bd I S. 171—278. 1926.
- 以上の外、コルネリウスの哲學的諸勞作、並びに、クリューゲル主幹、新心理研究 (Neue psychologische Stud.) 誌上の諸研究が参考にせられた。

第八講 所謂、精神科學派の心理學に就て

最近代心理學を誘導するに、主として干與した諸の心理學派の問題は、或は、科學的心理學を夢想しながら、時に、哲學的、若くは形而上的問題と混交し、或は時に、偏頗なる自然科學的理念を模倣することに依つて、その取扱ふべき問題を見失ひ、自ら見るに足るべき成果を持ちながら、それは、只、單に來るべき新興心理學への示唆として留つた場合が少くなかつたのである。それらの潮流の裡にあつて、殊に、その思想上、精神の全體性を高唱し、原子論的機械觀に對して精神の構造觀を教へたものは、ヘーゲル以來の大精神史家とも名づけられるべきウイヘルム・デイルタイ (Wilhelm Dilthey (1833—1912)) 及びその流れを措いては少いであらう、而も、この思想潮流は、直接、間接、當時の學者をして反省せしめ、涸渴した從來の心理學に新しい生命を濺ぐことに與つて力があつたことは否定できないが、これを要するに、この

潮流は哲學的思想に留り、これを心理學一般から見ると、只、それに對する暗示を與へる種となつたにすぎない、蓋し、デイルタイの思想の根柢には、一面に、獨逸ロマンチックの血が通ひ、或は、他面には、所謂、シュライエルマツヘル(Schleiermacher)等に見られる『人』(die Person)の思想が滲透し、こゝに『人』が重要な研究對象として採られ、而も『人』が如何なるものであるかを究めんとすれば、これを、その歴史によつて眺め、個人の歴史的構成に着眼することが最も望ましいものであると考へ、かくて個性と人格との問題が契機となつて遂に經驗科學に哲學的の考想を協合せしむべき動因を導いたのである。

デイルタイ^(一四)は、所謂高等精神生活を分析して、要素を求め、遂に低級なる要素に還元し、かくて、これを結合せしめて構成的に、假説に假説を集積して説明しようとする、所謂構成心理學に對して、具體的精神生活の體驗の聯關を分解しようとするもの、即ち志向的關係を主要なる目標として進む心理學を、敘述的分解心理學(Die beschreibende zergliedernde Psychologie)と唱へて、これと對立せしめ、後者によつてこそ人間の内的生活の構造の聯關を把握し得るものと考へ、而も内的生活の如上の構

の聯關を典型的な人間にこれを求め、これを觀察し、これを比較し、これを敘述し、分析しようとした、かくて個體生活を、その歴史的構成を背景として、こゝに、これが型式を求め、これを一般的に敘述心理學の目標としたのである。

だから、デイルタイは一義的要素によつて因果的關係の立場に立つて現象を説明しようとする説明心理學(Die erklärende Psychologie)の中には、所謂自然科学的方法としての認識論的錯誤のあることを考へ、分析は要素的のものから出發すべきでなくて、發達した精神生活から始むべきだと考へてゐた様である。

元來、個々の心的過程は體驗に於ける精神生活の全體性に荷はれてゐるから、自己及び他人を研究するには自己の體驗を土臺として、これを了解する方法によるより外、道がない、これ即ち了解心理學(Die verstehende Psychologie)としての契機を示すものであるが、個人の精神生活は、それ自身、客觀化せるものであるから、例へば言語、神話、その他の文化財の間に客觀化せるものを了解を採るべき手段として研究することが出來よう。

彼の考想によると、生活體としての個體は、それが存する環境に條件づけられ、更

に、これに及ぼし、こゝに、内部状態の联接が存在し、この内部状態の联接が、即ち精神構造であるから、これが叙述的分解心理學の問題となるのであるが、而もこの内面的構造は、同時に、目的論的意義を持ち、精神構造に、本來、一定の目的性が與へられるのである。

さて、デイルタイが志さうとした方向は、文化哲學の新しい道を開き認識論の擴張をしようとしたものであつて、カント以來の自然科学的數學的偏頗に打勝つて、先驗哲學の心理的假定を正しい假定に置換へ、認識を體驗全體に坐するものとして、こゝに構造聯關を唱へたのであるが、彼の用ゐた心理學的考想は、それ自身としての役を果すといふよりも、寧ろ、所謂精神科學の基礎付けとしての方法論に向けられてゐると見るべきであらう、さういふ運命にあつたデイルタイの構造概念、乃至は、體驗の概念は、純粹なる意味に於て心理學的であると見ることが出来ないものであつて、その中に多分の不純成分を包含するものであるが、これをその思想發展の徑路から論ずると、千九百五年前後を境界として、それ以前の考想の中には、經驗的心理的成分を多分に包有し、徐々に、他へと、展開するに至つてゐるともいはれようと思ふ。

こゝに示される不純成分として、或は、時に、純粹に認識論的、論理的限定が混入し、或は、時に形而上的理念が重要な役割を演ずるに至つてゐることであらう。

私がこゝに反覆論述するまでもなく、ブレンタノーや、マイノング等に、時折、重要な概念として表現されてゐるところの所謂志向的體驗の考想は、その中に論理的なる契機を多分に包有するものであつて、或何かの作用が、何かの内容若くは對象に志向され、かくて、抽象的に考へられたものであるが、これ等の學者には未だ構造概念が表現されてはゐなかつたが、フツセル^(七)(Edmund Husserl)に於ては、この方向から來る傳統に坐して構造概念が考へられ、結局、形式的のものとして、或何かの作用が、何かの内容に關係せしめられて考へられてゐるのであらう。勿論フツセルに於ては、必ずしも、すべての意識現象を志向的と見るのではないが、兎も角、志向的作用(Intentionale Akt)は、或は表象作用乃至判斷作用等に分れるものである。

凡て、志向的作用は客觀化的作用(Objektivierende Akt)であるか、若くは客體(Object)を、その基礎として持つと考へられる、フツセルによつて考へられた作用は、見方に

よつては、意識の末梢部の認識に關係してゐるとも見られても致し方あるまい。ところが、デイルタイに於ては、勿論、これを末梢的には考へないが、ともすると形式化せられた構造への道程を含み、後に論述する様に、これが彼れの門下に於て殊に著しいともいはれよう。

如上の論理的認識論的意味を別個の問題として見ても、デイルタイの考想の中には、或は、ローマンチクの色彩を持ち、或は、實在の色彩をもつて、文化乃至人格の規範的理念の思想への契機をもち、結局、その説には本來、形而上學的究極性が豫定せられてゐるといつても過言ではあるまいと思ふ。

然し、これ等の問題を除外して見ると、マツハの『感覺の分析』が千八百八拾六年に現はれ、千八百九十年には、エーレンフェルスの『形態質に就て』が出で、これらの獨創的研究に次いで、デルタイが千八百九十四年『敘述的分解的心理學に就ての理念』を示したことは忘れることは出来ない。

デイルタイに發する精神科學派の心理學と稱せられるものは、その系統にフリシユアイゼン・ケエーラー (Frieschisen Koehler (1878—死去) エデュアルド・シュプ

ランガー (Eduard Spranger) フィアカント (Vierkant) 等、擧げ來れば少くないであらう、就中、シュプランガーは、デイルタイの所謂、説明心理學を自然科學的心理學とし、敘述的分解心理學を精神科學的心理學とし、前者即ち彼の所謂生理的心理學を、彼の心理學の統一から除外^(五)しようとし、こゝにデイルタイの思想を繼承してこれを發展しようとするに至つたが、彼の主張は現代心理學の一般的素養を疑はしむるほど幼稚な思想であつて、こゝに述べるまでもなく、デイルタイが當時批評した説明心理學は要素的自然科學的心理學であつたが、現代に於て、心理學の統一を單なる志向關係により、而も了解を唯一の手段とする精神科學的心理學をもつて、爲さうとすることは、時代錯誤も甚しいといはれるだらう、かゝる夢想的考想は暫く除いて、彼が統一の中心としようとする精神科學派の心理學の正體^(ハ一七)を考へて見よう。

さて、これは、既にデイルタイに見られた體驗の構構性を出發點とするものであるが、従つて體驗の中に坐する作用の志向性を強調し、フツセルに見られる様に稍、形式化し抽象化せられた志向關係が、とりいれられてゐるのであるが、殊に著しく

目立つのは作用を末梢的認識の問題として片づけないうで作用は生命の中心の作用價值を定立し、或は價值を體驗する自我の作用と見られることである。蓋し、人間の精神は自我に結合した活動體驗、乃至は反應であるから、各種の傾向、乃至、價值を客觀化し例へば新しい環境に於て、こゝに詩人の詩が生れ、畫家の繪畫となる様にかくて價值が客觀化せられて徐々に價值の體系を生じ、次元を作り、遂には個人が生産したものであつて、而も、超個體的價值の世界が建設せられるのである。

だから、個體の歴史的な生活に於て、發生した價值の具體化せられたもの、換言すれば個體生活以上の意味を有し、個體生活以上の妥當性をもつてゐるものを、或は、精神 (Geist) とよふ名稱で呼ばれ、或は、精神生活 (Geistesleben) 若くは、時に、客觀的文化 (Objektive Kultur) とよふ名づけられる。

かう考へてくると、精神が精神としての生命を保ち、而も、精神としての本質を保持するには、デイルタイ學徒のいふ價值の具體化の中に於て、始めて可能となるのである。價值の具體化は即ち彼等の所謂客觀化に外ならないのである。

かくて、そこに精神が價值世界を具體化し、これを客觀化す場合に於て、所謂構造

の聯關が論ぜられ、構造心理學が立てられるのである。即ち主觀的精神が同時に客觀的精神を包含し客觀化せられたるものが、又、再び體驗せられるともいふことが出来る、故に、こゝにいふ體驗は、その中に、先きにも見た様に不純成分が包含せられてゐるものであるが、この體驗には、それに相應した特性が認められなければならぬであらう。然らば如何なる特性が見られるであらうか。

第一、體驗は、その個體に對して直接的であり、従つて直接性が特長となることである。

第二、體驗は、全體性を持つことである、即ち、その中の部分は、統一の中に聯接せられる。

第三、體驗は、歴史的性質を持つことである、これ、即ち、個體が、既に、歴史的構成を持つてゐるものであるから、それに規定せられることを意味する。

第四、體驗は發達性をもつてゐることである。

第五、體驗は靜止的のものではない、即ち動的性質をもつてゐることである。

第六、體驗は客觀化的衝動を、その根基として持つてゐることである。

如上の體驗を基礎として、所謂了解が、その方法として論ぜられるものであるが、これによつて、精神的體驗構造の中に突入し、その意味を把握するのである、故に、了解するといふことは客觀的に妥當な認識の形をとつて、精神的聯關を有意味なるものとして把握するのであつて、従つて、只、有意味的複合だけが了解せられるともいひ得るであらう、かういつても、既に客觀化せられた形式を、後から、これを追ふて、再び創造して見るといふことは當を得ない、何故かといふと、既に客觀化せられてゐるものは、既に完了せられてゐるものであるから、只、再構成だけではいけない、むしろ、その中に存在してゐる意味を、目ざさなければならぬのである、こゝに了解といふものが主觀的精神が働いてゐる事を必要とするものであつて、これが客觀化すといふことが、了解をして可能ならしむるものである、故に、客觀化しつゝある主觀的精神の中に於て、この意味における有意味の把握が考へられるであらう。けれども、既に、了解的作用の成果が、有意味のものであるから、更に進んでは文化的産物を、一定の主觀に關係せしめて、これを、了解することも又、可能とならう。然し、この派が志さうとする最後の了解は、所謂、人格の問題に就てであらう、個々

の人格は即ち主觀的精神の構造的性質を持つてゐるものであるから、結局、それが存在する境遇の諸關係に關係せしめて、こゝに當該個體の全體像を描寫することも亦不可能ではあるまい。

右に論じた様に、この派に於ける認識の方法は、所謂、了解萬能であるが、主觀的精神の特性として、一面に於ては、その精神的作用によつて、精神の價值世界を具體化する事、他面に於ては、その客觀化作用によつて作られた客觀的精神に、再び生命を與へることを考へることが出來よう、この意味に於て、この派の考想に於ては、世界と精神は分離なる性質を持ち、明瞭なる形而上學的轉向を示すものであることを忘れてはならない。

さて、私は今、この派の部分的問題に深く立ち入つてこれを論ずる餘裕がないので、それは他日の機會に譲りたいのであるが、こゝに以上、述べた外、二、三の論點を附加して置かうと思ふ。

第一、この派、殊に、デイルタイの考想は、その種々なる難點を別として、方法論的にも、敘述的にも、條件分析的、乃至、發生理論的にも、當時の心理學の大なる示唆

であつたことは否定出来ない、殊に、この派の唱導する構造、型式等の概念は見
るべき部分も少くない。

第二、それは然し、一般的の思想としてであつて、具體的の心理學的問題として
は寧ろ、關係する所が少い。

第三、ハンス・ドゥリイシュ(Hans Driesch)が指摘してゐるのを、引用するまでも
なく、精神科學派の問題は、その多くが哲學的問題であつて、殊に了解の問題は、
その中に幾多の解明せらるべき問題の契機を、包含するものであることを忘
れてはならぬ。

第四、デイルタイ門下に於て、殊に、志向的體驗の考想が形式化せられ、こゝに論
理的の轉向を持つやうである。

第五、シュプランガーの所謂『生活形式』の考想は、デイルタイの所謂、發達せるも
のから分解の道程を辿つて立てられたものであるが、然し、この方向は心理學
的には問題を含むのである、最高文化のみから抽象せられた如上の考想は決
して普遍的のものであると思ひ誤つてはいけなと思ふ。

參考書目

- (一) W. Dilthey : Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie 1894.
 - (二) " : Einleitung in die Geisteswissenschaften, G. S. Bd.I. 1923.
 - (三) " : Abhandlungen zur Grundlegung des Geisteswissenschaften G. S. Bd.V. 1924.
 - (四) " : Abhandlungen zur Poetik, Ethik und Pädagogik 1925.
 - (五) E. Spranger : Die Frage nach der Einheit der Psychologie 1926.
 - (六) F. Krueger : Die Strukturbegriff in der Psychologie, Bericht. über VIII. Kongress f. exp. Psychol. 1924.
 - (七) E. Husserl : Logische Untersuchungen II. Bd. I. 1922.
 - (八) E. Spranger : Psychologie des Jugendalters 7 aufl. 1926.
 - (九) " : Der gegenwärtige Stand der Geisteswissenschaften und die Schule 1925.
 - (一〇) " : Zur Theorie des Verstehens und zur geisteswissenschaftlichen Psychologie. Festschrift Joh. Volkelt zum 70. Geburtstag 1918.
 - (一一) " : Lebensformen 5 aufl. 1905.
 - (一二) K. Bühler : Die Krise der Psychologie 1927.
- 尙ほ、外に、フイアカント、シュプランガー兩氏の講義講演等が参考になつてゐる。

第九講 精神分析諸學派の問題とその貢獻

從來、變態心理學上の一般的傾向として精神的變態の原因を求むるに、主として精神の機能的構造の中に於て探され、器官疾患の問題の擡頭が、機能的疾患の研究を等閑視せしめた場合は少くない。

所謂、機械觀的自然科學の滔々たる潮流が心理學的研究の全範圍に滲透し、その結果は、これらの方面に表現せられて、器官的故障の明瞭なる場合を典型として、これが不明瞭なる場合に遭遇すると、所謂研究不足として取扱はれ、孜々たる研究の結果は、遂に、これを還元し得るが如く見做され、果ては、機能疾患は、僅かに少數の學者に依つて、その研究の命脈を保たれたにすぎなかつたのである、例へば米國のモルトン・プリンス (Morton Prince) の如き、若くは佛國のピエル・ジャネー (Pierre Janet) の如きにあつては、早くから、この種の問題が着眼されてゐたのであるが、その潮流は、

寧ろ、民間の信仰に留つて、未だ普遍的の意義を認められるに至らなかつた。

ところが、具體的生活の實際から、これを見ると、時に神經性疾患の極度に昂進する場合に稀ではない、健康の人も往々これに悩まされ、健康の人と不健康の人との限界は、事實、明瞭に限定されることは困難であらう、この事實を最も適切に吾人に教へたものは、かの歐洲大戰に於ける神經性疾患の續發であつて、器官的に健康なる人間が、屢々、これに悩まされるのが教へられ、他面には、これよりさき、所謂精神分析學派が、それぞれ独自の治療法を適用して、かなりの成果を治め、こゝに機能疾患が再び研究せられる氣運を作り、有機體の概念を、從來の様に、單なる機械と見做すことの困難が認められ、徐々に、これを改造するの必要に迫られ、何等かの目的を持つ機械と考へられる様になつて來た、この思想は、勿論、徐々に進轉したものであるが、一面から見ると、感覺主義、機械主義、知的主義の色彩を離脱しようとするものであつて、人間を何等かの目標に向ふものと解釋しようとするものといへよう、即ち有機體は自己を統制する目標を持ち、この目標相互の争闘が錯亂を因し、而もこの目標の中には一定の生活精力が包含せられるといふ様な考へとなつて、心的精

力の問題が擡頭するに至つたのである。

かういつても、この種の運動が何れも明かに機械主義の色彩を持たぬといふのではない、勿論、何時もさうである様に、一つの極端なる思想から他の極端なる思想へは、その中間的段階が見られることを忘れてはならぬ。

さて、こゝに、徐々に着眼せられる様になつて來た、所謂機能疾患を見ると、第一には、構造的物理化學的變態を包含するが、然し、その根源には機能的のものを持つもの、第二には、機能の平均が破れ、構造的變化がないもの、即ち所謂、心だけの病氣が考へられよう。

これ等の機能的疾患の研究を背景としながら、その研究の氣運を代表し、徐々に獨自の世界を開拓したものは、即ち精神分析學派の潮流であつて、その學説は一面から見ると、種々の困難を包含するにもかゝらず、他面には、人間の精神生活の眞實相の半面を持ち、近代心理學に有力なる力を添へ、その橋渡しとなつた功は沒すべからざるものがある。

今、私は本書叙述の方向からいつて、精神分析諸派の詳細なる叙述を目標としな

いが、彼等が如何なることを考へ、如何なる點に於て最近心理學の問題に参加し得るかに就ての私見を述べて見たいと思ふ。

精神分析派と稱せられるものは、一面は、極めて通俗的に流れ、從來、書齋に於ける心理學といふよりも、寧ろ街頭に於けるそれとして、一般民間的信仰と結合して宣傳されて來たものであるが、所謂、フロイド學派を中心として、三派に分れる、専門的には精神分析派の通稱はフロイド派に限られ、他はそれぞれ別箇の名稱で呼び、その異なる特質が考へられてゐる、故に、若し、精神分析諸派を見ようとするには、順次、これを別箇のものとして、その特質が考へられねばならぬ、今、それを簡単に試みて見よう。

第一、精神分析派、若くは、フロイド學派

改めて述べるまでもなく、精神分析派はジグムンド・フロイド (Sigmund Freud (1856—)) に淵源する、フロイドはフライブルグ (Freiburg) に生れ、ウイーン大學に活動した學者であつて、その思想の出發點は、一面には、シャルコー (Charcot) シャネー (Janet)

等、佛國に主として擡頭した流れ、殊にピエル・ジャネー (Pierre Janet (1839—)) の所謂綜合精力、心的精力、傾向等の考想と、他面に於ては、ブロイエル (Breuer) 等の精神變態に就ての具體的研究とを、その採るべき典型として、こゝに精神分析學を建設しようとするに至つたのである。

然らばフロイド説の要點は^(三)どうであらうか

(I) 人間を一定の目標に向ふものと見做し、而して本能をかゝる目的追求の衝動と考へ、しかも、その根源に性欲を置くのである、故に、時折、汎性欲説と言はれる。

註

『人間は幼兒から性的衝動を持ち、これは兒童の性的質問、性的行爲の上に表現せられてゐる、性的行爲にも種々ある、(一) 自己色情 (Auto-erotism) 例へば自分の身體の最も敏感である場所を興奮さすが如きそれである、(二) 自己讚美 (Narcissism) 例へば、自己の身體に、特殊の興味を感じるが如きもの、(三) 愛他的性的衝動 (Altruistic sexual impulse) 例へば、自分の身體の特殊部分を他人に供覽せしめ、若くは、苦痛を受けることを味ふ、所謂マソキズム (Masochism) の如き、或は他人の性的器官を見ること、乃至は、これに苦痛を興へることに特殊の興味を持つ所謂、サディズム (Sadism) の様なものはこれである、(四) 性的複合行爲 (Sexual complex action) 例へば父母、兄弟を性的對象とする行爲である、兎も角、如上の様な性的行爲の中に性的衝動が表現せられ、かくて人間の動作は

直接、關接、性欲の表現と考へるのである、これ、汎性欲説 (Pan-sexualism) と稱せられる所以である。

(II) フロイド説では意識生活に對して、それが抑壓 (Verdrängung, repression) せられて、無意識として存在し、この抑壓せられた無意識は、絶えず、何等かの形をとつて實現化しようとする潜勢的精力を持つものと考へられ、かくて、抑壓せられた無意識を、心理的決定質、若しくは、複合 (Komplex, Complex) と呼ぶ。

だからフロイドは性欲をもつて、複合と考へ、夢の如きも性欲の表徴せられたものと見做し、兒童期に於ては性欲がやゝ、固定的であつて、兒童期の複合を核複合 (Kern-Komplex) である^(四)と考へ、就中、男子のそれをエディプス (Oedipus) とし、女子のそれをエレクトラ複合 (Electra-complex) と呼んだ、しかも性欲として無意識に存在する複合は、それを表現しようとするエネルギーを持つてゐるものであるが、このエネルギーを名づけてリビドー (Libido) とした、結局、リビドーは性的精力に外ならない。

(III) 無意識、副意識、争闘、抑壓等の思想は、古く、ヘルバルト (Herbart) に存在してゐたことは、こゝに指摘するまでもないが、ヘルバルトに於ては、これらの概念が、

凡て、觀念、表象の機能、觀念の組織として考へられ、即ち知的認識に關係して取扱はれたものであつて、その後の科學的心理學者の考想からは敢て放棄されてゐたものである、何故、これを放棄せねばならなかつたかは、時代を背景として當時の心理學史を洞察すれば明かなことであるが、再びフロイドに於て明瞭なる形をとつて表現されたことも又興味ある問題である、然し、注意すべきことはフロイドに於ては、ヘルバルト等の思想とは全く獨立して取扱はれ、知的認識に關係せられるといふよりも、一定の目標に向ふといふことが中心として取扱はれてゐることである、こゝにフロイド派のこの種の思想に就ての意義が存するのである。

(IV) 以上の點から、個體の精神生活を知るには、その個人が如何なる複合を持つてゐるかを明かにしなければならぬ、例へば、夢の様なものは抑壓せられた複合が實現化しようとして表現せられるものであるから、これを分析するときには、その個人の精神生活の實相を知ることが出来るであらう。

故に、フロイドは複合を調査する方法として、次の様な點を考へてゐる。

(一) 催眠状態に導いて、暗示を與へ、記憶を想起せしむる方法。
 (二) 夢を分析調査する法、即ち、夢判斷これである。
 (三) 無意識又は反射動作、例へば、物忘れをしたり、無意識的に頭を搔くが如き動作を研究する方法。

(四) 對話法によつて、思はず發する語を手掛りとして調査する方法。

(五) 特定の刺戟語を與へ、これに對する聯想を起さしめ、同時に聯想反應時間を記録するといふ様な方法によつて、その個人を診斷しようとする所謂聯想診斷法これである、即ち聯想語の内容、聯想の構造と反應時間の遅速とによつて判定するのである。

如上の方法を用ゐて個人の精神状態を分析し、且つ、これを治療上に用ゐる方法を精神分析方法(Die Methode der Psychoanalyse; Methods of Psycho-analysis)と稱せられ、實際上は、尚ほ、各種の方法が、如上のものを基礎として考案せられてゐる。

(V) フロイドは性的精力即ちリビドーの向ふ中心的方向として快を採り、こゝに心理學的快樂説(Psychological Hedonism, Psychologische Hedonismus)と言はれる

契機を多分に持つものである。

第二、チューリッヒ學派の欲望説

フロイドの唱導する所謂複合の解釋は、汎性的考想として、これに對する少しく注意深い反省は、直ちに、これが持つ困難を暗示せしめるのであるが、先づ、こゝに汎性欲説の放棄を企圖し、獨自の世界を開拓しようとしたものは、チューリッヒ (Zürich) を中心として一派をなす、チエゲー・ユング (C. G. Jung) ^(一五二六) に外ならないであらう、故に時に、これをチューリッヒ學派 (Die Zürichschule) と呼び、若しくはユングの學説と呼ばれる。

(I) ユングは、リビドーの概念が示すものは、これを、只、單なる性欲のみに關係せしめることが出来ない、リビドーは即ち、生活精力、若しくは生きんとする力が表現するものであるから、一面には性的リビドーとして表現すると共に、他面には、營養を得んとし、若しくは權力を得んとするリビドーとして表現すると考へ、これを總括的にいへば、リビドーは廣く、欲望(欲求) (Desire, Die Bedürfnisse)

と解釋すべきであるとして、所謂、欲望説を採るに至つた。

II だから、彼に於ては、無意識概念が、フロイドに比較して擴張せらるゝの契機を持つ、即ち抑壓せられた諸傾向、諸複合の中に、凡ての精神生活の本能的基礎を求め、本能から派生した諸傾向を凡て無意識の中に對等に包含せしめてゐる。従てユングは凡ての印象も、凡ての傾向も、凡ての個人の歴史も、こゝに集合的に無意識的構造を構成してゐるものであるから、これを分析研究するときには、複合の個體的種族的起源を研究することが出来ると思ふやうである。

III 斯様に複合を個體的種族的起源を含むものと解釋するから、彼はフロイドの様に、夢を、只、單なる抑壓せられた願望とは考へない(フロイドの願望實現説)否寧ろ、その中には、個體の精神生活のもつと重要な成分が含まれてゐると考へるのである。

IV フロイドに於ては、心理學的快樂説への契機を多分に持つものと考へられるが、ユングは、單なる快樂的思想を持つとはいはれない、寧ろ、それよりも、もつと精神生活の有意的性質を高唱したものと見ることが出来る。

V 然し、その研究法としては聯想診断法 (Assoziationsdiagnostik) を重んじ、夢の分析といふよりも、個人の無意識的動作を分析しようとしたのである。

かくて、ユングは、フロイドから出發して、これを改更したが、その組織の大部分に於ては、尙ほ、フロイドの精神に留つてゐた部分も少くない。

然るに、フロイドを繼で、而も、フロイドと共に、時折、ウイーン學派 (Die Wiener-schule) と呼ばれることがあるが、全く別個の新天地を開拓し、これを獨立的學派として見る方が、至當と思はれるのは、アルフレッド・アドラー (Alfred Adler) を中心とする個體的心理學の一派であらう

第三、個體心理學派又はアドラー學派

ウイーン (Wien) を中心として、アルフレッド・アドラー (Alfred Adler) によつて建設せられた一派の心理學を、時に、個體的 (個人的) 心理學 (Individual-Psychologie) と唱へ、その潮流を、個體的心理學派 (Individual-psychologische-Schule) 又は、アドラー學派と云ふ。

アドラーは、フロイドの影響を受けて、出發して遂に、その根本的考想に於て、フロイドを脱し、それ以上に出でようとしてゐる。蓋しフロイドに於ては、明かに、その組織の中には、ピエル・ジャネーの心理學的組織の臭味を多分に持ち、例へば、ジャネーの心理的分析と考へるものが、フロイドに於ては、精神分析となり、前者の所謂、心理的組織が、後者の所謂、複合となり、前者に於て、意識の制限として考察されたものが、後者に於て、抑壓概念となつて表現されてゐるが如く、若しこの點に就ての證議の歩を進めて行くならば、思ひ當るものが少くないだらう、然るに、變態心理學的研究の跡を辿れば、ジャネーは、一面に於て、コンデヤク (Condillac) ラメトリイ (Lametrie) シャルコー等を経て開展した感覺的唯物論に、その糸を引き、従つて、こゝに精神生活を感覺の流れの複合と見ると共に、この流れが、或は、時に統一し、或は時に分解すると考へるが如き見方が存在し、他面には、精神生活の動的要因に觸れ、かくて學問的に大なる煩悶の境を彷徨し、結局する所、自然科学的臭味、若しくは機械觀的色彩を蟬脱することを得ないで、一面、機械としての生活體の生活を考へながら、これに一定の目的を與へて眺めようとするに至つたものと見ることが出來よう、

かゝる傳統精神の支配はフロイド精神の中にも滲透するものであつて、時にフロイドに對する批評家が、結局、自然科學的機械觀として見ようとするのもそれである。然るに、ウイーンの神經醫家アドラーは早くよりフロイド心理學の如上の不徹底乃至は弱點を看破し、生物學的知識と醫學的治療(treatment)とから得た洞察を以つて、その學說の中心點を價值思想に置いて、これが變容を試み、かくて、これを實際的運動に結合せしめ、教育困難兒童、孤兒、神經質の兒童及び成人等の處理乃至治療に相當の効果を收め、漸く認められようとするに至つたのである。

然らば、アドラーは如何なることを主張しようとするであらうか。(一七一)

(I) アドラーの學說の根柢には次の様な諸點に就ての基本的假定が要求せられてゐる。

(一) 各生活體(人間をも含めて)は、その環境世界に對して自己を主張しようとする渴仰心を持つてゐる、こゝに表現する力、又は精力が即ち複合 (Complex, Komplex) である、即ち生活體は生來、精神的に自己が劣つてゐるとき、それに對して、代償的に努力するものであつて、この作用が即ち男性的拮抗 (Männ-

liche Protest) である、この拮抗が積極的であるとき、頑固となり、消極的になるとき、恐怖性、憂鬱性、因循性となるのである。

(二) 生活體の中で、成人乃至子供は、自己の有機體の價值を、自ら體驗する、幼兒の場合に於ては、自己の低腦視(劣等視)の氣分、狀態を感ずるが、社會的、自然的困難に打勝つ様になると、その程度に従つて優越感を持つ様になる。

(三) 凡て、生活體の行動、殊に人間の行動は、目的設定に依つて規定せられてゐるが、その中心をなすものは、困難に打ち勝つことであつて、これは權力への努力、内在的精力として、その目的を完全なる方向へ發達させようとする、故に、その最初の形式は漠然たる形をとつて存在するものである。

(四) 故に、私共が精神過程と名づけた、各種の運動、表出形式、天賦、能力と稱するものは、個々の個體が環境との關係に於て、個別的に訓練せられて生ずるものである。

(五) かく、生活體が環境に對して得んとする權力への意志と共に、これを訂正し、これを調停する社會感情が先天的に存在する。

(六) 凡ての生活體は、その素質上平等である、その差別があつても、私共が、それを等閑視してもよいほど僅少なものである。

(七) 意志及び目的設定といふことは、洞察に基いてゐる。

以上の點を假説的に要求して、その上に學説が建設されてゐると考へられるのであるが、それに關する部分を、二、三摘出して見よう。

(II) 以上の點から推知される様に、子供が持つ創造力の如きものは、個體的に、それぞれ環境に於て完成されるものであつて、自然的社會的環境が、子供に對して、特定の困難を提供する所に、完成せられる道が開けるものである、だから幼児は、早くから、その環境に對して創造的立場をとるのである、この場合、最も重要であるのは、その環境に對する相對的關係であつて、必ずしも、その生活體の器官、若くは器官機能の絶對的價值ではないことである、だから、若し、この場合生活體の器官機能の絶對價值だけを精神構造の基礎として採用することは至當であるまい、同様に、從來の傳統に従つて、子供の作用を反應であるといふことは、誤解を生ずる恐れが含まれてゐる。

(III) 人間は統一方向に向けられたものであつて、人間を目的的に見るといふことは、個體創造の特性であり、個體の内的必然性であるから、こゝに人格性を全體として行動の中に求めることが必要となるのである、勿論、人格の構成要素は遺傳的成分よりも、外界環境との關係が重大視せられるのであるから、即ち性格構成上、幼時期中に於ける一般環境との關係乃至兩親のその子供に對する態度如何、一般成人生活の子供に對する態度如何が、極めて重要な意義を持つのである。

(IV) この理論から、個體の生活様式を研究することが重大であつて、子供であるか、成人であるか、育ちがよいか、悪いか、どういふ生活範圍にあるかを調査し、生活過程を、先きに述べた様な目的に向けられたる過程と見、その過程は結局全體への過程として眺め、こゝに、その個人の價值感情、乃至人格感情を讀まうとするのである。

(V) 既に、個體の全生活過程が一定の目的に志向し、而も、常に環境との關係に於てのみ成立するのであるから、全體過程は、こゝに統一的の活動線を構成し、最

初から、例へば同情とか、同感とか、同喜とか同悲とかの社會感情が豫想せられる契機を持つ、これを換言すれば、人間生活は、その最初から一種の順應過程とも見られる様な形をなすものである。

(VI) 如上の理論から、診斷的には、その價值感情を讀んで、これに適應した方法を講ずればよいわけである、例へば兒童に就て、所謂『氣』(Mind)があるかどうか、といふ様な點を看破することは興味あることであるが、今、私はこの一、一に就て述べる余裕がない。

さて、以上、略述した精神分析三派は、何れも理論的といふよりも、實際的の意味を多分に持ち、民間信仰と結合し、廣く、信奉者を持つものであるが、理論的には、その困難は少くない。

フロイド派それ自身が持つ困難は、既に精神分析派それ自身の中に於ける内在的批判が試みられたるものとして、これを考察することが出来るのであるが、

第一、その組織の中に尙ほ自然科学的機械觀への片隣を留める點である。

第二、汎性欲説は、その根柢が、最も疑惑の種を播くものである。

第三、精神分析方法、就中、夢分析、乃至、無意識動作の分析中には所謂、捏造的解釋と見られる部分が少くない、勿論、その傾向は、汎性欲説の視點から來る場合が少くない。

第四、フロイドの夢説、即ち願望實現説としての考想は、直ちに信ずることが出來ない、これと同様に、その他の抑壓觀念の組織に就ても問題が少くない。

第五、フロイドの心理學的快樂説は、そのまゝの形としては、批評の余地を残すものである。

ユングの汎欲望説は、結局、フロイド説の最も困難とする汎性欲説を救ふ爲めに考案せられたのにとゞまつて、尙ほ、諸他の點についての改更點もあるが、心理學的組織としては、同様の困難に遭ふものである、只幾分改良せられたに留まらう。

アドラーの個體的心理學は、やゝ、その體裁が異つてゐるが、その組織は極めて大膽なる論法である。

第一、私が、アドラー派の基本假定として列舉したものは、勿論、アドラーの潮流に於ては、これを許されたものとして採用してゐるのであるが、この中には心

理學的に問題とされなければならぬものを包藏してゐるであらう、例へば個體の素質が、生來、平等であると思ふべきか、一つの問題でなければならぬまい、否、少しでも心理學の研究生活をしたものは、これを直ちに肯定し得るものは殆んどあるまい、これは常識の信仰の一部分をもつて全部と誤信した素人論であることは、こゝに詳しく論ずるまでもあるまい。

第二、自己を劣等視する感情や、これを優越視する感情は、勿論、精神生活の重大なる方面には間違ひないが、これが何時も體驗せられるか否か問題である。

第三、意志乃至目的設定を、洞察的に解釋しようとするが、彼等が洞察を如何なるものとして、如何なる所に洞察があるとするかに就て、説明する所が少い、否、寧ろ、これを基本假定としてとつてゐる、こゝにも問題がある。

第四、彼等學徒の方向は假説から實行へと進み行かうとする、若し科學者としての態度をとらうとするならば無暗に假説を作らず、一度、これを作らんとすれば、事實に基いて作り、これを事實によつて檢證せられべき所以を示さなければならぬまいが、この派の態度は必ずしも、さうではない、こゝに、この派が興

味ある問題を包有しながら常識心理學を脱しない契機があらう。

如上の外、これら學派の一、一を點檢すれば許されざる問題を多分に持つものであるが、然し、これらの理論的難點を暫く除いて、最近代心理學への道程として、これを眺めるときには、興味ある諸方面を多分に見出し得ることは、否定出來ない、若し、これら諸派が特筆すべき部分を持つとすれば、恐らく、次の諸點に、これを求め得られようと思ふ。

第一、精神生活に、一個の統一的原理が、支配するものであることを教へたことである。

如上の統一原理を、或は性欲とするか、欲望とするか、若くは力、又は精力とするか、乃至は、又、困難に打勝たんとすることとするかは別問題として、何れに於ても、一貫せる原理が考へられ、これから成人も、子供も、變態も正常も、或は、その他の生活體も取扱はれようとしてゐることは、最も着目すべき點である、蓋し從來、心理學上、やゝもすると、普通人の精神生活には一定の法則性が支配し、變態生活には、これを適用不可能の如く考へられ、若くは、感覺知覺の方面には、特定

の法則が支配するが、情意の如き方面には、かゝる法則は發見し得ざるが如き
暗黙の信條が存し、一面には、實驗精神の誤解と、その未發達とから、所謂レビン
(Kurt Lewin)の稱する半法則性⁽ⁱⁱⁱ⁾(Halben Gesetzmäßigkeit)の理念が、永く心理學界の
傳統として存在したが、精神分析諸派が、これを統一的原理から説明しようとする
に至つた功は没すべきでない。

第二、機械的原理の外に、或は、企圖的有意的原理を立て、或は、動的原理を認め、若
しくは動的原理のみへの方向を示し、後者をもつて前者に代へようとする氣
運を導いた點である。

第三、無意識概念を擡頭せしめ、こゝに例へば、抑壓、争鬭等の概念を動的原理に
立つて認め、こゝに意識心理學、内省心理學の方法に反省せしむべき余地を與
へたことである。

第四、心理學を机上の空論から、街頭に立たしめる氣運を導き、こゝに生活中心
の心理學が、擡頭する道程に立つてゐることは又著しい、素人心理學者の心理
學が、却つて、研究室の心理學者よりも、興味ある方面を説いたのが、これらの諸

派であらう。

第五、催眠的方法、暗示法、その他の諸方法が、再び實驗心理學の領域に特定の基
礎をもつて實施せられるに至り、遂に相應の成果を治め得る起因を開いてゐ
ることも亦忘れられない。

以上、私見を述べた様に、これら諸派は長短、相半ばしてゐるものであつて、これら
諸派のどれでも、直ちに採つて實行することは、危険がまた少くない、私共學徒はこ
れによつて暗示せられて、更に一步を進めて行くべき責務があると共に、實際家が
只、個人的興味から、これを直ちに教育、その他の方面に應用しようと考へられる
ことは危険の上なしと思ふ、これは精神分析諸派の問題に就て考へられるのみ
ではない、一般的に、理論的にも實驗的にも確立されないものを、直ちに應用しよ
うとすることは危険の上もないものである、但し、若し、それが功利を主眼とし、犠牲
を敢へてしようとする場合、例へば營利會社の如きに於ては別問題であるが、少く
とも兒童教育の場合に於ては、深く考へ直されなければならぬのはいふまでもあ
るまい。

參考書目

- (1) Pierre Janet : L'Automatique Psychologique 1889.
- (11) S. Freud : Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse 1920 4. Aufl.
- (三) " : Die Traumdeutung 1921 7. Aufl.
- (四) " : Zur Psychopathologie des Alltagslebens 1922.
- (五) " : Totem und Tabu 1922 3. Aufl.
- (六) " : Über den Traum 1921. 3. Aufl.
- (七) " : Über Psychoanalyse 1922 6. Aufl.
- (八) " : Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie 1922 5. Aufl.
- (九) " : Sammlung kleiner Schriften zur Neurosenlehre, 1920, 1921, 1921, 1922, 1922.
- (10) " : Studien über Hysterie 3. Aufl. 1916.
- (11) " : Der Wahn und Die Träume in W. Jensens, „Gradiva“ 2. Aufl. 1912.
- (12) " : Eine Kindheits Erinnerung des Leonardo da Vinci 2. Aufl. 1919.
- (13) " : Jenseits des Lustprinzips 2. Aufl. 1921.
- (14) " : Massenpsychologie und Ich-analyse 1921.
- (15) C. G. Jung : Die Psychologie der unbewußten Prozesse, Zürich 1918.
- (16) " : Analytische Psychologie und Erziehung 1927.

- (17) A. Adler : Über der nervösen Charakter 1912.
- (18) " : Homosexualität 1917.
- (19) " : Theorie und Praxis der Individualpsychologie 3 Aufl.
- (20) " : Studie über Minderwertigkeit von Organe 1907.
- (21) " : Menschenkenntnis 2 Aufl Leipzig, Hirzel.
- (22) Kurt. Lewin : Das Gesetz und Experiment in der Psychologie.

註

『フロイド派の文獻は無數に存在し、著者の目を通し得たものさへ、こゝに採録し兼ねる位であつて、尙ほその他にもこれが學說を紹介し若しくは批判したものは少くない、故に、こゝには主として三學派の頭目の主なる著書を擧げるに留めて置く』

第十講 シュテルンの所謂人格的心理學 の諸問題と、その貢獻とに就て

凡そ、目的論的思潮が精神分析學派に於ける一つの著しい考想であるとするならば、この思潮が構造觀の本質的成分として擡頭し、遂に科學的領域を離脱して、一個の哲學的思潮として終始するものは、これを精神科學派の考想の中に求められるであらう、これと、その背景を異にし、寧ろ生物學的研究を、その依るべき地盤とし、徐々に、所謂、抽象的目的觀の著しい世界を示すものは、生氣論の饒將ハンス・ドゥリッシユに求められることは、述べるまでもあるまい。

一面に於ては、これ等の思想を追ひ、傳統心理學の視點から轉化しようとする諸研究を準備し、他面に於ては、最近心理學の思潮を攝取して、遂に、その當然の經路として、こゝに、所謂、人格學としての視點を求め、廣汎なる組織を示さうとしてゐるも

のは即ちウイリアム・シュテルン (William Stern 1871-) である。

シュテルンは千九百十五年、モイマンの後任として、ブレスラウのホホシユールからハンブルグ大學の教授となつた人である、その學的業績は、一般心理學、應用心理學殊に兒童研究と個性心理學に寄與すること少くない學者であつて、その基本的考想は著しく變化の跡が認められるのであるが、彼の思想を解剖するがためには、先づその基本科學若しくは前期科學としての所謂人格學の要點を探り、而して彼の心理學的考想を辿る必要があらう。

註 『シュテルンの Personalistik は、これを人格學といふも又は人間學といふも適譯ではないと思ふのであるが假りに人格學といふ方を採つて置いた。従つて Personalismus 又は Personalistische Psychologie に就ても同様である。』

さて、シュテルンの人格學に於ては、その根本的考想は精神物理的中性なる『人』(Die Person) 概念に置かれる。この『人』なる概念は基本的概念であるから、これが人間に就ての個々科學に於ける概念でないのみならず、心理學的概念でもない否、むしろ、それらを、凡て包括し、それらの基礎を形作るものに外ならない、だから『人』は人

間ではない、何となれば、人間の存在、非人間の存在を包括し得るからである、そして又單なる人格のみにも限られない、蓋し、單なる人格は人間のみに就て考へられるからである。ところが『人』概念はいふまでもなく、『物』概念(Die Sache)に對するものに外ならない、然らば『人』が『物』に對立して、而も、どうして中性的概念として考へられるのであるらうか、これ即ち視點が異なるによるものに外ならない、即ちシュテレンは、『人』とは、その部分の多様性があるにもかゝらず一つの現實的な、獨得な、獨自的價值的統一を構成するが如き存在であつて、而も、かゝるものとして、その部分的機能の多様性があるにもかゝらず、統一的、目的追求的獨立を完成するが如きものであると定義し、『物』は『人』と矛盾的反對であるとし、従つて『物』は多くの部分から成り、何等の現實的、獨得的、獨自價值的統一を構成せざるが如きものであつて、而も多くの部分機能に於て働き、何等の統一的、目的追求的獨立を完成せざるが如き存在であると名づけたのである。

かく『人』を獨立的に、自己を限定し目的を追求する全體であると考察すると、これを意識的内容にも關係せしめず、身體的變化にも結合しないで、むしろ本源的未分化状態を視點に置き、この中に物的なるものも、心的なるものも未分化的に存在すると考へることが出來よう、この『人』の考へ方には第一、『人』は全體であつて、『物』は集積である場合の『人』の統一性、第二、『人』は質を示し個性を表し、『物』は量を示し比較可能を表すとする場合の『人』の獨得性、第三、『人』は能働的であるとし、物を受働的であるとする場合の『人』の獨立性、第四、『人』は目的論的で、『物』は機械的であるとする場合の『人』の目的追求性、第五、『人』は自己目的を持ち、物是他への目的となるといふ場合の『人』の獨自價値性が、その著しき特性として、豫想せられ、就中第一に相應する多樣的統一(Vielheit)、第四に相應する目的活動(Zweckwirken)、第二に相應する特殊性(Besonderheit)が根本的特性とも考へられやう。如上の三概念に相應して『人』に實體性(Substantialität)が見られ、因果性(Kausalität)が與へられ、個體性(Individualität)が考へられる。故に、先きにも暗示した様に、中性的超精神物理的存在としての『人』は、いふまでもなく、本體論的意義に於て考へられたものであるのは勿論であるが、こゝからどうして心的なるものが誘導されるであらうか、これを考察するに先つて以上の思想から當然考へらるゝ諸問題を探りつゝその思想を辿つて見よう。

第一、目的組織 (Zwecksystem)

一面に於ては、多様中の統一として特殊性を示し、他面に於ては、その行動動作の内面的目的論的性質を表す所謂「人」の存在がシュテルンにとつては、第一の世界の根本的事實に外ならないものであるが、とりわけ、その目的論的思想の中に、凡ての問題を溶解し去らうとする色彩が著しい、こゝに於て、彼は特定の終末的位相を想定して、これを目標として、それに向けられたるものとして一般的目的を求め、これを一方には、直接的自己目的としての自己保存と、自己發展として、他面には、外來目的 (Fremdzwecke) 即ち或は國民、人類、等の上位的全體乃至は同朋等の抽象的理念の中に成立する目的として考へ、かくて「人」は究極的原因 (Causa finalis) と見做され、自己完成への自主的能力を持つものであると認められ、而も自己完成の道程は、外來目的を自己目的の中に攝取する働き即ち所謂、攝容 (Introzeption) といふ精神物理的中性作用に依つて行はれ、こゝに客觀的價値が自己の動作の中に肯定せられるのみならず、客觀的世界の實現、具體化に参加するに至るのである、故に「人」に於て目的の組織が存在し、而かも目的性と因果性とは巧みに結合せられ、目的機械

的 (teleomechanisch) に考へられてゐる、蓋し、目的性は、「人」の部分的生起關係の必然性を規定し、而も全體は、一つの目的組織の體系を構成するからである。

第二、體統 (Hierarchie) と輻輳 (Konvergenz) の原理

「人」の究極的目的追求性に從つて、自己を保存し且つ發展せしむると同時に客觀的世界が攝容せられ、こゝに渾一的體統的序列を形成し、各種の次元を異にする部分的全體を示すに至るのである、而して、この部分的全體は相互に相關し、或は、上位、下位の關係を成すと共に、時に、併位の關係として存在し、所謂、多樣的統一 (Vielheit od. unitas multiplex) を可能ならしむるものである、この場合において體統の原理が考へられてゐるのであるが、然しこの體統の原理が、原理として可能になるが爲めには、尙ほ更に進んで一つの原理が建てられねばならぬ、これすなはち輻輳説 (Die Konvergenztheorie) に外ならぬ。

彼は環境と「人」との關係を考察するに當つて、「人」において考へらるゝ遺傳的成分だけに依つて、説き盡さうとする生得説的偏頗を敢てしようとはしないが、更に又、外部環境の萬能を主張しようとする様な大膽なる危険を冒さうともしないので

あつて、環境と「人」との協合作用によつて、これを見ようとするものである。即ち一面には、「人」の目的的追求性に根ざす潜在性、潜在的精力としての素質、例へば方向素質 (Richtungsdisposition) 準備素質 (Rüstungsdisposition) 等があつて、他面に於て、かくの如き内在的精力が發展するの刺戟となり、資料となり、或は問題となり、強制となり、若くは促進となるところの環境があつて、この兩者の協合によつてこそ、一義的の行路が規定せられ、可塑的素質は發展せしめられて、性質としての意義をもち、こゝに所謂自己目的の中に、外來目的を攝容することが可能となり、「人」の完成への永遠の道が繼續されるのである。

第三、『人』の發達

『人』は體統、輻輳等の原理に従つて、その内面から發達するものであつて、その發達の道程は、或は、その範圍を擴張し、多様を増加し、こゝに成長 (Wachstum) を示し、或は本源的朦朧状態から内面的に分化して、所謂内面的分節 (Ansgliederung) となり、更に進んでは、質的に相互に異なるが、内部的には相互に關係する位相を示して、こゝに所謂變化 (Wandlung) としての發達となり、かうして體統への完成へ向ふものである。

第四、内向化と外向化との考想

さて、全體性、活動性、生々しさ、目的追求性、自己限定性、等の特長ある統一として示される『人』は、物と他人とが、構成する環境の中に坐してゐるものであるから、その存在を一面には、自己自身に向つて、内向的に傳達すると共に、他面には、他人、他物に向つて外向的に、それを傳達しようとするものである。この内向化 (Innerung) と外向化 (Äußerung) は、『人』の有する本源的活動性の二面的特色であつて、この特色を豫備的條件として、こゝに二次的に心的、乃至、物的の區別が、始めて生ずるに至るのである。だから、これは恰もスピノザに於けるが如き、同一實體の二つ屬性としての精神と物質との考想ではない、而も又精神と物質とを固定的に靜止的に考へ、この兩者を相應せしめようとする平行論の考想でもない。

否、寧ろ、『人』の統一的活動が自己を内向するか、外向するか、の二つの方向をとつてあらはるゝものであつて、その内向化の状態が心的となり、外向化の状態が物的なるものとして創造せらるゝにすぎないのである。

かく、心的なるものは、『人』が自己の内方に向ふことに依つて生じ、凡て、物的なるも

のは又「人」の表現であるから、外向化と内向化とは密接に關係し、兩者とも異なる意味關係において「人」の全體性に共通に所屬するといへよう。

第五、生活と體驗

以上見た様に精神物理的中性であつて、目的追求的傾向と、能力とを備へ、環境世界と輻輳的關係に立つ「人」が論理的意義に於て、一次的であるから、自己自身を、意識といふ形式の上に反射するといふことは論理的に二次的のものにすぎない。だから「人」の生活が寧ろ絶對的概念としての意義を持ち、無限に永遠の目的へと波打ちながら進行するものと考へらるゝならば、その全活動(Lebnis)の中に於て、これが一小部分を意識に變化し、生活(Leben)をして、體驗(Erleben)に變化するものも又「人」の如上の活動の内に求められなければならない。「人」が、その存在を意識に變化し、その生活を體驗へと向はしめるものである。ところが生活が習慣的となつて、輻輳に何等の抵抗、摩擦が存在せず、何等の矛盾、闘争が見られないときには、内向化が生起せず、内的反射が考へられないのである。換言すれば生活の争闘的部分だけが意識として昇騰せらるゝにすぎないのであつて、實に、意識は争闘の記號であり、生産であ

るのである。而して、この場合に於て、自己以外の物や、人を自己の意識に反射しようとする客觀的意識(Das Objektbewußtsein)例へば知覺や表象の場合から、主觀的意識(Das Subjektbewußtsein)例へば衝動意識、感情、情緒、意志等の状態があるが、就中、自我意識に於てこそ、最も著しき意識の昇騰が示され、「人」が自らを、個體即ち一體の統一として把握し、個性として、他と特異のもの、獨得のもの、として把握するに至つて、その頂點に達するると考へられる。

かくて、「人」の全活動(Lebnis)が内向化に置換へられると、これが即ち體驗(Erlebnis)として表現し、こゝに相對的概念としての意義を示し、必ずや體驗するものと、體驗せられるものを豫想し、こゝに自我と環境との、若くは主觀と客觀との分離を示し、體驗の中に、或は自我が表徴せられ、時に體驗内容と對象とが偏異を示して錯覺となるとも見られる。

第六、無意識の積極的意義

かく、シュテレンに於ては、意識が内面化において、生ずるのであるから、こゝに、所謂、無意識が積極的意義を持つに至るものである。

彼に依れば、無意識とは「人」に於て、その意識的事實に關係し、それに意義はあるが、而も、それ自ら意識的事實でないものを包括して名づけられる。

この場合に於て、彼においては、例へばシェリング (Schelling) 若くはハルトマン (E.v. Hartmann) 等に於て見られる様な、無意識的世界原理としての宇宙的意義に於て考へられてゐるのではないが、むしろ無意識の人類學的方向が考へられてゐるとも見るべきであらう。

さて、かくの如き無意識はこれに、二個の主要區分を與へて考へられる。

第一は、下部意識 (Das Unterbewußtsein) であつて、意識の斷片的性質から生ずると認められるものである。即ち意識状態の前、その中間、その經過後、存在し、意識状態と目的論的關係を持つが如き人格の状態は、即ち下部意識である。例へば視覚表象が、下部意識に沈降し、「人」の生活關係が、これを要求する場合には、再び現出すると考へらるゝ場合に、おける凡ての心的記憶の痕跡、練習效果の如き、それであつて、潜在的可能性として考へられるものは、これに屬する。

第二は、上部意識 (Überbewußtsein) 又は、超意識であるが、これは「人」に於て「單なる意識」、

以上と考へられる凡てであつて、意識の體驗は、これを寧ろ、受働的と考へることが出来るのであるが、これを資料として、これに働きかける活動性 (Aktivität) は、意識面と密接に結合するが、これに屬しないものであつて、この活動性に上部意識としての假定的の性質が與へられる。

活動性は、これを三層に分つて見ることが出来る。第一は、即ち個々の作用 (Akte) であつて適當の時間に、或は外部からの刺戟によつて、反應となつて表現し、若くは内部的傾向によつて自發運動となつて表現する作用である。吾人の思考作用でも、意志の働きでも注意作用でも、凡てみな「人」の精神物理的中性であるところの目的追求性から、直接に流れ出るものであつて、この意味に於て、意識以上の性質を持つものである。勿論、作用は、それに意識が固着する性質はあるが、その本質は、「人」の精神物理的中性作用に存すると考へられる。

第二は、即ち活動を起す慢性的能力又は傾向としての素質即ち傾性であるが、第三、即ち上層を構成するものは、即ち「人」それ自身に外ならない。即ち「人」は「人」として意識ではなく、只、時折、意識を持つことが出来るに過ぎない。だから、それ自身は上部意

識、若くは超意識としての性質を持つのである。

若し、かゝる上部意識又は超意識としての『人』が、それに存する意識現象の創造主となつて出現する場合に限つて意識的人格なる名稱が與へられ得るが、この場合に於ても『人』は超意識たるをさまたげないのである。

如上の兩方面を包括する無意識は所謂、人格活動の素地であり、背景であるのであつて、シュテレンに依れば、意識と無意識とを包括するものが即ち心的なるもの(Das Psychische)である。

心的なるものは『人的』であるから、目的論的であるのであつて『人』が心的であるから、目的論的であるのではないのである。

こゝに於て、心的なるものの聯關が、人格の目的性の中に存在するものであるから、科學的心理學は、現象(Phänomene)、作用(Akte)、傾性(Dispositionen)、人又は自我(Person (Ich))の四層を論ぜなくてはならぬ。

第七、解義法

『人』に於ける心的なるものは、一面に於ては、目的論的意義を持つものであるが併

し、各のものが全體としての人に、如何なる意味を持つかは、これを直ちに表示してゐるとは限らない、故に、各の心的なるものが全體としての『人』に、如何なる意義を表示するかを解釋することが、可能である、これ即ち目的解義(Zweckdeutung)に外ならない、これと同様に、心的なるものが、その奥に存在する『人』の表徴として存在し、自己及外界の反射として存在する様な場合に當つて、この心的事實の象徴的意味を解義することが、重要な意味を示すのであるが、これ象徴的解義(Symbolische Deutung)と稱せられるものである、この二つの方法に依つて、心的事實が『人』の本質、意義を如何なる程度に暗示せるかを、『人』の全體性に着眼して明かにしようとするのが所謂シュテレンの認識方法(Erkenntnistheorie)であつて、人格學に於ける最も重大なる方法である、人格學に根ざす人格的心理學の方法としては、この外に一般心理學の方法を包括する研究方法(Forschungsmethode)が對立せられるのは勿論である。

さて、私は極めて包括的にして、而も、極めて常識的なるシュテレンの人格學の斷片を指摘したのであるが、かゝる精神物理的中性概念たる本體論的、目的論的、『人』概念を基本として、この上に心理學を建設しようとする道を辿らうとするものが、

即ちシュテルンの念願に外ならないのである。心理學は先きにも暗示したやうに、心的層に就て研究するものであるが、然し、既に絶えず、中性概念たる『人』に就て考察されたる抽象的原理が指導概念となつてゐることを忘れてはいけない。

こゝに考察される所謂心的四層、即ち現象、作用、傾性、自我の各方面に於ける問題は、一面に於ては、具體的なる精神生活が考察されながら、他面に於ては、即ち、異質的假説の混入が見られ、科學的心理學として考察することが出来ぬ要素に充滿するものであるといへよう。

シュテルンは、先きにも屢々、暗示した様に、その人格學に於て全體觀を説き、その構造性を強調し、その心理學的考想の中にも、これを論ずるのであるが、これに就ても又、異種的成分が多分に見られる。

彼が、その最も著しき貢獻を示したと稱せられる個性心理學の領域を眺めると、勿論、その一つ一つの方面には、著しい貢獻は見られるが併し、その根本的考想において假想的考想と經驗的考想との混淆が見られ、神秘の蔭にかくれて進まうとする跡があり／＼と思ひ當るであらう、今、私は、この種の問題を詳述する余裕はない

が、その二、三の基本的考想を摘出し來つて、考への歩を進めて見よう。

彼によれば、個體の特長は、急性的と慢性的とに區分せられ、急性的なるものは現象と作用又は働き (Akte) とに分れ、慢性的の特長は即ち傾性又は傾向としての素質に見られる。

現象は所與に屬し、各種の意識現象乃至は、生理現象はこの中に配屬せられるものであるが、これ等の現象は消滅變化し、それ自身統一をもつものではない、これが統一せられ一定の目的に志向するものとなるには、こゝに、これを統一する作用又は働きが、加はる必要がある、ところが、かかる作用は、所謂、假定的概念であつて、超意識的作用として、精神物理的中性の「人」の活動性として、考へられるものである。如上の現象と作用とは、兩者共に急性的のものであるから、生滅變化するものであるが、かかる作用又は働きを統一するものとして、こゝに提出せられたものが即ち、傾性又は傾向としての素質の概念である、傾性は、それ自身多様なものであるが、既に作用又は働きが、現象の中に存しないから、現象の區分に依つて分類されることは不可能である、むしろ、個體的自己保存と自己發展とを特殊の方法に依つて達

する形式的能力が即ち傾性であるとも見られる、時折、傾性は素質 (Anlage) と性質 (Eigenschaften) とに分けられる、而も多様な傾性を統一するところの統一心的基本傾性として、自我傾性が假定せられ、その支持者として、自我が豫想せられる。

如上の意味に於て素質的であり、目的論的であり、而も又層體系的 (Schichten-systematisch) の考想がシュテルンの根本的思想といへよう。

而も シュテルンのいふ差異心理學的方法と稱せられる變異研究法、相關研究法、心誌法、比較法等の諸方法に依つて、各種の性質の併列から、或は上位、下位的に、若くは包括的、特殊的に、分化せる素質の體統組織を作り、こゝに個體の構造像を爲し、以つて、個體の傾性的限定性を見ようとするのが彼の持つ念願の一つであらう、この意味に於て、彼が實際的に爲し得た心理學的業績はかなり廣汎であるが、その多くの場合テスト的方法が用ゐられ、これに依つて自己の志さうとする個性的研究を果さうとするが、果して彼の念願が滿され得るか否かは著しい疑問として残るであらう。

能率の見地に立つ應用を除いて、これを考へると、テスト的研究には心理學的に

に、これを見ると、只、豫備的段階としての意義しか、存在しないからである、粗つぽい局位點としての意味しか存在しないからである、寧ろ、これから始めて實驗が新に出發さるべきものであるが、シュテルンに於けるその勞作の大半はこの方向に終始しようとしてゐるにすぎない。

然し、かういつても、シュテルンが個性心理學乃至は、児童心理學の發達に就て、成し遂げたその業績の意味を忘れるものでない、殊に、個性心理學に於てはビネー (A. Binet) ヘルトン (Francis Galton) 等の貢獻もあるが、その大成はシュテルンにあるといはれるのも、又、彼の眞價を示してゐるであらう、只、これを時代の背景から見ると、直ちに肯定せられ難い部分を包含してゐるといふにすぎない。

これは又児童心理學に就ても言はれることであつて、彼の児童心理學、殊に「初期児童期に於ける心理學 (Die Psychologie in der frühen Kindheit 1914) は成程、児童心理學的研究に於ては劃時的研究と言はれるものであつて、個人生活の獨立的統一を出發點として、必ずしも感覺を出發點としないで、所謂輻輳原理に立つて、具體的の實驗觀察を土臺として出發するものであるが、その具體的成果を除いて見ると、只

新思想を兒童心理學に應用しようとして、徹底的に果し得なかつた過渡期的產物として見られよう。

さて、以上、私はシュテルンの人格學の要旨と、それを基礎として立つ心理學的考
想の一部分に就て述べたのであるが、これが如何なる長短を持つであらうか、もと
よりこゝでは心理學的立場を中心としてこれを考へて見ようと思ふ。

(一) シュテルンに於ける所謂構造觀、全體觀と稱せられるものの、本質的成分は
抽象的目的觀であるが、この考想は一種の人世觀、世界觀としては考へられよ
うが、これを經驗心理學的に考察すると著しい先決的問題を包含するものと
考へられる。

(二) シュテルンに於ては、假說的考想と現實的考想とが自由に混淆される。

(三) 現象を所與として、これを斷片的に考へ、これを統一するに、作用を假定し、更
に、これ等を統一するに、傾性を假定し、最後に、根本的傾性として、自我傾性を求
め、遂に、これを支持するものとして自我を求める考想に於て、傾性の假説を前
面に持ち來つた點は傳統的考想から離脱し、作用を假說的に見ようとする點

も、これと同じであるが、併しこの思想の中には下から上へと層的に積み上げ
ようとする考へ方が著しいといはれても仕方があるまい。

人格學に於ける「人」の考想に於ては、寧ろ「人」が一次的に考へられ、その立場か
ら構造觀が立てられてゐるやうであるが、心理學的問題を考へる場合に當つ
ては、これによつて論じてゐる様な思想の衣を著せて、却つて、巧みに、その逆方
向の論調をも進めようとする。

(四) これを具體的研究の跡に徴すると、又著しく目立つのである、例へば個性を
研究するに、簡単なテスト的研究法に依つて求め得た部分的特徴、而も勿論、横
斷面的瞬間的特長をもつて、全體像を描き出さうとする様な遣口を、到る處、應
用してゐる、而もこの場合に於て應用せられる處理法が、統計的處理法以上に
出てゐない、統計的處理法も勿論、その使用に就ては、別個の意義はあるが、只、構
造觀を主張しながら寄木細工的研究法を如何に適用しても、その目的が達
せられよう筈がないことである、殊にこの點は、個性乃至性格の研究に就て言
はれる。

(五) 輻輳原理は勿論興味ある方面を指示してはゐるが、これも又抽象的原理であつて所謂「人」と環境との間の原理を、直ちに説明原理として用ゐられようとするものであつて、こゝにも、又問題が潜むであらう。

かく論じて見ると、要は科學的心理學と所謂心理哲學との混同が主要點であつて、その立場に立つて、勝手の論想を進めることは自由であらうが、而も、これは屢々論じた様に、今や過ぎ去らうとする心理學の影にすぎない、シュテルンも亦この影を追はうとし、一面に於ては構造觀、全體觀の思想を攝取して、しかも傳統の臭味を残す折衷的學者の一人に數へられよう。

然しシュテルンが果し得たところの貢献は又少くない、彼が碩學として各方面に成就した個々の問題を除いても、次の諸點が考へられよう。

- (一) 心理學上に於ける傾性の意義を深めるに與つて力があつたこと
- (二) 個性研究への貢献
- (三) 兒童心理學への寄與
- (四) その他、一般應用心理學への貢献

以上は、その主なる點であらうと思ふ。

参考書目

- (一) W. Stern: Person und Sache I. Bd. Ableitung und Grundlehre des kritischen Personalismus 1923. S. 16.
- (二) W. Stern: " 2. Bd. Die menschliche Persönlichkeit 1923.
- (三) W. Stern: " 3. Bd. Wertphilosophie 1924
- (四) W. Stern: Die Psychologie und der Personalismus
- (五) W. Stern: Die Personalistische Psychologie, Einführung in die neuere Psychologie von Sauppe S. 192—202
- (六) W. Stern: Die Differentielle Psychologie 1921.
- (七) W. Stern: Vorgedanken zur Weltanschauung 1915.
- (八) W. Stern: Die Intelligenz der Kinder und Jugendlichen 1920

第十一講 伯林派前期思想としてのシュト ウンプの機能心理學とその問題

自らは、フランツ・ブレンタノーを師とし、而も、彼から多くの點に於て離脱し、主として實驗的研究に坐して、ヘルムホルツ以來の音響心理學の先驅者として、既に独自の地歩を占め、孜孜たる研究の傍ら、後進の指導と養成とに努め、遂に、現今、世界の心理學界に於て、最も指導的位置を保ちつゝ、期待多き將來を持つ諸學者、マツクス・ウェルトハイマー (Max Wertheimer)、ウオルフ・ガンク・ケエラー (Wolfgang Köhler)、ア・ゲルプ (A. Gelb)、クルト・コフカ (Kurt Koffka)、クルト・レヴィン (Kurt Lewin)、フォン・ホルンボステル (v. Hornbostel) 等を、その門下から輩出せしめ、老驅既に、伯林大學隱退後も、その志す研究を持續し、正に質實なる學者生涯に、終始しようとするところの最も敬意を表すべき學者は、即ち、カール・シュトウンプ (Carl Stumpf 1848—) その人

である。彼はテオドール・リップス (Theodor Lipps) の跡を繼いで、ミュンヘン大學にあつたが、千八百九十四年、伯林大學に轉じ、千九百二十二年、ウオルフ・ガンク・ケエラーを抜擢して、これと交代するまでの期間、教授として活動してゐたのである。

シュトウンプの音響乃至視的研究についての特殊研究の内容と、その價值批判は心理學的問題としても、特殊領域を構成するものであるから、これを別個の機會に譲り、當面の問題としては、主として、その心理學的立場について、これを探つて、所謂彼の機能心理學の考想が、最近代心理學と如何なる點に於て交渉するかを、明かにしたいと思ふ。

却説、吾人が如何にして主觀的經驗についての知識を得るかの問題、換言すれば、吾人が意識經驗と稱し、若しくは心的經驗乃至、心的機能と稱するものに就て、如何にして、それに達し得るかに、關しては、既に古くから、各種の心理學的機構が提出され、心理學者といふ誰しも、この問題に悩まされ來つたものであるが、今、これを解剖的に眺めるならば、勿論、そこには多少の陰影の差はあるとしても、二つの兩極端の間に推移する點をもつて、示すことが出來よう、甲の極は、即ち心的に經驗せられ

るものは、現象から成立すると考へる仕方であつて、心的機能を、凡て現象の中に溶解し去らうとするものである。十七八世紀から遑しい勢をもつて、心理學的組織の中に滲透し、驚くべき簡單さをもつて、心的現象を説明し盡さうとしたところの聯合心理學は、その最も極端なる代表者であるが、これにも程近い考へ方は少なくなからう。現象だけが直接所與として、考察する道をとるものは、凡て、みな、この潮流に立つものといつてもよからう。

心理學を意識内容の學として、内容心理學の立場をとるならば、結局、その當然の經路として、所謂聯合心理學にも結合すべき契機を多分に包含する運命を持つに至ることは、近代心理學史を洞察する明を持つものの、等しく認むる所であらう。讀者は、ヴェント心理學に於ける所謂、内容心理學の契機を探られ、更に、進んでは、キユルペの考想を辿らるゝならば、思ひ當られる點も少くないであらう、こゝに言ふヴェントは、所謂構成心理學的方面の彼れを、指摘することは勿論である。

先きに、近代心理學に於て、最も影響著しき、卓越した學者として指摘したエルンスト・マツハでさへ、現象心理學的臭味から離脱し得なかつたことは、注意すべき點である。

乙の極をなすものは、只機能だけが、直接所與として、考察する立場であり、凡ての機能をもつて、直接所與と考へる立場である、これ、所謂極端なる機能心理學 (Funktionpsychologie) の立場に、外ならないものである。

元來、統一的自我に對する内的過程乃至、状態の意識的關係、即ち意識自我の問題は、心理學上の中樞的問題であるから、或は作用、機能、心的體驗、或は心的機能、若しくは心的現象又は心的作用、志向的體驗の立場から考察した體驗、等として、更に又、自我的經驗の考想として、心理學上、從來、屢々、擡頭した問題であることは、いふをまたない、故に、以上の甲乙兩極の間には、各種の中間段階も又、可能となるのである。

シュトゥンプは、勿論その論旨に於て、自我心理學の臭味は持たないのであるが、甲を第一とし、乙を第四として、こゝに、大體、四つの立場を區別して、自己の機能心理學の立場を、明かにしようと努めてゐるのである。

第一、只現象だけが、直接に與へられると見る立場。

この最も極端なる代表は、聯合心理學に見られる。

第二、現象の外に、それ自ら、對象になるが、その中に、何等の區別を示さないところの意識を立てるもの。

この立場に於ては、意識機能が考へられてはゐるが、この機能は、或は現象の區別として、定義されるか、或は現象から推知せられ得る無意識的機能として、考へられるのである、故に、この立場は第一の立場に近接するものである、而も、この立場に於て、多くの場合、未分化的意識が問題とさるゝことが少い。

第三、情緒的機能が、直接に與へられ、知的なるものは、只、推定せられると考へる立場。

第四、知的情的兩種の機能が、直接的に與へられると考へる立場。

右四個の立場の中で、第一の現象心理學的立場に對して、第二以下は、凡て、機能心理學的立場であるが、就中、第二の立場は、現象心理學的立場に接近し、結局、現象機能の、兩個の立場の折衷とも見られよう、第三の立場は、所謂、情緒機能萬能の考想であつて、若し機能主觀性を高唱すれば、或は、自我的心理學と結合する契機をもつて、出

現する可能性があるのであるが、シュトゥンプに於ては、採られざる所である。

こゝに於て、彼が採らうとする立場は、その最後の立場、即ち、知的情的兩機能が直接所與の性質をもつものとして、考へられてゐるのである。

然らば、彼の主張しようとする機能は、如何なる意義を持つものであらうか、これを考察するには、所詮、彼の所謂、中性科學としての現象學の對象となるところの現象の區分と對立して、これを考察しなければならぬ。

彼の考想に従へば、現象には、次の様な種別が見られるのである。^(三)

第一、第一位(次元)の現象

感覺内容の外に、空間的延長、及その分配、乃至、時間的分配等はこれであるが、併し、感覺の快苦の要因は除かれる。

第二、第二位(次元)の現象

記憶像これである、例へば、單に、表象された色や、音は、この範圍の中に包含せられる。

この兩現象の外に、現象間には一定の關係、割合がある、これも各の二つの現象の

中に、それと共に、與へられ、吾人の方から、入れ加へられたものでなくて、その中に、それに於て、知覺せられる、これは知的機能の資料に屬するものであつて、それ自身、機能でもなく、尙更、かゝる機能の生産物でもない。

心的機能と言はれるものは、作用、状態、體驗と、名づけられるものを、包括する名稱であるが、従つて、知的情緒的機能を、凡て含むものである。だから未分化的機能から、分化した機能に至る各種の段階も考へられるわけであるが、シュトゥンプは、列舉的に、例へば、現象を認知する作用、現象を複合に總括する働き、概念構成作用、把握乃至、判斷作用、情意運動、情熱、乃至、意欲、等を例示してゐるが、こゝに、注意しなければならぬのは、彼に於ては、作用、乃至、機能は、心的活動、心的過程、乃至、體驗、それ自體を意味するものであつて、それらの活動、乃至、過程に依つて、生産された結果としての過程を、含まないのである。彼が、自ら指摘してゐる様に、例へば、血液循環をもつて、心臓運動の機能として考へられる様な意味の機能ではなくて、心臓の緊張、收縮、それ自體を有機的の機能と考へる場合のそれにも、比敵さるべきものである。

元來、分節したり、總括したり、肯定したり否定したりする各種の機能は、心的有機

體が、如何に活動するかの方法と性質、換言すれば、心的動作の態度によつて起る質的區別であるから、これに相應して、機能にも又、各種の差異相が出現するとも見られよう。蓋しシュトゥンプの機能心理學は、一面から見ると、自然科学的解釋への契機を多分に持ち、心的機能は、生理的機能からの類推によつて、考へられたものであるから、機能的様式の總括概念としての心的有機體の考想を、含み、他面に於ては、心理學を自我意識の地盤の上に建設しようとする傳統から離脱して進まうとするのであるから、若し、彼の立脚地から、精神といふ概念を考へるならば、機能と、その素質から成るところの精神物理的全體を意味するものと、考へるより外、道がないであらう。若し、傳統的聯合心理學の跡を辿るならば、先きにも屢々論述した様に、感覺や表象が客觀化的に、考へられて來てゐるのであるが、シュトゥンプに於ては、それらの代りに、機能組織が考へられてゐるとも見られる。

だから、彼に於ては、機能又は作用が、それ自身の機能的差異をもつて、直接に與へらるゝものであるが、それ自體は結局、機能聯關を構成してゐるものと、解釋せられ得る糸口を持つものである。兎も角、機能は、その機能的差異を持つものとして、直接